

PLAN INTERNATIONAL

WOMEN'S REFUGEE COMMISSION

Transforming Fragilities

私たちの声
私たちの未来

フィリピンのムスリム・ミンダナオ・バンサモロ自治地域（BARMM）における早すぎる結婚の防止に向けたリスクと適応策について

私たちの声
私たちの未来

フィリピン のムスリム・ミンダナオ・バンサモロ自治地域（BARMM）
における早すぎる結婚の防止に向けたリスクと適応策について

プラン・インターナショナルは、世界中の子どもたちの権利と女の子の平等の推進を目指しています。私たちプランは、すべての子どもに能力と可能性があると考えています。しかしながら、貧困や暴力、疎外や差別によりその力を発揮できないことも少なくありません。そして、その影響を最も受けるのが女の子たちです。独立した開発・人道支援組織として、私たちは子ども、ユース、支援者、関連団体とともに、女の子と弱い立場に置かれたすべての子どもたちが直面している現実の根底にある問題の解決に取り組んでいます。子どもが生まれてから成人するまで、その権利を守り、危機と困難に備え、対応できる力を身につけられるよう支援しています。その知見と影響力を活かして、私たちは地域・国家・地球レベルで人々の行動変容と政策の変革を促します。設立から80年以上、私たちは子どもたちとの強い絆の下、世界75ヵ国以上で活動を続けています。

女性難民委員会（WRC）は、紛争や危機によって避難した女性、子ども、ユースの生活を改善し、その権利を保護する活動を行っています。 私たちは、彼らのニーズを調査し、解決策を特定し、彼らのレジリエンス（心的回復力） を強化し、人道的実践に変化をもたらすためのプログラムや政策を提唱しています。

TF（Transforming Fragilities Inc.）は、調査、モニタリングと評価（M&E）、能力開発、組織開発を中心に活動するフィリピンのNGOです。技術・経営のスペシャリスト、平和と開発のエキスパート 、および定性的・定量的データ収集に経験豊富な地方の現地調査員の幹部で構成されています。 彼らは、国内外の開発機関に質の高いモニタリングと評価、調査と学習、能力開発、組織開発支援を提供し、また、ミンダナオ島やルソン島・ビアサヤ諸島の一部の州で、脆弱なコミュニティや状況の変革を支援するプログラムにも参加しています。

サイネフィン・カンパニー（The Cynefin Company、旧コグニティブ・エッジ）は、応用複雑系科学の限界に挑む行動研究・開発拠点です。世界中に分散する実務家のネットワークと協働する学際的なチームで、2005年にDave Snowdenによって設立されました。理論 を重視し、複雑系適応システム理論や他の科学分野の英知を 社会システムに適用するための方法、ツール、能力の構築に力を注いでいます。

免責事項：本レポートで使用している写真は 、あくまでもフィリピンの子どもや女の子たちを総体的に表したもので、早すぎる結婚の当事者の経験を示すものではありません。

謝辞

フィリピンでの本調査は、フィリピンのプラン・インターナショナル、Transforming Fragilities、WRCの共同研究の成果であり、ドイツ、フィリピン、USA、カナダ政府からの多大なる協力によって実現した。

本研究は、プラン・インターナショナルが実施する一連の多国間研究の一部であり、「人道的環境における早すぎる結婚」イニシアティブの下、人道的環境における早すぎる結婚を防止し、対応するための証拠に基づくプログラミングを提供するための段階的な取り組みに位置づけられる。フェーズ1は、オランダのプラン・インターナショナルとWRCの支援により実現した。

本報告書は、Transforming FragilitiesのAhmed Harris Pangcoga共同代表研究員とWRCのKatherine Gambir共同代表研究員によって共同執筆された。また、Transforming FragilitiesのJovar Pantao、Lolymar Jacint-Reyes、Judy Ann Lubiano、フィリピンのプラン・インターナショナルCirez de LeonとRabia Mustapha、 プラン・インターナショナル国際本部のClare Lofthouse、サイネフィン・カンパニーのEleanor SnowdenとAnna Panagiotou、WRCのJanna Metzlerに寄稿いただいた。

調査チームは、プロジェクトを通してリーダーシップの発揮 と技術支援を行ったSelena FortichとRyan Lander（フィリピンのプラン・インターナショナル）、研究代表者Janna Metzler（WRC）、Alexandra ShaphrenとColleen Fitzgerald（USAのプラン・インターナショナル）、Eleanor Snowden と Anna Panagiotou（サイネフィン・カンパニー）に感謝したい。さらに、Janna Metzler and Alexandra Shaphren for conceptualizing this study. 特に この研究のコンセプト作りをしてくれたJanna MetzlerとAlexandra Shaphrenに感謝する。

また、調査チームは、Transforming FragilitiesのJemiema Dagadasが、各州の集計チームを管理する上でリーダーシップを発揮してくれたことに感謝したい:. Norshid Tali、Hairia Kilam、Hasna Kadil、Raff Abdilla、Fahad Agak、Ronilo Mamudsod、Ofelina Makiri-Indag (マギンダナオ州); April Jane Romuros、Ana Leah Orandang、Maymarie Saplid、Asraf Sarip、Nashief Dibansa、Johaiber Madid、Sameeha Ali（ラナオ・デル・スル州）。Jemiema Dagadas、Sitti Nadzma Buisan、Aida Abba、Hadjison Tandih、Samir Ismael (バシラン州); Jocelyn Sumail、Fhadzra Karim、Nedzma Abdukadil、Alkhalid Bassaludin、Saddam Sakud (スールー州)。.

また、ボランティアとして調査に参加してくれた思春期女の子と男の子を含むコミュニティの人々、そして、私たちと一緒に時間を過ごしてくれた地元NGOのパートナー、地方行政機関の職員、子どもの保護とジェンダーに基づく暴力合同ワーキンググループ（JCPGVBWG）のメンバー団体に感謝したい。彼らの参加と洞察力によって、この調査は可能になったのである。

Global Affairs Canada

目次

謝辞 5
略称 7
用語集 8
はじめに 10
01 背景 11
早すぎる結婚の末路 12
人道的環境における 早すぎる結婚 13
フィリピンの人道的環境とバルム 13
フィリピンの早すぎる結婚とバルム 15
02 調査方法 17
研究の目的および目標 18
研究の正当性 19
デスクレビュー 19
重要な情報提供者とのインタビュー 19
SENSEMAKER® 20
参加型グループ活動 21
調査地の選定 21
サンプリング 22
分析 23
倫理 24
制限事項 24
03 調査結果 25
参加者の特性 26
ユースが直面する主要な問題 28
既婚の女の子 が直面する主要な問題 35
早すぎる結婚の原因 37
女の子のための支援、ケア、保護の体制 47
04 ディスカッション 57
ジェンダー規範と結婚の意思決定 59
家族の名誉と義務を保つための思春期の性の管理と義務 60
感文化と宗教 60
ピア・サポート（仲間同士の助け合い） 61
思春期の交流：恋愛結婚とソーシャルメディア 61
生活と経済的機会 62
公式・非公式教育 62
05 提言 63
プログラムへの提言 65
政策と提唱の提言 68
研究提言 70
06 結論 71
参考文献 73

ABBREVIATIONS

AFP	フィリピン軍
ARCHES	ARMMにおける生殖に関する健康サービスのアクセス性の向上
ARMM	ムスリム・ミンダナオ自治区
ASRH	思春期の性と生殖に関する健康h
BARMM	ムスリム・ミンダナオ・バンサモロ自治地域
BCMS	バンサモロ紛争監視システム
BIFF	バンサモロ・イスラム自由戦士団
CEFMU	強制された早すぎる結婚 および婚姻
CFSI	コミュニティ・アンド・ファミリー・サービス・インターナショナル
CP	子どもの保護
DILG	内務・地方行政局
DRRM	災害リスクの軽減と管理
DSWD	社会福祉・開発省
GAD	ジェンダーと開発
GBV	ジェンダーに基づく暴力
GCED	地球市民教育
IDP	国内避難民
INGO	国際NGO
IRB	組織 審査委員会
LGU	地方自治体
MILF	モロ・イスラム解放戦線
MNLF	モロ・ 民族解放戦線
M&E	モニタリングと評価
MHPSS	メンタルヘルスと心理社会的支援
MYDev	ミンダナオ島ユース育成プログラム
NAP-WPS	女性、平和、安全に関する国家行動計画
NCIP	先住民国家委員会
NCMF	フィリピン・ムスリム教徒国家委員会
NGO	非政府組織
OCRG	市民登録局
QIP	小規模な即効性のあるプロジェクト
PSA	フィリピン統計局
SEM	社会生態系モデル
SGBV	性暴力・ジェンダーに基づく暴力
SOGIESC	性的指向、性自認、性表現、および性的特徴
SRHR	性と生殖に関する健康と権利
TF	脆弱性の変革
TJRC	過渡的正義と和解の委員会
UIC	無原罪の聖母大学（ダバオ市）
UNHCR	国際連合難民高等弁務官事務所
UNICEF	国際連合児童基金
UNFPA	国際連合人口基金
VAW	女性に対する暴力
WEF	世界経済フォーラム
WRC	女性難民委員会

用語集

早すぎる結婚

強制された早すぎる結婚および婚姻（CEFMU）とは、民法、宗教法、慣習法のもと、正式な登録の有無にかかわらず、配偶者の一方または両方が18歳未満で、かつ/または当事者の一方または両方に対し十分 かつ自由なインフォームド・コンセントを行っていない場合の結婚および婚姻のことである（プラン・インターナショナル、2021年）。「強制された早すぎる結婚」という包括的な用語は、多くの異なるシナリオを包含している。

「早すぎる結婚」とは当事者の少なくとも一方が18歳未満であり、それゆえ双方の 完全な同意が得られていない正式な結婚または非公式な婚姻のことである。早すぎる結婚の大半は、年齢やその他の条件から、子どもの同意権が制限されているため、強制されたものと考えられている。

「早期結婚」とは、「早すぎる結婚」と同じ意味で使われることが多く、成年年齢（成人とみなされる年齢のこと）が18歳より早い国や、結婚時に当事者が18歳未満である結婚や婚姻のことを指す。また、早期結婚とは、配偶者がともに18歳以上であっても、身体的、感情的、性的、心理社会的発達の度合いや、その人の人生の選択肢に関する情報の欠如など、他の要因によって結婚に同意できないことを指すこともある。

「強制結婚」とは、年齢に関係なく、パートナーの一方または両方が、結婚または婚姻に完全かつ自由に同意をしていない、またはしなかった場合であり、強要または社会的もしくは家族からの強い圧力の結果など、結婚から逃れる ことができない場合を指す。強制結婚は、身体的、心理的、金銭的な強制を伴うことがあり、人身取引や、見合い結婚、早すぎる結婚など、さまざまな状況で発生する可能性がある。大人も子どもも強制結婚を経験する可能性がある。

「シビルユニオン 」とは、結婚の法的地位はないものの、どこから見ても正式な結婚に相当する非公式な結婚または自由な結婚のことを指す。.



シビルユニオンは、国や宗教当局によって正式なものではないことが多く、この件 についての説明や十分なデータの収集が困難である。シビルユニオンを区別して表現するために、合意または自発的なるユニオン、早期ユニオン、同棲など、いくつかの異なる用語が使用されている。

この調査と報告書では、**「早すぎる結婚」**という言葉は、少なくとも当事者の一方が18歳未満である結婚、正式または非公式なシビルユニオン、同棲を指すものとして使用される。早すぎる結婚の大半は、力関係や代替手段の欠如から強制されたものであると考えられている。

思春期

思春期は、子どもから大人への移行期であり、身体や心、世界との関わり方など、さまざまな面で劇的な変化を経験する時期である。思春期は、仲間とのつながりを強く持ち始める一方で、親や家族からの自立を求める。ジェンダー規範は幼児期から形成されるが、ジェンダー規範がより確立することになる思春期は、ユースのジェンダー規範、役割、期待に影響を与える重要な時期である[1]。思春期に経験する変化は普遍的なものだが、思春期に対する理解や定義は文化的背景によって様々だ。

思春期とは、10～19歳までの期間を指し、以下の年齢定義と合わせて考える。思春期 前期：10～14歳、思春期後期：15～19歳。15～19歳（プラン・インターナショナル, 2020;人道支援活動におけるユースのためのコンパクト）。



プラン・インターナショナルは2019年、人道的局面にある早すぎる結婚への取り組みをスタートした。

これは、人道的局面にある早すぎる結婚の防止に向け、エビデンスに基づいた実践的プログラムを段階的アプローチを用いて行うものである。この取り組みは、フィリピンのバンサモロ・ムスリム・ミンダナオ自治地域（BARMM）の紛争下で強制移住を余儀なくされている各コミュニティ、並びに極度の食糧不足に陥っているジンバブエChiredziの各コミュニティで女の子が中心となって行ったコミュニティベースの調査で構成されている。この調査やプランとWRCのプログラム実施と調査で得た知見、その他関連するエビデンスを活かして、今後、人道的局面にある早すぎる結婚への対処、結婚年齢の引き上げ、防止方法について方策がまとめられていくだろう。この報告書は、そのプロセスとフィリピンで実施した調査結果をまとめたものである。

BARMMのラナオ・デル・スル州、マギンダナオ州、バシラン州、スールー州で実施されたこの調査は、プランの委託でWRCと連携して行われ、国内での実際の調査にはTransforming Fragilitiesが当たった。これは、BARMMの特定地域に暮らす思春期のニーズと優先事項に関する調査だが、全体としては、早すぎる結婚の防止に向けた女の子主導型のコミュニティベースのアプローチを開発し、さらには、女の子たちと彼女らの暮らすコミュニティを、支援を受ける側から、自ら参加する高い能力を持ったリーダーへと成長させる目標の下、実施されるものである。





01

背景



早すぎる結婚が生む現実

早すぎる結婚は人権侵害のひとつだが、他の権利侵害と関わりながら、女の子と女性の人生全体に重大な影響を及ぼす。これには、暴力のない生活を送る権利、到達可能な最高水準の健康を得る権利、教育を受ける権利などが含まれるが、これらに限定されるものではない（国連、1989年）。また、女の子の自由を奪い、経済、社会、政治の分野に貢献する可能性を低下させるため、こうした分野の発展にも、広範囲に影響は及ぶ。

早すぎる結婚は、個人、対人、家族、社会の各レベルで深刻な悪影響を及ぼす（Glinski 2015; OHCHR）。個人レベルでは、早すぎる結婚の悪影響は心身の健康に及ぶ（Gage、2013年; Godha 2016年）。

調査によると、既婚の 思春期の女の子は、第一子の出産前に現代的な避妊法を利用する可能性が低く、そのため早期妊娠や望まない妊娠、STI （性感染症）、HIVのリスクが高まっている（Ghoda、2013年; Santhya、2007年）。セックス、その他性と生殖の健康上の決定に関するものも含めて、人との関わりの中で女の子たちの交渉する力が低いことが、早すぎる結婚に関係していることも少なくない。（Presler-Marshall、Jones, 2012年）。

また、18歳になる前に結婚する女の子は、パートナーから 身体的、性的、心理社会的な暴力を受けるリスクも高い（Kidman、2017年; Tenkorang, 2019年; Yount、他, 2016年）。早すぎる結婚と教育水準の低さにも関係性がある。ただ、早すぎる結婚と妊娠が、中途退学の理由にも結果にもなりうることを考えると、この関係性は複雑である。（Psaki、他、2019年; Nyugen、Wodon 2012年; Birchall、2018年）。

女の子が妊娠したり結婚したりすると、学校を続ける可能性は低くなる。と同時に、女の子が結婚および/または妊娠する可能性は、学校を中途退学 している女の子ほど高くなる（Birchall、2018年） 最後に、調査では、既婚の女の子は未婚の女の子に比べて社会的・物理的に孤立しやすく、そのため、意思決定やより広い市民社会への参加が制限されていることが明らかになっている。（Glinski、2015年）。

家庭やコミュニティのレベルでは、早すぎる結婚と早すぎる妊娠や妊娠回数の多さには関連性があり、それが母親の健康、子どもの健康、家族のウェルビーイング（幸せ） に悪影響を及ぼす（Yaya、他, 2019年; Glinski、他, 2015年）。例えば、早すぎる結婚は、母親の死亡率や罹患率だけでなく、乳児死亡率（Raj、2013年）や、早産、、子どもの栄養不良など、子どもの健康に対するさまざまな悪影響を招いている（Fall、他、2015年）。早すぎる結婚をした女の子たちの教育水準が低く出産率が高いことが、女の子たちとその子どもたち、さらに家族全体に不利な結果をもたらしている。教育水準が低く出産率が高いことで、適切な労働市場に参加しにくくなり、そのため、生涯賃金が低下し、家庭の生活レベルも低下してしまう。Wodon、他 2017年）。

早すぎる結婚はさらに、その国の 経済、社会、政治的発展に対して、より広く影響を及ぼす。 女の子が学校を中途退学すると、経済的な機会を得ることが非常に 難しくなり、女の子自身の生産性に影響が及び 、家族、コミュニティ、社会への貢献度が低下してしまう のだ。W女の子たちの公的生活へのアクセスが制限されれば、彼女たちが社会的政治的意思決定プロセスに参加する可能性が低下し、国の経済・社会・政治的発展に力を発揮する機会が少なくなる。（Glinski、他 2015年）。

人道的局面にある早すぎる結婚



世界では、思春期の女の子のおよそ5人に1人が18歳になる前に結婚している。これは、毎年1200万人の思春期の女の子が早すぎる結婚をしていることを意味する（ユニセフ、2020年）。

世界的には早すぎる結婚への取り組みが進んでいる（ユニセフ、2014年; Lo Forte、他）とはいえ、世界の一部の地域では、主に危機や移住を背景として、早すぎる結婚率が依然として上昇している（UNFPA、2021年; ICMCEC、2013年）。COVID-19の大流行の影響により、22年ぶりに学校閉鎖や極度の貧困が増加したことも、早すぎる結婚率の上昇と関連している（OCHA、2021年; ユニセフ、2021年）。ユニセフ（国連児童基金）は、COVID-19が女の子の心身の健康、教育へのアクセス、家庭やコミュニティの経済的不安に与える影響により、2030年までにさらに1000万人の思春期の女の子が早すぎる結婚をし、世界全体では1億人以上になると予測している（ユニセフ、2021年）。

紛争とそれに関連する移住の結果、早すぎる結婚のリスクが大幅に上昇していることを示す証拠が増えている（Hunersen、他 2020年; Rialet、2019年; Buchanan、2019年; ユニセフ、2017年; UNHRC、2020年）。学校の閉鎖、サービスの不足と/あるいはサービスへのアクセス不能、治安の悪さ、生計手段の喪失、性・ジェンダーに基づく暴力（SGBV）のリスクの増大は、紛争、自然災害、病気の流行など人道的にさまざまな状況下で早すぎる結婚を増加させている要因のごく一部にすぎない。（OHCHR、プランインターナショナル、Girls Not Brides, 2020年; ユニセフ、2021年）。

フィリピンとBARMMの人道的背景

フィリピン

2021年、フィリピンは、国際平和武力紛争法研究所（IFHV）の世界リスク指数において、172カ国・地域中8番目に災害の多い国としてランク付けされた。この指標は、地震やサイクロンなどの自然災害のリスクを考慮した上で、それらに対する社会の対応能力を算出したものだ。島国であるフィリピンは、海面上昇、台風、地震に加え、武力紛争などの影響に常にさらされている。毎年、フィリピンには平均6～9個の台風が襲来し（Blanc、Strobl、2016年）、南部では武力紛争が長引き 、2019年には民間人にとって世界で4番目に 危険な国となっている（Bergonia、2019年）。

BARMM

BARMMは、フィリピン南部に位置する自治地域である。BARMMは、フィリピン政府とモロ族の分離独立派との50年にわたる武力紛争を経て締結された和平協定の一環として、2019年に設立された。BARMMは開発が遅れ、ガバナンスも脆弱で、不公平な富の分配が日常的に行われている、フィリピンで最も貧しい地域である（Abuza、Lischin, 2020年; ACAPS; フィリピン統計局（PSA）、2018年）。

BARMMでは繰り返される武力紛争と周期的に発生する自然災害により、2021年以降移住を強いられた住民は470万人に上っている（OCHA、2016年）。T本研究では、武力紛争と周期的な自然災害の影響を受けているBARMM内のマギンダナオ州、ラナオ・デル・スル州、バシラン州、スールー州に焦点を当てて調査を行った。

BARMMにおける武力紛争と人権侵害

BARMM は、フィリピンで最も多くの武力紛争の舞台となり、国内のどの地域より多くの人権侵害と強制移住が行われてきた。1970年代以降、フィリピン政府はモロ族や「ルマド」と呼ばれる先住民族とともに、BARMMで反政府勢力と戦ってきた。また、1960年代後半から政府は、政府を打倒して労働者階級が主導する新しい国家の樹立とフィリピンに対する米国の影響力を立ち切ることを目標にフィリピン全土で活動しているフィリピン共産党の武装組織「新人民軍（NPA）」とも衝突を繰り返している。

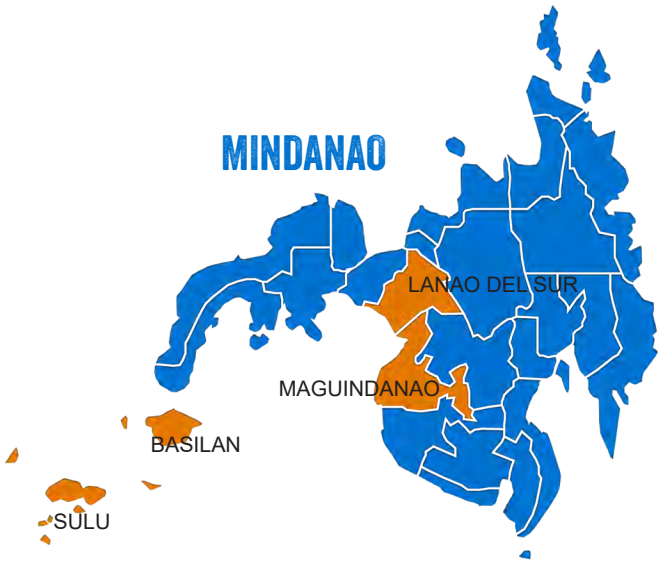
ミンダナオ島では2000～2013年の間に、約350万人が紛争による避難を余儀なくされたが、避難民の大半はBARMMに集中しており（IDMC、2013年）、BARMM の5つの州はすべて国内の人間開発指数（SHDI）で下位にランクされている。

この指標は、所得、健康、教育レベルとともに 、国内の 社会経済的発展度を評価した参考指標である。2006～2018年にかけてフィリピン全体の貧困率は低下しているにもかかわらず、BARMMの貧困率は47.1～61.3%増加し、国の貧困率とBARRMの率の差は広がっている（20.5%から 44.7%）（UNDP、2021年）。平均寿命（国家統計局、2011年）、就学率（UNDP、2021年）、数字と識字率（PSA、2020年）、BARMMの所得水準（UNDP、2021年）は国内最下位である。COVID-19と関連する行動制限 の結果、所得と教育対策は大幅に悪化すると予測されている（UNDP、 2021）。

モロ族の自治領についてフィリピン政府とモロ・イスラム解放戦線（MILF）との間で取り決めた先祖代々の土地に関する合意覚書（MoA-AD）の差し止め により、2008年、フィリピン政府とMILFとの紛争が再開された。紛争の結果、ミンダナオ島全域、特にBARMM内に暮らす75万人が移住を強いられ、何十万もの人々が避難所、再定住先、または受け入れ先での生活を余儀なくされた（DSWD、2009年）。

その後2012年、政府とMILFの和平交渉の結果、枠組み合意が締結。この合意により、2016年までにARMMに代わる新たなバンサモロ政府を創設することが可能となった。Tしかし、この合意は、バンサモロ民族の自決権を最初に主張した武装組織モロ民族解放戦線（MNLF）と政府との間に摩擦を引き起こし、2013年、MNLFは1996年の和平 協定を不服として、「バンサモロ共和国 」の独立を宣言した（PhilStar, 15 August 2013）。その直後、ザンボアンガ市でフィリピン軍とMNLF が衝突、衝突はバシラン州に広がり、ザンボアンガ市を広範囲に破壊し、 約12万人が避難民となった（NDRRMC、2013年10月1日）。

BARMMにはその他に、アブサヤフ・グループ（ASG）とバンサモロ・イスラム自由戦士（BIFF）という2つのイスラム系武装集団がある。ASGは、Abdurajak Janjalanによって結成され、アルカイダの影響を受けたイスラム分離主義運動 の組織である。2012年、MILFの分離派であるBIFFは、マギンダナオ州とノースコタバト州でフィリピン軍を攻撃。この衝突による避難民は6万人に上り、2013年には、北コタバトでBIFFによる攻撃により、さらに2万人が避難した（Rappler、2013年9月23日; Philippine Inquirer, 2013年8月13日）。



マギンダナオ州
マギンダナオ州は、BARMMの中で最も武力紛争の影響を受けてきた州である。2000～2004年の間に、またさらに2008年にも再び強制移住を経験した住民は成人人口の半数以上に上った。2000～2010年の間には、同州の5世帯に4世帯（82%）が強制的に移住させられた。さらに、国内避難民（IDP）の75%が強制移住を2回以上経験している（WFP & Worldbank Group、 2011年）。

ラナオ・デル・スル州
B2000～2010年の間に 、ラナオ・デル・スル州では全世帯の約半数（47%）が 強制移住の影響を受けている（WFP、World Bank Group、2010年）。また、同州では2017年のマラウィ包囲網に端を発した危機が長期化している。2017年5月23日、「イスラム国」と呼ばれる武装集団に忠誠を誓う戦闘員らが州都マラウイ市を襲撃した。これらの武装集団には、マウテ・グループやASGが含まれる。包囲は5カ月間続き、戦闘員920人、兵士165人、民間人47人が命を落とした。 同市と隣接する自治体からの移住を余儀なくされた住民は約36万人に上った（アムネスティ・インターナショナル、2017年11月17日）。

バシラン州
バシラン島を領地とするバシラン州では、政府軍とMILFやASGとの衝突、あるいは周期的に繰り返すリド（部族間抗争）などの戦闘により、過去10年間で人口の約80%が避難生活を強いられている。

スールー州
BARMMで島を領域とするもう一つの州、スールー州でも、各コミュニティで強制移住が繰り返され、毎年何千もの住民が 避難生活を余儀なくされている。スールー州の紛争と 社会不安のほとんどは、フィリピン軍（AFP）とスールー州に拠点を置く2つの武装グループ、MNLFとASGとの間の武力紛争によって引き起こされている（UNHCR、IOMフィリピン）。

これら4つの州とそれぞれの危機的状況については、付属文書Cに詳述されている。





災害
フィリピンは世界で最も気象災害や地震災害に脆弱な国の一つである（World Bank、2005年）。地理的に台風、地震、火山噴火、土砂崩れ、モンスーン、洪水などの災害が起こりやすく、BARMMも例外ではない。実際、災害の影響に加え、武力紛争、治安の悪さ、貧困が重なり、経済的な負担が重くのしかかっている。（世界銀行）。例えば、2012年の台風Bophaでは、ミンダナオ島で100万人を超す住民が避難。この地域のココナッツとバナナの農園のほとんどが破壊され、何千人もの人々が生計手段を失い、家族を養うことができなくなった。（IMDC、2013年）。

フィリピンとBARMMにおける早すぎる結婚

フィリピン

2009年、フィリピン政府は、女性や特に先住民、モロ人、障害者、移民労働者など、社会的・経済的に非常に困難な状況下にある人々に対する差別の撤廃を目的とした「女性のための大憲章」を制定した（PSA、2010年）。フィリピンで今なお根深いジェンダー不平等の後ろ盾となっている古い抑圧的な法律と共存する形とはいえ、この法律は女性の権利にかなり大きな影響を与えている。

ただし、国としてジェンダー平等に向けて前進しているとはいえ、特に極度の貧困や人道的な危機を背景に移住を余儀なくされている住民の間では早すぎる結婚が今なお行われ続けており、その実像は複雑で矛盾したものとなっている。

フィリピンでは、過去10年間、早すぎる結婚の撲滅に向けた歩みが停滞している。2017年の国民生活基礎調査（NDHS）によると、18歳までに結婚したと答えた25～49歳の女性の割合は2013年～2017年の間は15%と変わらず、1993年の19%からわずかな減少にとどまった。15～19歳の思春期の女の子の約10人に1人（9%）が出産を経験 。同様に、思春期の妊娠の動向についても、過去10年間、実質的な進展は見られない。実際のところ、思春期の妊娠は 、1993年の7%から2017年には9%と全体的に増加している。BARMMでは、2017年の思春期の妊娠は、発生 率が15～18%（ソックスカルゲンが15%、北部ミンダナオが15%、ダバオが18%）と比較的高い水準であった。しかし、これらの統計では、自宅出産が多い実態や出生登録の遅れ（または無登録）についての詳述は行われていない。（PSA、ICF、2018年）。

フィリピン

BARMMは、人口の大半がイスラム教徒であり 、その自治的な統治システムを背景に、住民はイスラム教の影響を受けた個別のガイドラインと ルールに従う。フィリピンの家族法では、法律上結婚できる最低年齢を18歳と定めているが、BARMMでは、結婚に関する法律は大統領令1083号やイスラム個人法のきまり（PD 1083）が適用されることが多い。そのため、この法律の規定により、12歳の女の子でも、月経が始まることで判断される思春期に達しており、ワリ（保護者）がシャリーア地方裁判所を通じて請願すれば、結婚式 を行うことが合法とされている。Tフィリピン・ムスリム教徒国家委員会（NCMF）は、PD1083へのいかなる修正にも公然と反対している。法が定める結婚最低年齢を変えることは、伝統的なモロの宗教上の規範に「西洋的な」価値観を押し付けるものだとして、結婚最低年齢を変える法案を、新しく設立されたバンサモロ移行局（BTA）議会メンバーらが支持しない可能性がある（リチャードソン、ウイルソン、2019年）。

バンサモロ族はBARMMの人口の大きな割合を占めているため、求婚や結婚に関する決定にもモロの文化的慣習が影響を及ぼす。

彼らの慣習にはイスラム教とイスラム教以前の要素が入り混じっており、

(a) 結婚の最終的な決定は両親が行うことが多い

(b) 結婚は、その家のコミュニティ内での地位に基づいて行われる

(c 女性は実家の社会的階層や宗教の異なる男性と結婚することは許されず

(d 結婚は新婦が15歳、新郎が17歳でもすることができる

(e 持参金の額は、(教育水準を含めて)コミュニティ内での新婦の位置づけと、この地位に見合った額を新郎の家が交渉して調達できるかどうかで決まる

等、結婚のプロセスも独特なものになっている。また、新郎の家から新婦の家へ金銭または 物品を贈るという決まりもある。こうした内容を厳格に守るかどうかは、民族や種族によって異なり、昔は決まりに厳しく従ってきたが、現在ではある程度守られているに過ぎない。(Perdon, 2013年)。

BARMMのいくつかの自治体では、こうしたモロ族の伝統とイスラム法の影響を背景に早すぎる結婚が行われているとの報告があるが、ラナオ・デル・スル州、マギンダナオ州、スールー州、バシラン州には早すぎる結婚の割合に関する体系的な記録がなく、これらの州で早すぎる結婚がどの程度行われているかは不明である。2017年のNDHSによると、フィリピンでは初婚年齢の中央値は22.5歳だが、BARMMでは20.8歳、2%の女性が15歳までに、そして15%が18歳までに初婚を経験している。(PSA、ICF、2018年) しかし、この調査では、BARMMでどの程度早すぎる結婚が広がっているかに関するデータは得られない。

2018 年10月、Bernadette Herrera-Dy下院議員とEdcel Lagman下院議員は、早すぎる結婚の行為とその助長、結婚式の挙行 を " 公的犯罪 " とすることを求める法案をフィリピン下院に提出した。この法案が成立すれば、早すぎる結婚はすべて法律上無効となり、存在するすべての早すぎる婚姻関係が認められなくなることは明白である。

Herrera-Dy代表は、NCMFとNCIPに対して、「結婚の慣習に関する合意形成と変更義務化に向け注力する」ことを求めた(Cervantes, 2018)。これは、この法案が成立しても、イスラム教徒は対象外とされる恐れがあるためだ。例えば、PD1083の第3条(1)では、イスラム法の規定と一般に適用される法律との間に矛盾がある場合は、前者が優先されると明記されている。この法案は両院で承認され、今後署名を経て、成立が予定されている。

激しい紛争下にあるBARMMで最も翻弄されるのは、若い女性と女の子たちだ(Dwyer、Guiam, 2013年)。だが、肉体的・精神的暴力に苦しんでいる彼女たちのニーズと優先事項は、プログラム設計に反映されていない。彼女たちは、紛争の度に繰り返される強制移住で学校教育を継続することができず、絶望的な貧困生活を強いられ、セクシュアルハラスメントや暴行など人権侵害のリスクにさらされている。

社会的経済的に困難な状況下にある彼女たちが、生きていくためにはつらい下働きをする以外に道がないことも多く、人間の日常的な要求を満たし、基本的人権を行使できる状況からは程遠く、多くの課題が山積している(Dwyer、Guiam、2013年)。BARMMの思春期の女の子たちが抱える早すぎる結婚のリスク・その要因と影響を理解することはもちろん、彼女たちの支援・ケア・保護に関する現行の地域システムがどの程度早すぎる結婚から彼女たちを守り、既婚の女の子たちのニーズを満たしているか、その実態を知ることが急務である。現行のシステムは、家族やソーシャルワーカー、教師などの人材と、各レベルが連携して活動する組織で構成されている。

実態を知ることは、極度の貧困と人道的危機の広がるBARMMにおいて現行の法的環境の中で早すぎる結婚の防止に向けてより効果的に活動する上で、より良いヒントとなるだろう。



02

調査方法



本調査の目的と各目標

早すぎる結婚の防止と対応において何が有効で何が有効でないかを裏付けるエビデンスは乏しく、プログラムを通して思春期の女の子と彼女らに影響を与える人びとをどのように支援するべきか、また、個人、家庭、コミュニティの各レベルで早すぎる結婚の要因となっている問題にどう対処するべきか、その道筋は見えない (Chandra-Mouli、Plesons, 2021年; Rife他 2012年)。MalhotraとElnakib (Malhotra、Elnakib 2021年）が、過去20年間に行われた早すぎる結婚に関するプロジェクトの効果を体系的に評価した結果、特に思春期の女の子の能力と機会の強化に焦点を当てたものなど、テーマをひとつに限定したプロジェクトの方が、複数のテーマを扱うプロジェクトに比べると、規模の拡大や持続可能性の点で投資効率が良い場合があるとの結論に達した。しかし、Chandra-MouliとPlesons（Chandra-Mouli、Plesons、2021年）は、今後の行動について提言を行うには、複数テーマのプロジェクトの計画設計について実施と評価に関する課題の影響をさらに調査する必要があると主張している。現時点では、エビデンスが出始めたところで、緊急事態下で一層あいまいなものとなっている。（Chae and Ngo、2017年）。したがって、早すぎる結婚を効果的に防止し、既婚の思春期の女の子たちを支援するプログラムのコンセプトを固めるためには、早すぎる結婚の背景となっている様々な要素も含め、人道的局面にある思春期の女の子のニーズと優先事項をしっかりと把握することが急務である。

この調査では、BARMMなど、早すぎる結婚が人道的局面で拡大しているその要因についてエビデンスを固め、思春期の女の子のニーズと優先事項、さらに早すぎる結婚を防止して人道上のリスクを軽減する上で必要な支援システムを体系的にまとめることを目指した。この基本に根差した本調査は常に女の子とコミュニティを活動の中心に置き、実際に活動にあたる者にとって、より適切なアプローチ法を築く上で重要な学びとなる。

本研究では、今後のプログラム開発と政策提言に向けたエビデンスを提供するために、具体的に以下の課題を中心に調査に取り組んだ。

01 BARMMに住む思春期の女の子たちのニーズと優先事項は何か

02 BARMMにおける早すぎる結婚の主な拡大要因は何か

03 思春期のユースの強みと適応能力のうち、女の子たちのリスク軽減と健康の向上を促進および/または保護するものは何か

04 思春期の女の子を早すぎる結婚から守るために、家族、コミュニティ、システムにはどのような適応能力やリソースが存在するか。
早すぎる結婚のリスクにさらされている女の子と、すでに結婚している女の子の両方の状況 を改善 するために、それらの能力をどのように活用することができるか。

05 既存のプログラムとサービスは、BARMMの思春期の女の子のニーズにどのように応えているか

06 思春期の女の子が既存の思春期向けプログラムを利用・アクセスする上で、主に何が障壁と保護要素になっているか。

この調査では、複数の方法を取り入れた参加型をとり、女の子を中心としたコミュニティベースのアプローチを用いた。女の子を中心としたコミュニティベースのアプローチとは、調査ツールの設計やデータ収集・分析、さらに調査結果から実施可能なコミュニティ主導の解決策を導き出すまで、さまざまな局面で思春期の女の子と大人のコミュニティ住民らが参加することを意味する。 方法としては、デスクレビュー（振り返り）、Sensemaker®を用いた参加者主導のストーリーテリング、思春期と大人のコミュニティ住民らによる参加型グループ活動、主要情報提供者による関連する組織関係者へのインタビュー（KIIs）などがある。早すぎる結婚の影響を受ける思春期は、女の子が圧倒的に多い。そのため、思春期の女の子と女性の視点をより多く取り入れ、彼女らの体験とニーズに焦点を置くように努めた。しかし、ジェンダー 力学、力の不均衡、結婚が男の子に与える影響などを今後のプログラム開発や行動変容のための行動に確実に 反映させるため、思春期の男の子たちの声も取り上げるように努めた。

早すぎる結婚という問題に対するBARMMの各コミュニティの住民の意識を考慮し、参加型の活動では、早すぎる結婚というテーマを直接取り上げず、参加者が各自のニーズを把握し、優先順位をつけ、コミュニティ内での実際の結婚習慣についてそれぞれの考えを共有したり、コミュニティの思春期の女の子を保護・サポートする人材や組織などのリソースについて話す形にした。

データ収集は2020年1～4月にかけて行われた。COVID-19の感染リスクを低減するため、自治体の保健指導や新興感染症対策機関（IATF）に従い、方法は一部変更して行った。マギンダナオ州でのKIIは、対面ではなく、オンラインで実施。家庭内での意思決定にCOVID-19が与える影響とCOVID-19が早すぎる結婚のリスクの上昇あるいは低下にどう影響しているかを把握し、また早すぎる結婚の防止活動にコミュニティ外部の者がどのような形でかかわることができるかを知るために、インタビューの手引きにも変更が加えられた。

参加型グループセッションは、自治体の保健指導に基づき、IATFのプロトコルに従って、参加者6人または8人未満の対面式で行われた。

調査の正当性

この調査は、人道的局面にある思春期の若者のニーズと優先事項について、現在進むエビデンスの集積の一翼を担い、今後、フィリピン、さらに全世界で人道的側面から早すぎる結婚に取り組む際に、女の子中心のコミュニティベースのアプローチについて情報を提供していく。ユースが自らの課題を決め、リスクとサポートを特定し、取り組むべきことに優先順位をつけ、ユースの声が高まることを目指して、参加型の方法が選ばれた。こうした方法により、ユースとケア従事者、その他女の子の人生に影響を与える大人たちは、健康で回復力があることの意味を明確にする機会を得ることができた。この手法の目的は、子どもを対象にした、より広範な保護システムの中で誰がユースの力の回復に注力するべきかを把握することだった。そして、この手法を通して、現行の子どもの保護システム、ユースの支援にとって、さらなる強化の可能性も含めた非常に重要な連携、さらにその間の溝を埋めるためのユース主導の解決策が何かを、ユースとケア従事者が協力して明確にするよう働きかけた。 早すぎる結婚の根底には、不平等なジェンダー規範と力関係があるため、分析の際には適した社会規範の枠組みが用いられた。プログラムの実施が、早すぎる結婚のリスクと拡大要因にいかにダメージを与えられるかを理解することが、その目的だった。.また、その枠組みを通じて、思春期の女の子と家族、より広い地域システムの適応力が、人道的背景に内在する社会的構造的要素 を含む社会のあらゆるレベルで思春期の女の子たちの健やかな成長をどのようにサポートするのかも探る。

デスクレビュー

2019年11月～2020年1月にかけて、出版済の論文、未出版の文献、さらに早すぎる結婚の広がりと習慣・BARMMとフィリピン国内における防止プログラムに関する入手可能な統計データのデスクレビュー（再考察）を行った。この作業としてさらに、武力紛争と災害の両方を背景に繰り返される強制移住を含む、ミンダナオにおける人道的状況の評価も行い、計87の資料を再考察。調査で行う質問や方法、研究結果に影響を与える数値・統計の母数（パラメーター）が一貫したものになるよう、デスクレビューが行われた。

重要な情報提供者とのインタビュー (KIIs)

KIIは、コミュニティベースの組織（CBO）、国内の非政府組織（NGO）、国際NGO（INGO）、市民社会組織（CSO）、サービス提供者、国連関係者、政府関係者に実施した。

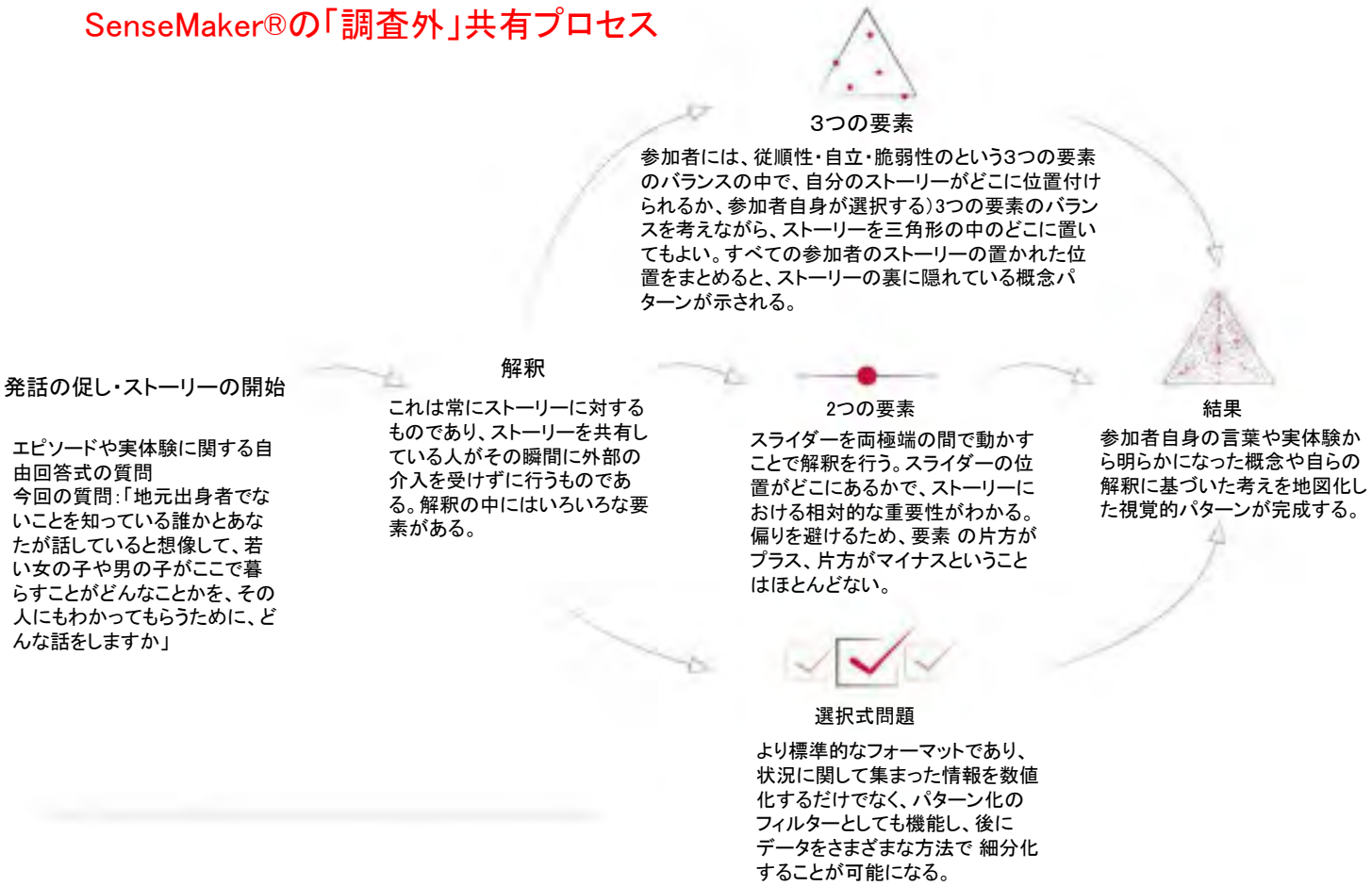
ユースのニーズや優先事項、早すぎる結婚の慣習、対象コミュニティにおける既存のサービスやプログラムを利用する際に何が障害あるいは促進要因になっているかを考察するために、KIIの手引きが作成された。ラナオ・デル・スル州、マギンダナオ州、スールー州、バシラン州の紛争下で避難を余儀なくされたコミュニティにおける早すぎる結婚の慣習と/またはプログラムについて深く考察するため、意図的に選んだ個人を対象にKIIを実施した。ラナオ・デル・スル州でのKII は、2020年1～2月に対面で実施した。ラナオ・デル・スル州以外のKIIは2020年2～4月に、あらかじめ決まった質問と自由裁量で行う質問を通して対話を深める方法で、パートナー組織の状況に合わせた形で実施された。ほとんどのKIIは1対1で行われたが、1回のみ同じ組織の3人対1人で行われた。インタビュー時間は1～2時間であった。すべてのKIIは、インタビュアーと回答者が合意した視覚的・聴覚的にプライバシーが保たれる場所、主に回答者のオフィスで実施された。KIIは録音され、訓練を受けた記録係がインタビュー中に現地の方言で一字一句書き取った。Aインタビュー終了後、録音した音声をインタビュアーが聞いて逐語録を完成させ、確認後、現地語から英語に翻訳して分析に使用した。

SENSEMAKER®

SenseMaker®によるデータ収集は、2020年2月14日～3月6日にかけて実施された。SenseMaker®は、回答者や語り手が自分の実体験 について短い自由な語りを記録することができる調査・分析ツールである。 SenseMaker®では、回答者が自分のストーリー（体験談やエピソード）を解釈したり、意味づけしたり、意味のフレームワークと呼ばれる質問を通して、その重要性を伝えることができるため、女の子主導の調査に使われる手法のひとつである。意味のフレームワークは調査のテーマに沿った一連の質問項目で、それを通して、語り手が自身のストーリーを分析できるようになる。（Van der Merwe SE他 2019年）。SenseMakerr®は、情報収集とストーリーの記録に使用され、思春期の女の子のニーズと優先事項、早すぎる結婚の要因に関する理解を深め、彼女たちの生活を主に誰が支援しているかを知る上で役立った。また、思春期の女の子とその家族、コミュニティが思春期の女の子をケア・保護するための適応力を探るためにも使用された。SenseMaker®は、回答者自身が自分のストーリーを分析できるようにすることで、分析の中で回答者の見解に優先順位をつけることができる。このアプローチは、a) 解釈や文化的なバイアスを軽減し、b) 回答者の視点をプロセスの中心に据えることで、調査プロセスがより偏りの少ないものとなる 。意味のフレームワークに回答することで、大量のデータ（メタデータ）が引き出され、何千もの視点を収集してパターン認識が行えるようになる。

SenseMaker®インタビューツール（＝意味のフレームワーク）は、既婚・未婚の思春期の女の子、ケア従事者や他の大人のコミュニティ 管理層と共同で設計された。I意味のフレームワークの核となるコンセプト を特定するため、2020年22月8日にBARMMのラナオ・デル・スル州イリガン市で、27人の大人のコミュニティ住民と既婚・未婚の思春期の女の子4人を集めて共同デザインワークショップが開催された。

SenseMaker®の「調査外」共有プロセス



まず、エピソード・グループ（グループでのストーリーテリングなど）とドリームマッピングなどの参加型グループ活動を、対象コミュニティのユースが直面している中心的課題を引き出すために実施 Tデスク・レビューと調査でおこなった質問によって浮かび上がった課題とコンセプトに基づいて、コア・コンセプトが設定された。最後に、意味のフレームワークを組み立て、英語から現地の主な 言語であるタガログ語に翻訳し、アプリベースのソフトウェアに組み込んだ。

データ収集に先立ち、ユースを含むコミュニティ住民らを対象にSenseMaker®の試験的運用が行われた。そして、SenseMaker®アプリベースのツールで作業するための訓練を受けた若い男女の集計チームにより、タブレット端末を通じてデータ（ストーリー）収集が行われた。　男性の集計員は男の子と男性に、女性の集計員は女の子と女性にインタビューした。回答者から聞いたストーリーは、タブレット端末を通して録音された 。その後、回答者は一連の視覚的なヒントと複数選択式の質問に答えて、自分のストーリーを分析し、自分と同じ層の情報を共有した。インタビューは約15～35分で、回答者の 自宅の屋内または屋外 にあるプライベートな空間で行われた。また、それぞれの話の特徴を集計員がテキストで記録し、それをソフトウェアにアップロードした。調査の中心は、主に思春期の女の子が語るストーリーであったが、より広く、家族 、コミュニティ、社会における早すぎる結婚に対するコミュニティの考え方について、あらゆる視点を含めることが重要であった。そのため、思春期の男の子、両親、保護者、信仰指導者を含む地域の指導者からも話を聞いた。

参加型グループ活動

既存の子ども保護システムが、それぞれの環境下で思春期の女の子をケア・サポート・保護する強みと限界を把握するために、12～19歳のユースとその両親または保護者、その他のコミュニティ管理層（宗教指導者、コミュニティリーダー、教師など）を対象に参加型グループ活動を実施した。ファシリテーターが回答者らを参加型活動に取り組ませる際には（1）思春期のウェルビーイング活動（World Vision)が地元の暮らしの中でユースの幸せに影響を与える要素を回答者が探る上で役立ち(2) 必要なサポートや保護といったものを受けていない可能性のあるユースに関する対話からSpider DiagramやWeb of Support Activity（World Vision）を通して前進できるよう、(3)さらに、回答者が、やはりSpider DiagramやWeb of Support Activityを通して、各コミュニティにあるユースをサポート・支援する地元のリソースを探り、見つけることにつながるよう設計されたツールを使用した。また、参加者が主なコミュニティ・リソースの位置に加え、思春期の女の子にとって安全でない可能性のある地域を特定するコミュニティ地図づくりが実態に即した物になるよう、参加型アプローチが用いられた。

地図の作成後には、ファシリテーターが中心となって、女の子たちがコミュニティ内で行ける場所と行けない場所について質問を行い、その理由を録音し、サービスへのアクセスとサービス間の違いについて話し合った。(調査ツールは付属書Aを参照)こうした活動は、これまでは他の人道的局面で行われていたが、BARMMの状況に合わせて実施された。

グループ活動は、NGOや地方自治体の建物にある 換気の良い部屋や、視覚・聴覚的にプライバシーの確保された女性　にとって 安全な空間で行われた。さらに、子どものグループは、配偶者の有無と年齢層で、 12～14歳、15～17歳、18～19歳に分けられ、20～45歳は成人の男性・女性グループになった。各グループの回答者数は4～13名であった。

女性ファシリテーターは思春期の女の子と女性を対象に、男性ファシリテーターは思春期の男の子と男性を対象に調査活動を行った。訓練を受けた記録係が各セッションを録音 し、活動の成果物（図面、コミュニティマッピングなど）を写真に収め、回答者らの話し合いを書き起こした。.写真、文書、録音音声 は、各参加型セッション終了後、その都度パスワードで保護され暗号化された安全なサーバーにアップロードされた。その後、ファシリテーターらは、その結果をまとめた活動報告書を英語で作成した。

調査地の選定

調査チームは、バランガイ（市や町の下にある最小行政単位）を含む市町村 の選定に、意図的サンプリングを行った。緊急事態下におけるユースのニーズと優先事項、さらに早すぎる結婚の拡大要因についてエビデンスの集積に寄与するという調査目的を果たすために、サンプリングの枠組みは以下の点を考慮して作成した。

1. 自治体/市町村/バランガイの選定では、現在、ユース対象のプログラムを実施している所としていない所が混在するようにする。

2. 社会経済的な背景や社会サービスへのアクセスの違いが調査結果にどのように影響するかをより深く理解するために、各州で少なくとも1つの都市部を選び、同じ州内の農村部の状況と比較・対照できるようにする

3. 断続的または長期的な人道的緊急事態が発生している 地域を優先する

4. 早すぎる結婚が非常に多いことが分かっている地域を優先する。

各自治体の中で、断続的あるいは長期的な避難生活を強いられているバランガイあるいは避難民の受け入れ世帯のあるバランガイが、コミュニティ管理層の協力で特定され、調査活動への参加が呼びかけられた。

州	自治体
Lanao del Sur	Marawi City Saguiaran Butig Piagapo
Maguindanao	Datu Saudi Ampatuan Mamasapano Datu Salibo Shariff Saydona Mustapha
Basilan	Sumisip Hadji Mohammad Ajul
Sulu	Patikul Parang

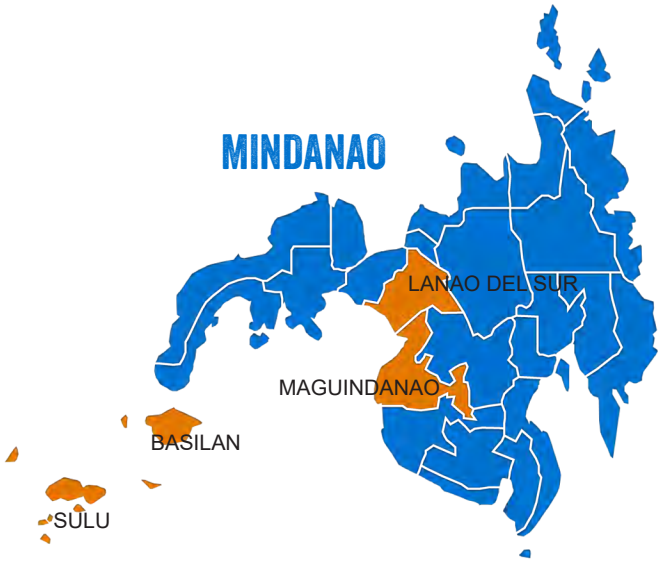


表1. 早すぎる結婚調査の調査地

サンプリング

重要な情報提供者とのインタビュー (KIIs)
選定された調査地においてコミュニティの発展と/あるいはユースの健康と成長の促進に向けて活動している国内のNGO、CSO、CBO、INGO、MRL(イスラム宗教指導者)、社会サービス提供者、国連関係者、政府関係者を特定するために、サービスマップの作成を実施した。この活動で特定された重要な情報提供者(KI)たちに対し、新たな話が出てこなくなるまでインタビューを実施した。本調査では、対象4州において、サブグループごとに最大6名のKI(①国内NGO、CSO、CBO、②INGO、③MRL、④社会サービス提供者、⑤国連関係者や政府高官)を対象とした。

SenseMaker®
SenseMaker®でも、主要な参加者のサブグループに基づいて、データを分解しても、各サブグループの目標サンプルサイズを十分達成できるように、意図的サンプリングとスノーボール・サンプリングが採用された。SenseMaker®に参加できるのは、12～19歳の男女のユース、両親と保護者、信仰/信仰とは関係のない 指導者やその他のコミュニティ管理層(例:地域の保健福祉事務所の職員、地域の聖職者)、自治体の職員とCBOのメンバー(例:地域の首長)とした。サブグループごとの参加者候補リストは、フィリピンのプランのバランガイの窓口が作成した。サブグループごとの追加回答者は、女性のためのスペースやサービスを運営するファシリテーターなど、地元のCBOを通じて特定。さらに、集計員もスノーボール・サンプリングを用い、既婚のユースにコミュニティ内の他の既婚のユースに集計員を紹介してもよいかどうか尋ねる形で、既婚のユースをさらに追加した。参加者の性別(女性、男性、その他)は、参加者の外見と質問に対する回答に基づいて、集計担当者が分類した。

本報告書では、わかりやすくするために、参加者の性別は、参加者のジェンダー(女性/女の子は女性、男性/男の子は男性、その他)と等しいと仮定し、この点について参加者が明確にすることは求めなかった。例えば、性別が女性と分類されたユースから得たデータは思春期の女の子からのデータとみなしている。

母集団から1度に100個のデータを取り出す場合、サンプルサイズは100、サンプル数は1として、各州のサブグループのサンプルサイズ(n=50)が50あれば、SenseMaker®のデータ分析ダッシュボード(グラフや表などで様々なデータを一覧で確認できる掲示板)で図や表などで視覚的にデータを表すことができた。したがって、この調査では、未婚、既婚、離婚、非公式な婚姻関係、障がい者、さらに多様な性的志向、ジェンダー・アイデンティティ(性自認)、性表現、身体的性(SOGIESC)を持つ女の子を含む思春期の女の子たちの語る848のストーリーを含めて、合計2,000件のストーリーを収集することを目標とした。 さらに、既婚・未婚の思春期の男の子からの424のストーリー、思春期の女の子と結婚した男性からの212のストーリー、子どもを持つ思春期の親(男女)からの424のストーリー、コミュニティの指導者と管理層(男女)からの424のストーリーの収集にも努めた。

参加型グループ活動
参加型グループ活動については、主要な参加者のサブグループに基づいてデータを分解しても各サブグループの目標サンプルサイズを達成できるように、意図的サンプリングが用いられた。SenseMaker®によるインタビュー終了後、各自治体の各サブグループの目標サンプルサイズに達するまで、SenseMaker®回答者から参加者を募集した。サブグループごとのサンプルサイズは、思春期の女の子とその人生に影響を与える大人の多様性を反映するように設計された。

参加型グループ活動に参加できるのは、12～19歳の男女のユース、ユースの両親と保護者、信仰の/信仰とは関係のない指導者やその他のコミュニティの管理層（例：地域の保健・社会福祉事務所の職員、地域の聖職者）、そして自治体の職員とCBOのメンバー（例：地域の首長、自治体職員）とした。

全体として、最560名の参加型グループ活動を目指した。本調査には、未婚、既婚、離婚、非公式な婚姻関係、障がい者や、多様なSOGIESCを持つ女の子を含む、122歳～19歳の思春期の女の子は最大240人まで参加できるようにした。. さらに、12～19歳の既婚・未婚の思春期の男の子は最大160人、子を持つ思春期の親と保護者（男女）は最大80人、コミュニティ・リーダーと管理層（男女）は最大80人の参加を目指した。

分析

分析の枠組み

この調査の基本的な分析フレームワークとしては、社会規範と思春期の性と生殖に関する健康（ASRH)との関係を明確にする概念的フレームワークが用いられた。このフレームワークは、Bronfenbrennerの人間発達の生態学的枠組み（Bronfenbrenner、2004年; Bronfenbrenner、2009年）をベースにしてCislaghiとHeiseが低所得国で保健を推進するために確立した社会規範理論（Cislaghi、Heise, 2018年）を適用したものだ。このフレームワークの中心となるのは4つの要素であり、本レポートで収集したデータを解釈する上で非常に重要である。第一が権力。これは、社会規範、行動、保健の基盤となり、強制力を持つ重要な要素である。第二に、ジェンダーの役割を理解するには、社会生態学的システムをあらゆるレベルで理解することが必要である。社会規範の一部は、関連するルール(関与、関係、責任) を決定する。これらのルールは 、力関係の形成につながり、その結果、取り組みにとっては、脅威にも機会にもなりうる。第三が、このフレームワークで焦点を当てている各領域（個人、社会、リソース、組織）間の多くの関係性だ。これらの領域が交わるところに、崩壊、成長、変革の機会が存在する。 第四が社会規範。社会規範はASRHの成果に大きな影響を与えるため、このモデルの中心となっている （Pulerwitz、他、2019年）。

この調査では、このフレームワークを用いて、BARMMにおける早すぎる結婚の拡大要因に対する危機と人道的背景の影響に取り組むと同時に、早すぎる結婚のリスクを軽減し、既婚の思春期の女の子たちのニーズにこたえるための、思春期の女の子と家族、コミュニティ、さらには、より広い地域支援システムの適応力、あるいは回復力に危機と人道的局面がどのように影響しているかを分析した。このフレームワークを用いることで、社会規範の持つ非常に大きな役割が明らかになる一方で、システムの各要素がジェンダーその他の社会構造を形成し、危機的状況の中で早すぎる結婚に影響を与えながら非常に重要な役割を持つことも示している。元々のフレームワークに人道的背景を加え、人道的背景が持つ社会的・構造的要素がフレームワークの各領域（個人・社会・組織・リソース）全体とどのように作用しあっているかに取り組んだ。



図1. 危機における早すぎる結婚の社会的・ジェンダー的規範と権力の中心性を強調する、採用された概念的枠組み

さらに、情報を加え、早すぎる結婚が保健・保護・福祉・教育、さらに経済分野を含む生活のあらゆる領域にどのような影響を与えているかを評価した。その結果、このフレームワークは、早すぎる結婚が人道的局面でどのように発生するかを探る研究や、早すぎる結婚に関するプログラムの設計・評価に対する1つのアプローチとして活用できる可能性がある。

KII分析

KIIは、一語一語メモで記録し、文字に起こし、インタビュー後すぐに現地語から英語に翻訳された。調査チームは、繰り返し現れる名称や言葉を一覧にしたコードブックを作成し、試行後コード化した。各記録は、NVivo 12 Plus（QSR 2020）にアップロードされ、テーマ内容の分析が行われた。コード化における問題は話し合いで意見を一致させたり、コードブックを修正して解決した。さらに、データの関連性をさぐるために、主要なテーマについて州全体、回答者が属す組織全体で調査を行った。

SenseMaker®分析

データ収集とデータクレンジング（データを修正して最適化する作業）の終了後、Cognitive Edgeがレポートをまとめ、数値化したSenseMaker®のデータのパターンから主要テーマが浮かび上がった。レポートの目的は、メタデータのパターン分析に基づいて、ストーリーブックを書き起こし・翻訳するために必要な部分を見つけて調査チームをサポートすることだった。テーマは、より幅広い活動プログラムに関する質問と関連させて定義し、主に思春期の女の子たちが直接語るストーリーに焦点が置かれた。本研究の目的を考慮した結果、結婚との関連を自ら示す関連メタデータのみを分析対象とした。

2021年1月、マギンダナオ州で、大人のコミュニティ関係者（ケア従事者、MRL、コミュニティリーダーなど）14名、13～19歳の未婚の思春期の女の子14名、16～19歳の既婚女の子8名によるコミュニティ・センスメーキング（または「参加型コミュニティ分析」）ワークショップが開催された。ワークショップの目的は、コミュニティメンバーと共同でデータを分析し、その結果を共有・検証することで、特定された課題に対して女の子主導のコミュニティベースの解決策を見つけることである。参加型コミュニティ分析では、参加者は選ばれたストーリーを読み、次のような自由回答式質問を通して、自分たちのグループの解釈について一緒に考えるよう求められた: *「もし、このようなパターンが何の変化もなく続くとしたら、どのような影響 があるのだろうか。」*そして、次のような質問に答える形で、読んでいるストーリーの状況下で状況を改善させる可能性のある行動の「本質について考える」ことを求められた。*「どんな小さな変化が起きれば、一人の女の子としてあなたの、あるいは若い女の子たちの役に立つだろうか？」*。そして、大人たちには、*「女の子たちが求める小さな変化を実現するために、どのような行動や決断ができるだろうか」*と尋ねた。

2021年7月、フィリピンのプランは、BARMMの主要な組織関係者と オンラインでワークショップを行い、調査結果に関するフィードバックを実施。BARMMで効果的にアドボカシーを行い、早すぎる結婚への取り組みを実施するための協働に向けた優先分野と次のステップを特定した。

参加型グループ活動分析
参加型グループ活動は、セッションごとに、訓練を受けた特定の 記録係によって、文書作成ガイド や、描画やコミュニティマッピングの活動の写真を用いて記録された。各セッション終了後、現地6カ国語の記録を英語に翻訳し、報告書にまとめた。調査チームは、内容分析による詳細な活動報告の分析を行った。内容分析は、各州に暮らすユースと大人の中の異なるグループが、思春期にとって健康で回復力があることの意味をどのように定義するのか対比・比較するために、さらに、状況に応じた子どもの保護システムに対するサポート（人材、組織、プログラム、サービス等）とこうした子どもの保護サポートとリソースの利用に対する障壁と促進要因を把握するために、実施された。

倫理

本研究は、フィリピン・ダバオ市のUniversity of Immaculate Conception Research Ethics Committee (Reference no. FO_0059) から研究手順に関して 倫理的な承認を得て実施された。調査チームは、すべてのデータ収集活動に先立ち、インフォームド・コンセントと承諾 を得た。募集時に使用した氏名やその他の個人情報は、調査データとは別の文書に記録し、その 文書はデータ収集後すぐにシュレッダーで処分した。調査チームは、各回答者に調査チームとプラン・インターナショナル・フィリピンの連絡先、WRCとプラン・インターナショナルのセーフガーディング（子どもと若者が安心・安全に過ごせる環境づくり）に関するポリシーに従った匿名で通報できる手段を記載した用紙 を配布した。活動は、回答者の同意を得て、録音された。調査活動中に言及された氏名は、文字起こしの際に削除した。データ収集と関連する活動が、以下の規定を確実に守るためにあらゆる措置が講じられた。

「Ethical Guidance for Working with Displaced Populations」（WRC、2016年）、「Child and Vulnerable Adult Safeguarding Policy」（WRC）、「Global Policy on Safeguarding Children and Young People」（プラン・インターナショナル、2017年）、「The Practitioner's Guide to Ethical Conduct of Research on Child Marriage in Humanitarian Setting」（Robinson、2020年）。

さまざまな制約

定性的研究には、人道的状況や世界的なCOVID-19のパンデミック下での調査に関連した特有の制約が存在する。

まず、コミュニティ関係者にも参加を募り、コミュニティ住民らを調査に巻き込むための意識喚起を行ったにもかかわらず、既婚のユース、特に12～14歳の既婚の女の子と12～17歳で既婚の男の子を把握する際にさまざまな困難に直面した。そのため、既婚のユースについては、男女とも、方法ごとに目標としたサンプルサイズに達することができなかった。しかし、この調査では多様な調査方法が用いられたことを考えれば、調査員たちはさまざまな方法で得た調査結果を1つの観点ではなく、別の観点からも測定することで、BARMMに暮らす既婚の女の子のニーズと優先事項の実像を明確にとらえることができたと言える。また、調査員は、参加者の正確な年齢を把握することが困難だったと報告している。社会的望ましさのバイアスで、既婚と報告した思春期の女の子は当然18歳以上であることを我々は期待する。したがって、既婚の思春期の女の子として18歳以上の女の子が調査対象になり、既婚だと自己申告した女の子の数より多くなってしまった可能性がある。また、この研究では、障がい者のサンプルサイズを少なくとも全体の10～15%にする という目標を達成していない。したがって、この研究は、障害とともに生きるユースの特別なニーズと優先事項を十分に記録しているとは言えない。

第二に、データ収集活動の大半は、COVID-19の発生前 、つまり COVID-19関連の移動制限が実施される前に完了した。COVID-19が早すぎる結婚の意思決定に与える影響の全容は、今回の調査では把握できておらず、またその意図もなかった。COVID-19の制限により、調査チームはラナオ・デル・スル州、スールー州、バシラン州でコミュニティメンバーとの参加型グループ分析を実施することができなかった。従って、ここで述べるコミュニティとの共同分析ワークショップで得られた結果は、マギンダナオ州に住む思春期の女の子と大人のコミュニティ住民の視点と洞察に限られたものである。

また、分析にも制約があった。SenseMaker®のサンプルサイズは、代表性（サンプルが全体の様子を反映している）のない調査としては大きかったが、扱ったデータが、結婚との関連を自ら示したものに限られていることを考えると、民族やその他の因子で州やサブグループごとに意味のある分類をするには、サンプルサイズが小さすぎた。研究者は 可能な限り、サブグループ、地理的な場所、その他の主要な特性（例：婚姻や強制 移住の状況、宗教・民族的なアイデンティティ）ごとに細分化したデータを報告した。



03

調査結果

参加者の特性

ユース、大人 、主要な関係者を含む合計2,203人のコミュニティ住民がデータ収集活動に参加した。参加者の50%強（n=1,151）が女性であるのに対し、男性は1,046人であった 。また、参加者のうち、既婚者は1,049人、未婚者は1,112人であった。合計で大人890名、ユース（12歳～19歳）1,312名が参加した。表1は、回答者総数の内訳を調査方法別に示したものである。

KII

MRLだけでなく、調査地で多様なサービスやプログラムを提供しているさまざまな組織や異なる立場にある29人に対して、合計26回のKIIを実施した。女性が24人で大多数を占め、男性は5人だった 調査チームは各州で、66～7名のKIIにインタビューを行い、その中には、政府職員5名、NGOやCSOのスタッフ8名、INGOのスタッフ22名、社会サービス提供者9名、MRL2名が含まれている。Iラナオ・デル・スル州では、NGO/CSOのスタッフ4名、INGOのスタッフ2名、社会サービス提供者1名、計7名のKIIにインタビューを行った。

マギンダナオ州では、政府職員4名、NGO/CSO職員1名、社会サービス提供者1名、計6名のKIIにインタビューを行った。スールー州では、MRL1名、NGOスタッフ3名、社会サービス提供者3名、計7名のKIIにインタビューを行った。島を領域とするバシラン州とスールー州では、INGOへのインタビューは行われなかったことは注目に値する。

SenseMaker®

SenseMaker® の活動には、4つの州で女の子と女性 1,1227 人、男の子と男性1,047人、合計 22,174 人のコミュニティ住民が参加した（表3参照）。参加者には、既婚の女の子220名、既婚の男の子57名が含まれる 。共同デザインワークショップには、12～19歳のユース3名と大人10名、計13名のコミュニティ住民 が参加した。

大人の参加者のうち、1人は精神的な障害をもっていることが判明した 。さらに、国連関係者、サービス提供者、国やコミュニティベースの組織など、5つの実施パートナーが参加した。マギンダナオ州では、48人のコミュニティ住民が3回の参加型分析セッションに参加した。参加者は、既婚・未婚の女の子22名と、ケア従事者やMRLなど影響力のある人物を含む大人の男女26名であった。

表2. 調査方法別の回答者数の概要

	女性	男性	既婚	未婚	大人 (20歳以上)	ユース（12～19歳）			合計
方法						12-14	15-17	18-19	
SenseMaker®	1,127	1,047	1,049*	1,112	861	598	361	353	2,147**
参加型グループ研究活動	230	197	254	166	154	65	95	113	427
重要な情報提供者とのインタビュー	24	5	N/A	N/A	29	0	0	0	29
	1,151	1,052	1,049	1,112	890	598	361	353	2,203***

*SenseMaker®の既婚者カテゴリには、婚約中1名、寡婦/寡夫 40名、離婚者29名が含まれる。.
**配偶者の有無について開示しないことを希望した13人を含む。
***参加型グループ参加者は、SenseMaker®参加者の中から募集した。

表3. SenseMaker®の回答者の概要（自治体 別、年齢別、ジェンダー別）

ラナオ・デル・スル州										
マラウィ										
	12-14	**15-17**	**18-19**	**20-24**	**25-29**	**30-35**	**36-39**	**40-49**	**50**	**合計**
男性	16	5	14	8	5	7	7	10	10	82
女性	34	15	18	1	1	2	5	6	4	86
ブティグ										
	12-14	**15-17**	**18-19**	**20-24**	**25-29**	**30-35**	**36-39**	**40-49**	**50**	**合計**
男性	15	9	8	10	9	8	5	7	11	82
女性	29	24	10	0	1	2	2	9	3	80
ピアガポ										
	12-14	**15-17**	**18-19**	**20-24**	**25-29**	**30-35**	**36-39**	**40-49**	**50**	**合計**
男性	15	11	10	7	6	2	3	8	7	69
女性	34	18	18	1	2	2	4	7	5	91
サギアラン										
	12-14	**15-17**	**18-19**	**20-24**	**25-29**	**30-35**	**36-39**	**40-49**	**50**	**合計**
男性	16	6	10	17	4	0	5	8	10	76
女性	29	13	23	0	0	4	4	8	6	87
マギンダナオ州										
ママサパノ										
	12-14	**15-17**	**18-19**	**20-24**	**25-29**	**30-35**	**36-39**	**40-49**	**50**	**合計**
男性	21	16	10	5	7	6	3	16	13	97
女性	17	26	24	1	2	3	4	7	5	89
シャリフ・セイドナ・ムスタファ										
	12-14	**15-17**	**18-19**	**20-24**	**25-29**	**30-35**	**36-39**	**40-49**	**50**	**合計**
男性	15	9	9	10	3	6	2	16	7	77
女性	27	12	12	3	0	4	3	3	1	65
ダトゥ・サリボ										
	12-14	**15-17**	**18-19**	**20-24**	**25-29**	**30-35**	**36-39**	**40-49**	**50**	**合計**
男性	12	14	13	9	5	8	5	9	9	84
女性	22	23	13	0	5	3	2	5	4	77

ダトゥ・サウジ・アンパチュアン										
	12-14	15-17	18-19	20-24	25-29	30-35	36-39	40-49	50	合計
男性	17	4	8	7	8	6	9	9	2	70
女性	28	23	14	3	5	7	4	5	4	93
バシラン州										
スミシップ										
	12-14	15-17	18-19	20-24	25-29	30-35	36-39	40-49	50	合計
男性	19	13	10	17	7	3	4	13	17	103
女性	45	23	21	6	1	2	4	6	7	115
ハジ・モハメッド・アジュル										
	12-14	15-17	18-19	20-24	25-29	30-35	36-39	40-49	50	合計
男性	22	10	12	4	13	5	4	15	13	98
女性	43	25	15	1	0	7	4	11	5	111
スールー州										
パティクル										
	12-14	15-17	18-19	20-24	25-29	30-35	36-39	40-49	50	合計
男性	27	19	14	14	4	7	6	9	13	113
女性	44	18	25	1	1	5	2	13	10	119
パラン										
	12-14	15-17	18-19	20-24	25-29	30-35	36-39	40-49	50	合計
男性	19	8	11	13	10	3	7	7	18	96
女性	33	17	31	0	1	4	6	11	11	114

参加型グループ活動
47の参加型グループ活動には、合計427人（53.9%が女の子・女性）が参加した。参加者の大半（273人）は12～19歳のユースで、残りの参加者は大人のケア従事者、親、コミュニティリーダー、その他のコミュニティの管理層であった。スールー州では、427人の参加者のうち、32人が12～19歳の思春期の男の子、50人が12～19歳の思春期の女の子、16人が成人男性のケア従事者/コミュニティの管理層、17人が成人女性のケア従事者/コミュニティの管理層であった。バシラン州では、111人の参加者のうち、33人が12～19歳の思春期の男の子、42人が12～19歳の思春期の女の子、18人が成人男性のケア従事者/コミュニティの管理層、18人が成人女性のケア従事者/コミュニティの管理層であった。ラナオ・デル・スル州では、118人の参加者のうち、26人が12～19歳の思春期の男の子、50人が12～19歳の思春期の女の子、22人が成人男性のケア従事者/コミュニティの管理層、20人が成人女性のケア従事者/コミュニティの管理層であった。

マギンダナオ州では、83人の参加者のうち、17人が12～19歳の思春期の男の子、23人が12～19歳の思春期の女の子、24人が成人男性のケア従事者/コミュニティの管理層、19人が成人女性のケア従事者/コミュニティの管理層であることがわかった。

ユースが直面している主な問題

様々な方法で得られたデータにより、BARRMのユースが抱える様々な課題が明らかになった。SenseMaker®と参加型手法は、ユースと大人のコミュニティ住民が、自分自身の抱える不安について話す機会を提供した。

グループや州を問わず参加者は、早すぎる結婚がユース、特に女の子が直面している中心的課題だと認識した。その他、早すぎる妊娠、質の高い教育へのアクセス不足、差別とスティグマ、子どもの人身取引や違法労働を含む児童労働、コミュニティのサポート体制の不足、助けあう関係がないこと、リスクの高い行動、特に違法薬物の使用などが主な不安として挙げられた。薬物使用を除き、こうした問題がどのような形で思春期の女の子のリスクを高め、そして/あるいは結婚とどのような因果関係があるのか、貧困と不公平なジェンダー規範というより広い文脈の中でたびたび話し合いが行われた。

早すぎる結婚

早すぎる結婚は、KIとの会話でも、SenseMaker®で明かされたストーリー、さらに、ユースのウェルビーイング活動（幸せ）の本質を把握してユースの保護リスクに優先順位をつけるための参加型グループ活動でも、BARMMのユースが抱える最も差し迫った問題として浮かび上がった。回答者たちが働いているコミュニティでの早すぎる結婚の慣習について直接尋ねたところ、すべてのKIが早すぎる結婚が広く行われていることを認めた。

> ***司会（M）:*** *こうした状況下で、コミュニティが直面している最も差し迫った問題は何だとお考えですか？*
>
> ***参加者（P）:*** *やはり早すぎる結婚です。 にこでは若い子たちはいまだに、本人にその気がなくても結婚を強いられているからです。いいなずけや見合いなどがある、この国のイスラム教の文化を考えれば、親が結婚を決めた らもう子どもは何も言えません。本人がしたくて結婚する者も、たまにはいますが。*
>
> ***(バシラン州政府保健担当者、KII)***

分析したストーリーのおよそ3分の1が、SenseMaker®から引き出された「結婚」の持ついくつかの側面を浮き彫りにした。ランダムに選ばれた結婚に関するストーリーのほぼすべてが早すぎる結婚をめぐるものだった。

> *私たちはある町の町角で出会いました。. その後 、彼が我が家を訪ねてきました。彼は私の友人の一人が好きだから 、その橋渡しをしてほしいと言いました。しかし、数日後、彼が本当に好きなのは私であることがわかりました。付き合って2ヶ月ちょっとの時に、「結婚したい」と言われました。それから1カ月余り、私たちは一緒に暮らし始めました。イード(注：ラマダンの終わりに、モスクへ行き、祈りを捧げること)の後、私たちは結婚しました。以上です。結婚した時、私は12歳でした。私の夫は20歳を過ぎていました。*
>
> ***(思春期の既婚女性、12～14歳、マギンダナオ州、SenseMaker®)***

ユースのウェルビーイング活動で各参加グループが「問題をかかえている」ユースについて語る際に決まって「既婚」という表現が使われた。しかし、ユースが結婚しているかどうかは、ファシリテーターが "このユースは既婚か未婚か"といった質問をして初めて明らかになることが多かったのだ。

3つの参加グループ（ラナオ・デル・スル州の18～19歳の既婚ユース男の子、バシラン州の18～19歳の既婚ユース女の子、バシラン州の女性ケア従事者・コミュニティリーダー）は、既婚のユースの中には「特に問題を抱えていない」ユースも「問題を抱える」ユースもいることを明らかにした。どのグループでも、「特に問題がない」と言われた既婚ユースは、家族から経済的な支援を受けていた。これは、経済的支援が早すぎる結婚のどんなマイナス面をも補って余りあることを暗に示している。既婚の思春期男の子のグループは次のように説明した:

> *サムは結婚していますが、それは親が決めた結婚や強制された結婚ではないです。夫婦おのおので勉強し、それぞれの家族から支援を受けています。サムの両親は、自営業で既製服のビジネスをしています。*
>
> ***(既婚ユースの男の子、18～19歳、バシラン州、ユースのウェルビーイング活動)***



図2: 母親 とコミュニティリーダー（マギンダナオ州キタンゴ）。思春期のウェルビーイング活動「特に問題のない思春期」のグループイラストは、15歳の未婚の思春期の女の子、マリアンである。

また、結婚の意思決定における選択権や教育へのアクセスがあるかどうかも、早すぎる結婚に対して地域住民の持つマイナスイメージを和らげる要素になっていた。 上述のユースの男の子グループの説明では、お見合いでも強制結婚でもない結婚と、ユースのウェルビーイングには関係があるともしており、これは、自分の意思による結婚は、強制された結婚より好意的に受けとめられていることを示している。共同分析ワークショップの参加者らは、結婚へのプロセスをスタートするのも自分の結婚を決める力を持っているのも、女の子より男の子である傾向が強いと指摘した。

バシラン州の女性ケア従事者とコミュニティリーダーのグループは、「親が決めた結婚やお見合い」で結婚した思春期の子どもは「特に問題を抱えていない」のに対して、「問題を抱える」思春期の子どもは「貧困のためや、生活を支えるために無理やり結婚させられている」という点で一致した。しかし、バシラン州の既婚の思春期の女の子たちは、「特に問題を抱えていない」ある既婚の思春期の女の子は、本人と その夫が「ともに豊かな家庭の出身」であると説明した。こうした話し合いから、結婚の意思決定権や教育へのアクセス、経済的な安定という要素には、早すぎる結婚に対する地域住民の考え方を変える力がある可能性が読み取れる。

紛争に関連した強制 移住と不安

コミュニティメンバーの多くは紛争に関連した強制移住を経験しており、その内 半数近くが自ら移住したか、強制移住した人と同居していた。結婚のリスク要因として、経済的な要素ほど多く挙げられてはいないが、強制移住についてはストーリーでもコミュニティの共同分析ワークショップの話し合いでもたびたび触れられ、生活のあらゆる面に著しく大きな影響が及んでいた。これは、他のデータソースから得た結果にも同様に表れている。参加型コミュニティ分析では、強制移住の間は、親の意見やアドバイスが少なくなる一方で、同意のあるなしにかかわらず性的関係や、ユース同士の付き合いを持つ機会が増える傾向があるとの意見が出された。様々な方法で得られたデータからも、強制移住や生活の不安で教育や生計を継続できなくなることが結婚の可能性を高めていることがわかる。また、KIとSenseMaker®のデータも、強制移住と生活の不安を背景に、親が家族の名誉を守り地域内での力やリソースを固めるため、また、避難先を提供してくれたことへの感謝として、娘を嫁がせる決心をすることで、女の子たちの結婚のリスクが高まることを示している。(37ページ「4.4早すぎる結婚の原因」の紛争関連の移動と不安の項を参照)。

思春期の妊娠

思春期の妊娠は、思春期の女の子にとって大きな問題であることが、どの州のKIにも確認され、SenseMaker® でも一致した回答となった。思春期の妊娠は、原因や結果が何であれ、本質的に早すぎる結婚と関連する形で言及されることがほとんどだった。I結婚前に妊娠していないとしても、結婚後まもなく妊娠する。

> *その女の子は私のクラスメートだった。彼女には私たちと同い年の彼氏がいた。ある日、彼女と彼氏 は公共の場で待ち合わせたが、そこに親戚の人がついてきていることに気づかなかった。彼女は妊娠し、それを知った家族はその親戚の男を恐れるあまり、2人は強制的に結婚させられた。今、彼らはマニラにいて、女の子と彼女の夫は勉強を中断しています。*
>
> ***(未婚の思春期の女の子、18～19歳、ラナオ・デル・スル州、SenseMaker®)***

KIは、思春期の女の子のセクシュアリティに対するスティグマ(恥辱)が原因で、未婚の女の子が性と生殖に関する健康と権利(SRHR)教育やサービスにアクセスできず、その結果、かえって無防備なセックスや望まない、または計画外の妊娠につながる可能性があることを強調した。KI によると、早すぎる妊娠の影響は特に 15～19 歳の ユースが受けているという。フィリピンでは、中絶はいかなる状況でも違法であり、ユースが利用できる避妊法はほとんどない。スール一州とバシラン州のKIは、早すぎる妊娠が思春期の女の子が中途退学する要因になっていると指摘した。

参加型グループ活動では、早すぎる妊娠そのものはBARMMのユースが直面している中心課題として浮かび上がってこなかった。しかし、早すぎる結婚に関連した話し合いの中で、「子どもたち」をケアする立場の大人の責任についてたびたび話題になった。むしろ、結婚や子どもに関する問題以上に参加者が強調したのは栄養価の高い食べ物の必要性だった。注目すべきは、スール一州を除くすべての州で、「問題を抱える」ユースは「健康的な食べ物」の不足、「十分な食べ物」の不足に直面している、あるいは「1日1回しか食事がとれていない」ことが非常に多いと述べられていることだ。.ラナオ・デル・スル州の18～19歳の既婚の思春期の女の子は、早すぎる結婚がいかに彼女の栄養面に悪影響を与えたかを説明した: 「私は14歳で結婚しました。結婚前は、1日に3回食事をしていました。」 栄養不良や食糧不足に関する話し合いは、貧困問題につながっていた。スール一州の参加者は、各コミュニティで「問題を抱える」ユースが直面している中心課題として「不健康」あるいは「病気」を挙げた。

質の高い教育へのアクセス不足

ユースの抱える中心課題として、3分の1以上(8人)のKIが質の高い教育の不足を挙げている。情報提供者 は、思春期の成長における教育の重要性をインタビュー中ずっと強調した。KIとの協議やコミュニティ住民の話、さらに参加型グループ活動でも、中途退学が早すぎる結婚の原因にも結果にもなっている現状が浮かび上がった。また、参加型のグループ活動では、教育も重要なテーマとして挙げられた。ユースが問題を特に抱えていないことと、教育へのアクセスがあって教育上必要なサポートを親からうけられることには、相関関係があった。

参加者は、「武力紛争」を含め、中途退学の理由として次のような理由を挙げた(「武力紛争」(男女のケア従事者・コミュニティリーダー、マギンダナオ州)、「彼ら(両親)に経済力がなかった」(女性、ケア従事者・コミュニティリーダー、マギンダナオ州)、「彼ら(家族)に生計手段がなく教育にお金がかけられなかった」(未婚女性、15～17歳、ラナオ・デル・スル州)、「... 生活を支えるため」(既婚男性、18～19歳、スール一州)また、思春期のウェルビーイングについての話し合いの中で、いくつかの思春期のグループが、いじめや嫌がらせが思春期の子どもたちの中途退学を招いていると述べ、学校で嫌がらせを受ける主な理由として、早すぎる結婚と先住民の出身であることを挙げた。例えば、図Xは、農作業の費用にあてるために親がダウリー(持参金)目的で娘を嫁がせ、それが原因で学校でいじめられ「問題を抱える」思春期の女の子を描いたものだ。



図3 18~19歳の未婚の思春期の男の子。ラナオ・デル・スル州。「問題を抱える」15歳の既婚の思春期の女の子マリヤムのグループイラスト

参加者は、マリヤムについて次のように話してくれた。

「別 のグループが、問題を抱えたこのユースを「マリヤム」と名付けました。15歳。彼女の人生は苦難の連続です。両親は農民でした。貧しさのあまり、両親は彼女が家計を助け、結婚前に将来の夫から受け取る「ダウリー(持参金)」によって、自分たちが 農業の費用を工面できるようにと、彼女を結婚させることを 決めました。しかし、マリヤムは結婚したことで、さらなる苦しみを味わうことになりました。学校でいじめに遭っていると言われ、学校に行くのが恥ずかしいのです。結婚するにはまだ早いと言われ、勉強をやめることにしました。だから今、彼女は農民ですが、農業の稼ぎは日々の生活で消えてしまい、買いたいものも買えません。マリヤムの父親は、1日 1回しか食事をしないこともあったため、「潰瘍」で亡くなりました。現在、マリヤムは夫と二人で働いて生計を立てています。」

また、早すぎる結婚の背景には教育へのアクセス不足があることもデータからわかった。KIやSenseMaker® のストーリーから、早すぎる妊娠、家庭や子育ての責任、経済的事情など、早すぎる結婚には様々な要因が絡み合い、中途退学せざるを得ない状況を作り出していることがわかった。

差別とスティグマ

様々な方法から得られたデータは、社会的スティグマと、いじめや嫌がらせなど、様々な形の差別が、BARMMに暮らすユース、特に思春期の女の子が直面している問題の中心であることを示唆していた。調査結果によると、ユースたちは、イスラム教徒という宗教的アイデンティティ、民族、年齢、社会経済的地位、能力レベル、IDPの境遇 、婚姻歴 、出産歴 、就学状況など様々な要因で差別されていることが明らかになった。

KIが提起した課題のうち、IDPのユースの多くは、受け入れ先コミュニティ、特に学校の生徒からいじめや嫌がらせを受けている。回答者の説明によると、こうしたユースたちは、コミュニティ内で避難民という立場にいるため 嫌がらせのターゲットにされたとのことだった。

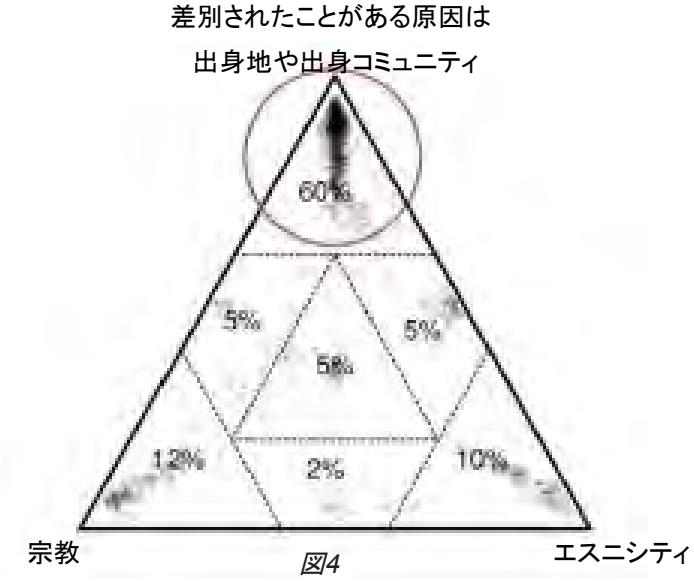


図4

参加型のグループ活動から得られたデータは、これらの発見を裏付けるものであった。強制移住したユースのグループ の参加者は、"いじめのない "環境を望んでいると打ち明けた。また、SenseMaker®のデータから、参加者がどのように差別を受け止めているかが明らかになった。これは図4に見られるように、どのコミュニティから来たか(60%)が偏見の要素として圧倒的に大きく、宗教(12%)、民族(10%)ははるかに小さいことがわかる。この結果は、KIIのデータを裏付けるもので、コミュニティ住民の間では、避難民という立場と民族性が差別とスティグマを生む大きな要因になっていることがわかった。さらに、スールー州の思春期の女の子の参加型グループの参加者の中には、少数先住民グループであるバジャオ族の一員であるというアイデンティティによって、支配的な民族/先住民グループ(例えば、スールー州の支配民族グループであるタウスグ族)から差別を受けていると報告した者もいた。バジャオ族のユース参加者らも、学校を休みがちなこと、いじめのために学校を中途退学した者がいると報告した。KIは、バジャオ族のユースはタウスグ族のユースに比べて結婚している可能性が高いことを指摘した。

ISenseMaker®のデータでは、いじめや差別が直接的な原因で学校を辞めた、という回答は比較的少数(11人)であった。しかし、結婚や妊娠を機に学校に戻るのが怖い、恥ずかしいということは、たとえ 学校を辞める直接の原因でなくても、ストーリーや参加型コミュニティ分析でも語られている。参加型コミュニティ分析では、この点については、年齢が上の グループよりも、思春期の女の子グループに大きく取り上げられていた。 参加者の話し合いから、教育システム、特に 学校でのいじめや差別(あるいは単に差別への恐れ)が、学校に通い続けていたかもしれない既婚者を中途退学に追いやっていることがわかった。思春期の女の子は、仲間が差別されても、嫌がらせを止めようとすれば自分も嫌がらせの対象になるのが怖くて、女の子は仲間を守ろうとしない、と説明した。嫌がらせやいじめの種類(性的、身体的、言語的、心理社会的など)についての詳細は、分析によって明らかにされなかった。

望まない結婚した知り合いがいます。彼女は妊娠を機に、そんな姿を人に見られるのが恥ずかしくて、学校を休みがちになりました。結婚後は泣いてばかりで、子どもができると学校には完全にいかなくなり、彼女は自分の州に帰っていきました。周りの人に彼女は どこに行ったのか聞いてみると、マランタオに戻ったと。なぜ学校に行かなくなったのかと聞くと、妊娠してしまい、そのせいで人に会うのが恥ずかしくなったとのこと。夫となった人もまだ15歳で、とても若いです。妊娠しているのを見られるのが恥ずかしいし、先生と顔を合わせるのも恥ずかしいということでした。

(思春期の未婚女性、12～14歳、ラナオ・デル・スル州、SenseMaker®)

また、いじめやスティグマの理由は、IDPという立場 や文化、結婚といったものだけでなく、経済的な事情や肌の色、民族性も背景となっていることがデータから読み取れる。マギンダナオ州、バシラン州、ラナオ・デル・スル州の思春期の参加型グループ参加者は年齢層にかかわらず、仲間にいじめられる理由として社会経済的な地位の低さを挙げた。



図5:「問題を抱えた」16歳の思春期の男の子ベンを描いたグループイラスト。(思春期の未婚女性たち、15歳～17歳、ラナオ・デル・スル州ピアガポ) 参加者は、ベンについて次のような説明をした

「彼は貧乏だからいじめられる」
「彼の家は全焼し、焼け跡には何も残っていませんでした」
「彼は学校を休みがちでした 。」
「生計手段を失い、教育にお金をかけることもできず、学校をやめざるを得なくなりました。」
「制服は傷んでボロボロ、焦げ臭いし、寝る場所を求めて転々としています。」
「新しいスリッパ を買うお金がなく、身に着けているのはずっと同じスリッパだけです。今は遠くで暮らしています。」

児童労働(児童の人身取引と不法就労を含む)

KIIや参加型グループディスカッションでは、子どもの人身取引と不法就労が関連したテーマとして取り上げられ、SenseMaker®のストーリーでも不法就労が頻繁に言及されている。さまざまなデータソースから得られた調査結果によると、子どもの人身取引は、収入創出の機会の不足、ジェンダーや宗教による差別を背景に行われていることがわかる。ラナオ・デル・スル州、マギンダナオ州、バシラン州のKIは、女の子、特に既婚の 女の子は、経済的な必要性と女の子や女性が家事を行うことを期待するジェンダー的規範から、タイ、アラブ首長国連邦、サウジアラビアなどのイスラム教徒の多い外国や近隣コミュニティの外で「家事労働」に雇われる傾向が男の子よりも強いと説明した。マギンダナオ州でコミュニティ参加型分析に参加を呼びかけられた22人のユース女の子のうち、2人は家事労働のために海外に渡航したため断り、また 1人は家事労働のために海外渡航するための書類を手続き中であった。思春期の女の子たちの多くが、海外で働くために合法的に渡航しているのか、それとも違法に渡航しているのかは不明である。人身取引される女の子たちが直面する恐れのある性的、身体的、精神的暴力についてKIは以下のように 説明した。

15～19歳の (思春期の) 女の子は、特に弱い立場にあると私は思います。この年齢になると、身体的な特徴が大人っぽくなり始めるので、人身取引の対象になりやすいのです。そして、生計を立てる 機会がない中、より良い未来を約束されて人身取引の話に簡単に乗ってしまい、被害に遭いやすいのです。私の経験では、人身取引やレイプの被害に遭ったユースの中には、心に大きな傷を負い、限界を超えてしまう場合もあります。戻ってきた彼女たちに、以前の姿はありません。私たちが扱うレイプ事件のうち、5件中3件が先住民族のコミュニティの子どもたちです。

(政府系CSO、マギンダナオ州、KII)

貧困のため、家族は子どもを海外に働きに出します。未成年の女の子も、18～20歳と偽れば パスポートを取得することができます。
マラウィでは、強制移住を背景に、さらにその傾向が強くなります。フィリピンの他の場所、あるいは海外で働いているのです。マラナオ族の文化を考慮する と、海外に行く人の方が多いです。フィリピン国内で家事使用人としての仕事に就けば、家族のプライドを傷つけることになります。認めるのは一部の家庭だけかもしれませんが、この不名誉な傷についての投稿[SNSでの共有]があって初めて、家庭内に家事使用人として働いてい人がいることがわかります。実際にどこにいるのかは誰も知らないです。どこかの家庭にいるのか、あるいは斡旋業者と一緒にいるのかもしれません。

(国連機関、ラナオ・デル・スル州、KII)

思春期のウェルビーイング活動では、どのサブグループや州の参加者も、非正規労働に従事するユースは「問題を抱えている」と強調した。参加者は、ユースは家計の苦しさから働いて収入を得るために、学校を中途退学せざるを得ないと説明することが多かった。参加者は、ユースの従事する収入創出活動として、以下のようなものを挙げた：「牛飼い」（未婚男性、15～17歳、ラナオ・デル・スル州）、「彼女は早起きしてバロブド（この地方で作られる伝統的な餅）を売る」（未婚男性、18～19歳、ラナオ・デル・スル州）、「野菜や果物を育てて生計を立てている」（既婚女性ケア従事者、コミュニティリーダー、18～19歳、バシラン州）、「洗濯」（既婚女性、18～19歳、バシラン州）、「海藻や農作物の栽培」（既婚・未婚男性、15～17歳、スールー州）。一方、スールー州の3つのサブグループ（18～19歳の未婚男性、女性のケア従事者とコミュニティリーダー、15～17歳の未婚・既婚のユース男性）は、「特に問題のない」ユースは働いて家計を助けているという意見で一致していた。しかし、教育の代わりに働くことがあってはならないことは、話し合いの中でも明らかだった。

コミュニティ支援体制の不足

コミュニティマッピング活動 の結果、ユース、特に女の子が集い、交流し、遊び、社会とつながる場がコミュニティにはほとんど存在しないことがわかった。また、思春期の女の子がコミュニティで専門的な支援サービスを利用できていないことも、活動の中で浮き彫りになった。コミュニティマッピング活動を通じて、どの年齢層の参加者も、思春期の女の子にとって安全でない場所が共通していた。それらは、紛争や暴力行為が行われ、兵士や武装集団員がいることに加え、思春期の男の子と女の子が交流できる場所であるため、参加者たちに安全でないと考えられていた。スールー州（ヌヌカン、カンナウェー、マウボー、ガンダルーシ）、マギンダナオ州（東リブタン、キタンゴ）、バシラン州（ツブラーン、ベンベンガン）では、政府軍／警察といくつかの非政府武装集団が通る、あるいは頻繁に武力衝突が起こる道路 、橋、町の境界やチェックポイント、農地などが安全ではない場所 として挙げられた。他の地域（東リブタンとキタンゴ、マグナドナオ）では、兵士や武装集団員も食事をしたりすることがあるため、レストランや食堂も女の子にとって安全でないとする回答もあったが同時に、こうした場所の多くを、どの年齢層の参加者も「思春期の女の子がよく行く場所」として挙げていた。思春期の男の子がよく利用する場所 としては、「インターネットショップ」が挙げられた。思春期の女の子たちは、インターネットショップや「ピソネット」（1ペソのインターネットカフェ）は「狭い空間」なので、親はそういう場所で男の子たちと付き合ってほしくないため、自分たちが行くのを許してくれないと報告している。大人とユースのグループは、インターネットショップは安全ではなく、イスラム教徒のコミュニティでは推奨されない場所であると認識した。なぜなら、ユースは友達と付き合ったり、インターネット上で性に関する不適切な情報に アクセスするためにそこに行くという考えから、早すぎる/強制結婚の「温床」とみているからだ。



図6. コミュニティマッピングの活動
(思春期の既婚女性、15～17歳、マギンダナオ州)

参加者は以下のことを確認した：

- *思春期の女の子がよく行く場所（ピンク）：家、イスラム教教育機関 、学校*
- *ユースがSRH情報を得る場所(赤): 地域保健所、バランガイの保健所*
- *ユースが支援やサービスを受ける場所(オレンジ)：市役所、バランガイの役場、学校*
- *思春期の子どもが行かない場所・危ない場所（紫）：ピソネット/インターネットショップ、農地*



コミュニティマッピング活動 (思春期の未婚女性、15歳～17歳、ラナオ・デル・スル州)

支えあう関係の不足

参加型のグループ活動やSenseMaker®のストーリーは、ユースの社会性の不足を浮き彫りにしている。また、どちらの情報からも、ユースが、主に親や同世代の仲間など、彼らの人生に大きな影響を与える者や支えてくれる者と、複雑な緊張関係にあることがわかる。例えば、話し合いの中でも、参加者たちは、ユースがなぜ深刻な差別や嫌がらせに遭うのか様々な理由を挙げた。SenseMaker®のストーリーの中には、同世代との友情や支えあいに関するものもいくらかあったが、ストーリーでも参加型グループ活動でも、噂話や悪口のほうが圧倒的に多く、

「悪い影響」といわれる同世代からの圧力は、ストーリーにもコミュニティ参加型分析、参加型グループ活動にも頻繁に登場する。「社会生活の不足」と「仲間からの悪い影響 」は、思春期のウェルビーイング活動において、どのサブグループや州でも共通して取り上げられ、特にスール一州では、「授業をサボる」などの逸脱行動や、盗み、ギャンブル、ドラッグ、アルコール、嘘などの「悪行」につながっていた。このように思春期の仲間や友人を信頼できないことが、時に「親しか信用できない」という次の話題につながることもあった。

近所に住む2人の友人の話で す。この兄弟はとも早くに結婚しました。母親は、二人の将来のために、そして二人の必要を満たすために 忙しく働きすぎていたのかもしれません。母親が仕事で忙しすぎたため、彼らはネグレクトされていました。父親はすでにおらず、彼らには母親しかいませんでした。現在、二人は結婚し、それぞれの家庭を持っています。この話が彼らの話で あることは、私にとっては(聞き取れない)ことではありません。私のようなユースにとって、すでに自分の家庭を持っている人のプラス面は、一人前になる方法について考え始めることですが、それは簡単なことではありません。私にとっては、たとえまだ自分の家族がいないに しても、一番大切なのはアドバイスであり、考える手助けをしてくれる人、悩みを聞いてくれる人、必要を満たす方法を見つけてくれる人なのです。貧乏だから難しいと言ってしまえばそれまでですが、私たちユースにとって物質的なものはそれほど重要ではありません。ただ、私たちが放置 されない限り、悪いことをしようと思う機会がない限り、すべては(聞き取れない)最近のユースはパサウェイ(「冷静」)だ。ある問題が起きると、彼らは尊大に振る舞い、暴れ、酒を飲み、間違った友人と時間を過ごすようになる。でも、ちょっとしたきっかけで彼らはつけあがり、暴れまわり、酒を飲み、悪い友達とつきあうようになる。良い友達に巡り会えればラッキーです。私たちにとって本当に大切なことは、それなのです。家族がいてもいなくても、いい友達に恵まれることが私たちを導いてくれるのです。そして、私たちがまともな考え方ができるよう後押しできるのは、両親です。

(思春期の未婚男性、18～19歳、スール一州、SenseMaker®)

どのサブグループや参加型グループ活動でも、ユースの支援、ケア 、保護における親子関係の重要性が共通して強調された。親からの経済的支援や道徳的アドバイスがないことは、つまりユースが 「問題を抱えている」ということなのだ。

親は若い世代に助言し、指導し、精神性と信仰を教える努力をすべきです。今、若い世代の大半はテクノロジーやソーシャルメディアに注目しています。親は子どもに神を畏れる心を教えるべきです。これは、若い世代に欠けているものです。

また、親は心を開いて、子育てに気を配り、子どもたちに向き合う必要があります。子どもたちの心を惑わし、心を奪うものは、家の外はもちろん家の中にもたくさんあるのです。

(女性ケア従事者、コミュニティリーダー、バシラン州)

参加型クループ分析の中で、既婚の女の子の参加者たちは、思春期の女の子と両親やほかの家族との間に信頼関係がないことが、思春期の女の子たちを、結婚して家の外に居場所を見つけたいという気持ちにさせていることを強調した。また、親や家族の中に支えようという気持ちがない場合、デートや結婚前の恋愛について周囲の噂のほうを信じることが多く、親が子どもと向き合い、悩みや不安について話すことはないと説明した。親は家の名誉を守るために、娘に結婚を強要するのだ。また、SenseMakker® のストーリーでも、主に親から家庭内虐待を受けている女の子は虐待に耐え続けるよりも、結婚して夫に安らぎや保護を求めたいと考えるようになることが明らかにされている。

高リスク行動

高リスクの行動、特に違法薬物の使用は、KIIや参加型グループ活動を通じて、ユース、特に男の子が直面している課題として浮かび上がった。違法薬物の使用は、スール一州とバシラン州のKIが、ユース、特に15～19歳のユースの男の子が直面している最も大きな 問題として報告した。参加型のグループ活動では、違法薬物の使用、喫煙、ギャンブルなどの高リスクな行動は、思春期の男の子たちだけの問題としてとらえられていた。これらの行動をきっかけに、窃盗などの犯罪や社会的逸脱行為を行うギャング集団などに加わる傾向があると、参加者は認識していた。参加者の説明によると、これらの男の子の親は、子どもと別居していたり、すでに亡くなっていたり 、安定した収入源がなかったり/または、子どものニーズを満たすことができなかったりすることが多いという。



U問題を抱える」思春期の男の子の様子を描いたグループイラスト。思春期のウェルビーイング活動。
(未婚の思春期の男の子たち、15～17歳、マギンダナオ州)

既婚の女の子が抱える主な課題

早すぎる結婚は、女の子から健全な成長のチャンスを奪い、結婚後彼女たちが貧困から抜け出すこともできず、早すぎる妊娠をして中途退学し、自身とその子どもの健康が脅かされ、孤立とスティグマにより心を病み、社会の中で精神的に追い詰められていくという破滅的な結果をもたらすことが、調査結果から明らかになっている早すぎる結婚に関する543のストーリーのうち、約半数（45%）が自分自身のストーリーを否定的または非常に否定的に受け止めており、早すぎる結婚が思春期の女の子やその家族、コミュニティに悲惨な影響を及ぼすことを示している。さらに、参加者が前向きに受け止めているストーリーの大半も、やはり思春期の子どもたちの悩みが中心であった。

貧困の連鎖

データからは、大半の親と一部の女の子たちが結婚を、貧困に歯止めをかけ、自分たちの新たな道を開く手段と受けとめていることが読み取れるが、SenseMaker®と参加型グループのデータでは、早すぎる結婚は女の子と家族に終わりのない貧困の連鎖をもたらしていることが明らかになった。多くの場合、女の子も夫側も結婚前から経済的に安定しておらず、経済的に自立する前に子どもが生まれているというデータがある。ストーリーにも、結婚した女の子が、自分や子どもの日々の生活をまかなうことができず、父方の実家に戻る話がいくつもある。特に既婚の女の子は、経済的な必要性と女の子や女性が家事を行うことを期待するジェンダー規範のために、未婚の女の子や男の子よりも海外やコミュニティ外で家事労働に雇われる 可能性が高い、とKIは説明した。

> *小さい頃から 、生活のために洗濯をしていました。今は結婚していますが、今も安定した収入源はありません。私たちはいつもお金を借りています。夫 には仕事がないので、食費のためにお金を 借りなければならないこともあります。借金を返すためにサリサリストア (注:食品雑貨店のような店のこと) で他人の洗濯物を洗ってい　るのです。今では、お金を借りたくても、もう貸してくれません。*
>
> ***(思春期の既婚女性、12〜14歳、スールー州、SenseMaker®)***
>
> *私は19歳です。早くに結婚しました。夫には仕事がなく、自分たちの居場所を確保できていません。 誰か奨学金を出してくれないかなと願っています。私も仕事がなく、生計を立てられないのはつらい。いつまでも親に頼り続けるのは嫌です。子どもの未来のためにも。*
>
> ***(思春期の既婚女性、18〜19歳、スールー州、SenseMaker®)***

中途退学

SenseMakker® のストーリー分析から、ほとんどの女の子が結婚後も勉強を続け、生活を向上させて家族を助けるために教育を修了したいと望んでいることがわかった。また結婚を、時には夫や義理の両親の支援を得て、教育を続けるための道や方法と考える女の子もいる。しかし実際には、学費を払う財源がないことや新妻としての家事の義務、育児などを理由に、多くの女の子が結婚後、学業の中断を余儀なくされていることが、さまざまなデータで示されている。また、SenseMaker®のストーリーに、思春期の男の子が結婚後、家族を養うためのお金を稼ぐことに専念するために学校を中途退学するかもしれないという話があったが、これが収入の道を狭め、その結果貧困の連鎖に再び陥ることにつながっている。 前述のように、女の子たちの中には結婚後、嫌がらせや恥ずかしさから逃れるために中途退学する者もいるが、特に強制されて結婚した女の子にとって、学校に通い続けることは極めて困難なのが実状だ。

> *昔は学校に通っていましたが、8年生の時にやめました。昔、誤った噂が広まって、 結婚させられました 。母がその人と私を 結婚させようと思ったのは、そういう噂で私の女性としての尊厳が傷つけられ、それを止めるために私は結婚するしかなかったからです。今の夫は、まだ私たちが 学生だった頃に私を気に入り、やってもいないことをやっているといった噂が広まりました。*
> *だから、勉強を中断して、ただ 結婚に応じようと思ったんです。現在、私も夫も無職で、実家に頼っている状態です。勉強に集中し、男の子と仲良くしないようにしていれば、こんなことにはならなかったのにと、叱られることもあります。でも、まだ学生だったころは、合格点を取っていたので、頭が悪いとかそういうことはありませんでした 。総合点が100点なら、64点を取っていました。恥ずかしくて、もう勉強を続けられなくなりました。もし噂を聞いた当時の私の気持ちがわかってもらえれば、もしかしたら、私に同情してくれるかもしれません。*
>
> ***(思春期の既婚女性、15〜17歳、ラナオ・デル・ス州、SenseMaker®)***

結婚した女の子とその子どもの健康とウェルビーイングに及ぶ悪影響

SenseMakker®と参加型グループのデータから、女の子は結婚後すぐに子どもを産むようにという圧力を家族や周囲から受け、母親が病気がちになるなど、性と生殖に関する健康に悪影響が及んでいることがわかる。また、既婚の 女の子の中には、流産や子どもの死亡の経験を話してくれる者もいた。妊娠によって身体を壊し、それが引き金となって心や精神を病むストーリーもあった。 さらに、夫からの虐待やネグレクト、また時には、義理の両親や夫の家族からの虐待で結婚生活が難しくなるというストーリーを語る既婚の女の子たちもいた。既婚の女の子の中には、虐待から逃れるために夫と別居したり、離婚したりする者もいて、実家を頼って出戻ることが多いという。

結婚して子どもを授かったのですが、その子は亡くなってしまいました。あの時は辛くて泣いたけど、その後子どもができて、元気に生きています。夫は漁師で、借金することもありますが、お金ができたら返済しています 私も生活のために 魚を売っています。私たちの子どもはまだ学校に通っていません。

(思春期の既婚女性、18～19歳、スール一州、SenseMaker®)

スティグマと社会的孤立

SenseMaker®のストーリーやコミュニティ参加型分析から、結婚かつ/または妊娠している女の子は一層深いスティグマに苦しんでいることが明らかになった。データでは、早すぎる結婚や妊娠は社会的に必ずしも高く評価されておらず、特に結婚は家族の恥を軽減する手段にされることが多かった。女の子の中には家族からも仲間からも差別とスティグマを受けている者もいることがわかっている。例えば、女の子はコミュニティの噂をなくすために若いうちに親に結婚させられ、その後、学校ではこうした状況を理由にいじめや嫌がらせを受ける場合がある。夫や義理の両親、夫の兄弟、そして下の話のように 夫の他の妻から馬鹿にされ、精神的虐待を受けたというストーリーも、既婚の女の子たちから語られた。

また、調査結果によると、既婚の女の子は、結婚と/あるいは妊娠したことで、家族や仲間、より広くコミュニティなど、社会からの孤立に苦しんでいることもわかる。結婚をめぐる女の子たちのストーリーでも、実家を離れて夫や夫の家族と暮らすようになったいきさつと、そのために物理的にも心情的にも実家と距離ができ、サポートが受けにくくなっていることが語られている。また、社会的孤立が、経済的機会その他コミュニティの生産活動に参加する機会の不足など、他の様々な機会の喪失につながる可能性があることも、データが示唆している。例えば、様々な方法で得たデータをいくつかの角度で分析した結果、既婚の女の子の多くが学校に通っておらず、非正規の教育も受けていないことが確認された。このことは、結婚した女の子が仲間から孤立しているだけでなく、学習の機会からも切り離され、雇用機会や、保健教育や心理社会的カウンセリングなど、学校を基盤とした社会サービスやプログラムへのアクセスも制限されていることを示唆している。さらにストーリーは、結婚後女の子が家事労働だけでなく、子どもや家族の世話を一手に担っている姿を浮き彫りにしている。

結婚したのは18歳の時でした。これは私たちの話です。まず、付き合い始めてから、正式に私の家に行って求婚し、同棲して子どもが生まれました。私が子どもを産んでから、彼は(他の女性に)手を出すようになりました。子どもがまだ4ヶ月の時に、彼は私たちを置いて出ていきました。親と同居していないこともあり、私と子どもは転居を繰り返しました。子どもが8カ月くらいのとき、ザンボアンガに行きました。私は仕事に行き、下宿を借り、その後ジョロに戻り、子どもを両親に預けるという、犠牲を払わなければなりませんでした。その後、再びザンボアンガで仕事をするようになりました。きちんとケアしてもらえなかったので、子どもにとっては大変でした。

子どもを養うために必要な仕事は何でもやりました。子どもを親に預けました。就職後、別の夫も見つけましたが、結局は同じで、どちらかというと態度が変な人でした。最初は優しくて仕事も真面目でよかったのですが、やはり子どもがいることを受け入れられないということで、別れることになりました。もういいんだ、そういう運命なんだ、辛くても受け入れるしかないんだ、と子どもが一緒にいる限り、すぐに大丈夫です。

(エヌム:あなたも別居したのですね。 でも、彼はあなたが妊娠していることを知っているのでしょうか？)
私は妊娠6ヵ月の時にジョロに行き、その後ザンボアンガに戻ったので、彼は知っているのでしょう彼は(他の)奥さんとよりを戻したのです。

(エヌム:奥さんがいたんですか？)
はい、それは いいんです。奥さんは ライバルがいるのが嫌だったので離婚を切り出したのは私です。彼女はKCC(ショッピングモール)で私に恥をかかせましたが、夫は私をかばい、私が妊娠しているから傷つけないようにと言いました。大勢の人の前で恥をかかされて辛くても受け流したからいいんです。私は何もできず、結局は　2番目の妻ですから、負けることを受け入れるしかなかったのです。だから、たとえ妊娠していても、別れることにしました。
今は、サウジアラビアで働いている兄姉も少し助けてくれています。両親を支え、私 や子どもたちの暮らしも助けてくれています。兄姉とも、産後は私が仕事を探すという話をしていましたが、人の手を借りないと進まないし、収入もなかなか得られません。

実は、もう一緒にいなくてよかったと思ってるんです。頭痛の種が減りました。何しろ、子どもがいるし、もう一人生まれるので、どんな困難も乗り越えて行きたい　と願うばかりです。Iもし、奨学金などで復学を支援してくれる人がいれば、子どもたちが私と同じ道を歩まないように、彼らの将来のためにも復学したいです。

結局、壊れた家庭を作ってしまったという現実　。私の話は、大体こんなところ　です。誰かが助けてくれるといいのですが、子どもたちが一緒にいてくれることが幸せです。もし誰かが奨学金や生計プログラムを通じて私たちを助けてくれるなら、それは大きな助けになるでしょう。

(思春期の既婚女性、18～19歳、スール一州、SenseMaker®)

早すぎる結婚の拡大要因

早すぎる結婚の根底には、女の子と女性たちをジェンダー差別等のリスクにさらす有害なジェンダー規範と家父長制の力学に根差したジェンダー不平等があることは、調査結果からも明らかだ。早すぎる結婚の根本的な要因は一貫しているが（例：ジェンダー差別、貧困）、拡大要因の強さは、人口の多様性と危機の性質（例：紛争、避難、COVID-19 封じ込め策）を反映して、環境ごとに異なっている。SenseMaker®の結果とKIIのデータから、BARMMで早すぎる結婚が拡大している主な要因は、思春期の性と生殖に関する健康と社会規範の関係を明確にするために用いたフレームワーク内の各領域（個人、社会、組織、リソース）にまたがって存在することがわかった。調査の結果、新たなリスクが発生する中で、紛争の影響や強制移住の状況がどのように要因を悪化させているかが明らかになった。主な要因には、家族の名誉が傷づくことを恐れて行う思春期の性のコントロール、家族への義務感、思春期の女の子の意思決定力不足、貧困、他の選択肢がないこと、さらに結婚について言及しているコーラン（ハディースなど）の解釈や現在の法的環境などがある。

その他、早すぎる結婚のリスクを高める要因として参加者らは、結婚生活に対する誤解、テクノロジーやソーシャルメディアを挙げた。COVID-19のパンデミック下で、マギンダナオ州で実施したKIIでは、（貧困、教育へのアクセス不足、収入創出活動と他の選択肢の不足など）これまで州内で早すぎる結婚を拡大させてきた要因がCOVID-19でさらに深刻化していることがわかった。また、ラナオ・デル・スル州やマギンダナオ州に特有の要因として、政治力とリソースの強化・拡大、一族の争いによる分裂と暴力などがデータから明らかになった。IDP特有の要因としては、受け入れ先へ感謝を示すための親族との結婚や人道支援を背景としたものなどが挙げられた。

思春期の女の子の意思決定力不足

SenseMaker®のストーリーやKIから得られたデータによると、BARMMの多くの思春期の女の子は、女の子と女性を差別するジェンダーや社会規範を背景に、いつ、誰と結婚するかなど、人生にかかわる事柄について決定する力を与えられていないことが分かった。KIIやストーリーからも、女の子の行動、セクシュアリティ、身体、社会性と心の健康、リソースや機会へのアクセスは、両親に、そして結婚後は夫にコントロールされていることがわかる。これは、ダウリー（持参金）の習慣をはじめ、結婚の意思決定プロセス全体に反映されている。

SenseMaker®のメタデータパターンでは、個人には相応の影響力や責任があると考えられていることが示された。しかし、ユース女性が結婚を望んでいない場合でも、通常は彼女に決定権がないことが強く示唆されるストーリーもあり、複雑なものとなっている 。

私は13歳です。夫の家族が我が家に（結婚を）申し込んだとき、私は学校にいました。家に帰ると、(夫の家族と私の家族が)サラ（居間）に座り、箪笥の中にお金やその他の品々を入れて話をしていました。これは何だろうと母に尋ねると、後で私の婚約のことだと知りました。母は「(そのお金は)借金を返すため」と嘘をつきましたが、実際は私のダウリー（持参金）だったのです当時、私は若かったし、母が嘘をつくはずがないと思っていたので、信じてしまったのです。

そのうち、「そろそろ結婚するんじゃない」とからかわれるようになり、疑うようになったのですが、彼らの言っていることが 信じられませんでした。学校に行こうとしたら、今までより多いお小遣いをくれたんです。なぜ50ペソもくれたのかと聞いても、母は何も答えない。学校にいたときに 、「もうすぐ結婚するんだ」という話を聞いて、「おめでとう」と言われたことがあります。家に帰ると、「ガウン」と書かれた箱が置いてありました。母に「誰が結婚するの」と聞くと、「あなたよ」と答えました。私の知識では、そのお金はバイク代にしかならないのに、母は結婚の代金だと言うのですから、ショックでした。

いよいよ結婚式の日を迎えましたが、こんなに 若くして結婚することが受け入れられず、写真撮影 の時も涙が止まりませんでした。結婚して数日後、私はまだ夫がいることに慣れませんでした。いつも父と母のそばで寝ていた私は、両親の「もう結婚したから、そばで寝られない」という言葉を聞いて、涙があふれてきました。

私にはすでに夫がいることを受け入れることができませんでした。夫のそばにいると、私は恥ずかしくなり、また怒りもわいてきました。それは、夫のせいで結婚することになったと分かったからです。彼は以前から私に好意を抱いていたことがわかり、私を手に入れる方法を考え出したのです。学校に戻ると、友達から「結婚したのか」と聞かれましたが、何を言われるか分からないので否定し、事実を隠しました。私が早く結婚したのは、私 のせいだという噂もあったくらいです。 結婚してから、友達にも避けられるようになりました。結婚したために、友達は もう一緒に遊んでくれず、悲しいです。

(思春期の既婚女性、12～14歳、ラナオ・デル・スル州、SenseMaker®)

SenseMaker® のデータ（下図）では、ストーリーの中の出来事の責任の大部分（54%）が個人にあるとされている一方で、出来事の結果はあらかじめ定められたもの（運命として受け入れられる）と考えられている（43%）ことが、パターンとしてはっきり示されている。このことは、結婚の意思決定における力と選択についての話し合いで、逆説や矛盾につながっている。

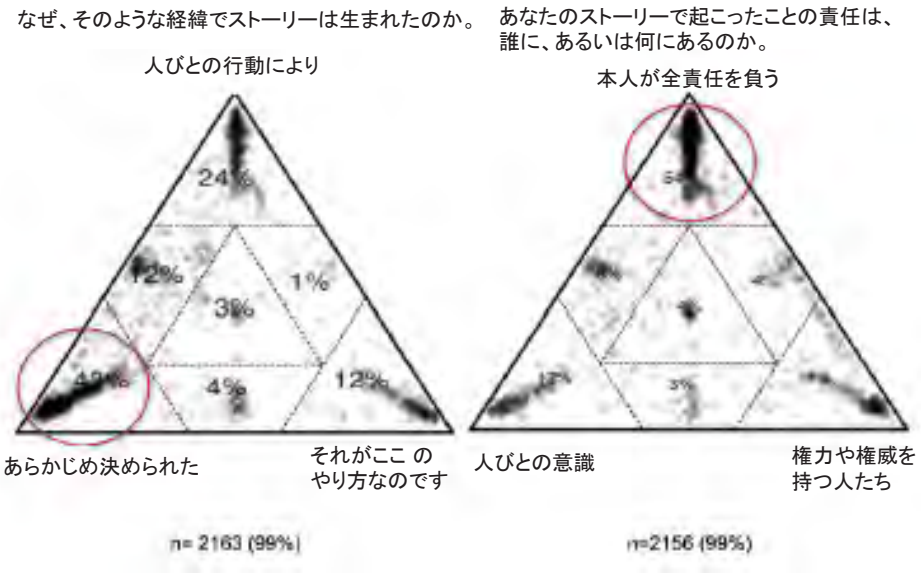


図9：左の三角形 では、左端に「出来事はあらかじめ決まっている」と考えていることを示す大きな集団（43%）があり、右の三角形では、上部に「ストーリーの中で起こったことは個人の責任である」と考える別の大きな集団（54%）が存在する。

コミュニティ参加型分析でSenseMaker®の話を分析した結果、一人称で語られる話は通常受動的であり、個人の主体性から距離を置いていることを反映しているという研究チームの推測が裏付けられた（上記の図9「なぜ、そのような経緯でストーリーは生まれたのか。」の通り）。一方、三人称で語られる話の多くは、ユースの主体性が強く、いかに意図した選択と行動が結婚につながっているかを強調している。紹介されたストーリーのなかで共通していたのは、女の子が自分で結婚につながる行動 を選択することで、実際に結婚が決まるということであった。女の子が男の子と交際したり、交際の気配が あったりすると、親から結婚を迫られることを、さまざまな方法で得たデータが示している。結婚が彼女の「したこと」であると見なされ、そのため、彼女の話がコミュニティ内の非公式なネットワークを通じて共有されることで、責任は彼女にあると考えられるのだ。

> *今話せるのは、早く結婚した女の子のストーリーです。それは その女の子の母親が交際を知って、「勉強が先だ」と子どもを叱り続けたけど、女の子は聞き入れなかったのです。女の子の母親は相手の男の子を探し、男の子は怖くなり、女の子はまだ若く、学校に行っているので、すぐに結婚する予定はないと言ったそうです しかし、「勉強が先だ」と言い続ける母親の言うことを聞かないので、2人の両親が話し合って結婚することになりました。*
>
> ***(思春期の未婚女性、15〜17歳、Maguindanao、SenseMaker®)***

> *「交際は禁止されているので、親が結婚させます。昔は、付き合っているのがわかると子どもを殺していたそうです。親は結婚を段取りして、子どもには早く結婚してほしいと思っています。道徳的には、若いうちに結婚することが認められています。ノーと言えば（家族の）評判が悪くなってしまうため、親は（結婚に）イエスと言わざるを得ないのです. 今でも強制結婚はあります。*
>
> ***(NGO、ラナオ・デル・スル州、KII)***

ほとんどの KI は、ユースには自分の結婚について「主体性」と「決定力」が不足していると述べた。むしろ、結婚を含むユースの人生における主要な意思決定者は親であった。また、思春期の男の子は、思春期の女の子に比べて結婚の決定権をより強く持っているという意見も少数ながらあった。

結婚生活に対する誤解

数名の KI は、思春期のユースが子どもとして結婚を選択している状況について説明した。KIは、思春期の女の子が親の干渉を受けずに結婚することを選んだ場合、それは結婚によって 貧困や/または実家での虐待から逃れられるといった、結婚に対する非現実的な期待を持っていることが多いと述べた。思春期の女の子たちが結婚生活に対して抱く理想や夢は実現されていないと、KIIで指摘されたこのことは、SenseMakker® のストーリー、参加型コミュニティ分析、そして比較すると少ないが、参加型グループ活動においても明らかであった。

参加型コミュニティ分析では、すべてのサブグループが、結婚生活の現実を知り、理解を深めてほしいと述べた。ユースと大人 の参加型グループの参加者は、ユースは貧しい生活から逃れるために結婚を選択すると明言した。ラナオ・デル・スル州の18～19歳の既婚のユースは、「チト（コミュニティで「問題を抱える」ユースの仮名 ）は、自身の選択で結婚しました」と話す。「生活が苦しく、父方の実家が経済的に困窮していたため、妻を持ちたいと考えたのです」

自己犠牲と義務感

SenseMakker®や参加型ディスカッションを通じて集められた多くのストーリーは、思春期の女の子たちには両親や家族に対する義務感があり、そのため、強制結婚に対する恐れや目的、ためらいがあるのは仕方ないと考えていることがわかる。女の子が親への義務感から自己犠牲を払って家族の名誉を取り戻し、あるいは支えるというストーリーである。思春期の女の子たちの両親や家族に対する義務感や自己犠牲の意識と、調査結果を通じてさまざまな形で現れる恥の感情は密接に関連している。参加型グループは、ユースが周囲や仲間の影響でデートをしたり、他の不適切な行動をとるなど、厳しい性的規範に反する「負の価値観」と「悪癖」に陥ることが、早すぎる結婚を拡大させていると明らかにした。

私は18歳です。まだ勉強を続けていた頃、ジョロで叔母と暮らしていました。サヤワン（コミュニティ・ディスコ）に行って、遅く帰ることもありました。同居していた叔母が、「私が勉強に本腰を入れず、男とばかり付き合っている」という噂を流しました 勉強もしっかりやっていて、親に恩返しをしたいと思っていたのに、彼女に悪者にされてしまいました。彼女は、ダウリーをもらうために私に結婚してほしかったのです。

そもそも、叔母が私の学業を支えてくれたのはお金が目当てでしたから。 まだ 同居していた時に私が恐れていたのは、叔母が両親に嘘の噂を流すことでした。口答えすれば「失礼な人間だ」と言われるのでどうしようもなく、状況 を受け入れるしかなかったんです。 何も悪いことをしていないのに、ある人の言葉によって突然彼氏が悪者にされたとき、彼氏のところへ行くことにしました..ただ、ただの嫌な噂のせいで、他人から見た自分のイメージを下げたくはなかったんですそれが嫌で、仕方なく彼（彼氏）の家に行ったんです。私は勉強を中断せざるを得ませんでした...。

学校には戻れませんでした。お義母さんが受け入れてくれて、本当にありがたかったです。彼らは、『ヒハ（娘）よ、入ってきなさい。どうしたの』と。そこで私は、自分の状況と叔母の事情を話しました。 彼女は『それについてはほとんど何もできないけど、いずれは私の息子と結婚してもらう』と答えるだけでした。

夫が受け入れてくれたことに本当に感謝しています。私の勉強を続けるために、誰かが助けてくれることを願っています。1～2ペソのバオン（お小遣い）だけでは学校に通うのは難しく、交通費も払えません。今では、夫と子どもがいて、私は まだ勉強を続けることができません。でも、勉強を 再開し、いつか学校を卒業して、就職して、そして親に恩返しをしたいと今でも願っています。また、夫が学校に戻れるようにしたいです。両親のために生計を立てたい。これが私たちのここでの生活です。お米もなかなか手に入れることはできません。

（既婚女性、18～19歳、スールー州、SenseMaker®）

ストーリーに登場する娘たちは、親の経済的負担を軽減するために結婚を受け入れ、その結果、親は娘のきょうだいによりまともな暮らしをさせることができるようになる。SenseMaker®のデータから、思春期の女の子や女性は、早すぎる結婚をあらかじめ決められたこと、あるいは運命の一部と受け止めていることが明らかになった。ただ、ここに地域参加型分析に参加した大人の住民が加わると、話は複雑になる。

発生するすべての状況は、アッラーの運命にあるのですが、その運命には3つの種類があると考えられます。 第一は、神によってあらかじめ定められた運命（健康、人生、祝福など）です。 第二は、自分で決めた運命（例えば婚前交渉であるとか、無謀な運転による交通事故など）です。第三は、強制的な運命-本人は望んでいないのに、強制結婚のように周囲が強制的にそうさせるもの。それはハラーム（「禁止」）[または]私たちのなかでは許されないことです。なぜなら、それについてまず女性の意見を聞かなくてはならないと明言されているからです。 それでも、家族や私たちのコミュニティがその慣習を続けているから、彼女は結婚に踏み切る。それは逆らえない運命なのです。

（大人の参加者、コミュニティ共同分析ワークショップ、マギンダナオ州）

結婚における親の意思決定

すべてのデータソース（SenseMakker®、FGD、KII）において、早すぎる結婚の主要な意思決定者は親であることが確認された。調査結果によると、親は娘と主に年上のユースを強制的に結婚させるという伝統的な慣習を続けている。よく挙げられるのは、思春期の女の子とユース男性（19～2525歳）との強制結婚だが、もっと年上の男性との強制結婚もある。ラナオ・デル・スル州のあるNGOのKIIは、両親が10歳の娘を90歳のスルタン(注: イスラム教主権者)であるバランガイの長との結婚を強制し、彼の30番目の妻にさせたという話を紹介した。. ストーリーやKIIでも、娘に結婚を強要する理由は、参加者の居住地によってさまざまだった。

(子どもを)お見合い結婚させるのは、政治的な理由からかもしれません。政治家は家族の結婚にも力を及ぼすものです。市長は、自治体への強力なルートを持ちたいと考え、弟や兄も皆、バランガイの家庭に婿入りしているので、そこで票を得て、(彼らの)政治生命が延びるのです。

(NGO, ラナオ・デル・スル州, KII)

一方、コミュニティ参加型分析セッションに参加した大人のグループではほぼ逆で、今の時代、ユースが持つ選択肢は増えているため、親は影響力やコントロール(あるいは保護)が及ばなくなっていると感じていた。コミュニティ参加型セッションに参加した様々な年齢層のグループによると、携帯電話のせいで、ソーシャルメディア上で子どもたちがどんなコミュニケーションをしているか親は監視しにくくなっていると語った。

家族の名誉を脅かされないように思春期の性をコントロールする

SenseMaker®のストーリーや一部のKIによると、早すぎる結婚は、思春期の女の子の性をコントロールする必要があるという大人の意識の現れであり、それ自体、ユースの交際に関して何が許され、何が許されないかという強い社会規範に基づいているという。KIの説明によると、親は思春期の娘の性的行為が家族の名誉を傷つけることを恐れ、コミュニティに噂が広まるのを避けるために子どものうちに結婚させるのだという。KIや思春期の女の子のストーリーでも、女の子が男の子と手をつないでいれば、瞬く間に噂になりうることが明かされた。イスラム社会では、未婚者間の性的関係(ジーナ)は違法とされている。思春期の女の子たちは、実際に男の子と性的関係を持ったか、あるいは持ったと思われた結果、どんな風に両親に男の子との結婚を強要されたかという話をどの州でも同様に紹介した。マギンダナオ州の12歳～19歳の思春期の女の子は、「私は駆け落ちしたと噂されました…私はお見合いには反対だったので、家を出ましたが、無駄な抵抗でした。やはり結婚させられました。」と語った。多くの女の子が結婚に不満をこぼしても、彼女たちは強制結婚を正当な罰として、あるいは家族の尊厳を損なわないようにする手段として受け入れているようだった。

以前は学校に通っていましたが、8年生の時に通わなくなりました。若すぎる年齢で結婚したのは、間違った噂のせいです。噂で私の女性としての尊厳に傷がついてしまったから、噂を止めるためにこの男性と私を結婚させようと、母は考えたのです。夫は学生時代、私のことが好きだったのですが、このような噂が広まり、やってもいないことをやっていると非難されたのです。だから、学業を中断して結婚に応じようと思ったんです。

現在、私も夫も無職で、私は両親に頼っている状態です。勉強に集中し、男の子と仲良くしたりしなければ、こんなことにはならなかったのにと、叱られることもあります。. でも、まだ学生だったころは、合格点を取っていたので、頭が悪いとかそういうことはありませんでした。I総合点が100点なら、64点を取っていました。恥ずかしくて、もう勉強を続けられなくなりました。

噂を聞いた当時の私の気持ちを知れば、もしかしたら、みんな私に同情してくれたかもしれません。

(既婚女性、15～17歳、マラウィ(ラナオ・デル・スル州)、SenseMaker®)

Kまた、親やコミュニティのリーダーは、10代の妊娠、交際、駆け落ち、レイプを社会的逸脱行為とし、それらに対する一種の罰として、かつ、さらなるもめごとを避け、女の子の家族の名誉を守るために結婚という手段で対応していることが、KIによって明らかにされた。例えば、性暴力を受けた思春期の女の子は、家族やコミュニティに恥をかかせないために、加害者との結婚を強制される。

マラウィでの活動中に話を聞いた女の子の中には、性的虐待にあっても、スルタンやイマン(道徳的・精神的指導者)が間に入ってきて女の子や男の子の親に話すのが怖くて話せないと言う子もいました。彼ら(スルタンまたはイマン)は両親に和解を持ちかけ、事を収めるために結婚を強制するのです。例えば、男性が女の子をレイプしたら、その子はその男性との結婚を強制されます。裁判でも、弁護士は『女の子を結婚させて決着をつければいい』と言うでしょう。あるいは、男性の親に『女の子の親にお金を払えば、一件落着ですよ』と言うでしょう。

(NGO、ラナオ・デル・スル州、KII)

貧困と安定した収入創出活動へのアクセス不足

どのデータソースから得た結果も、貧困と安定した収入創出活動に参加できない現状が、BARMMにおける早すぎる結婚の主な拡大要因であることを示している。また、貧困と生計手段がないことを、どの州のKIも参加型グループ参加者も共通して早すぎる結婚の要因として挙げた。.早すぎる結婚についてファシリテーターに質問された大人とユースの参加型グループの参加者は、早すぎる結婚の主な要因として経済的な要素を挙げた。ラナオ・デル・スル州の女性ケア従事者・コミュニティリーダー・グループの参加者は、こう説明した:
「親が娘を早く結婚させるのは、家計の負担を軽くするため。なぜなら、結婚すれば、彼女自身の世帯で別々に暮らすことになるからです」

l貧困と教育は本質的に結びついており、その先に早すぎる結婚という現実が生まれていると、KIは説明する。貧困だけでは早すぎる結婚は起きないが、収入を得るための活動ができないために学費を捻出できず、学校を中途退学することになる。教育が受けられなければ、女の子たちには早すぎる結婚以外の選択肢はほとんどないのが現状なのだ。

> *特に避難民にとっては、生き残ることが最も重要なことだと言えるでしょう。しかし、一般的には生計手段へのアクセスが優先されます生計手段は、子どもたち、特に女の子にとって学校に行くこととイコールだと言えるでしょう。教育を受け、十分な情報を得ることで、「ノー」と言えるようになったり、自分自身でより良い判断をすることができるようになるのです。また、他のことをしたり、追求したりする人生の機会も与えてくれます。貧困から抜け出せないとしたら、海外に出るか（人身取引を受け入れるか）、早く結婚するしかないでしょう。*
>
> ***（政府CSO、マギンダナオ州、KII）***

SenseMaker® のストーリーでは、貧困と早すぎる結婚の一層複雑な関係が明らかになった。早すぎる結婚をめぐる多くの話の根底には、貧困があった。

学費を捻出できない家庭で、女の子は早すぎる結婚を強いられたり、家族を養うという義務感から早すぎる結婚を受け入れざるを得なかったりすることが、KIによっても裏付けられており、図10にも示されている。データ分析参加者の話し合いは、既婚未婚問わず、義務と生計手段とのバランスに集中し、特に親の役割について多く語られた。またストーリーから、女の子を結婚に追いやる慣習や規範があることも浮き彫りになった。いまだにダウリー（持参金）や結婚をめぐる金のやり取りなどの慣習に頼る親がいる実態がある。ダウリー制度は、娘を嫁に出すのと引き換えに、夫の家から金や宝石などの財産が得られるため、親は娘の強制結婚へと駆り立てられている。

> *6年生の頃、ある同級生がいました。彼女の父親が病気で病院に入院していることがわかりました。病院代が払えないので、妹が結婚しなくてはならないと話していました。彼女の妹は結婚を望んでいませんでした。彼女はまだ幼かったし、頭もよく、勉強もまじめにやっていました。病院代は5万ペソほどでした。*
>
> *彼女の妹は仕方なく結婚に同意しました。5万ペソのダウリーで結婚しましたが、その全額が病院代になりました。その女の子は5年生までしか修了していませんが、その若さで結婚するのが恥ずかしいので、学校には戻りたくないそうです。*
>
> *でも、そもそも自分の意思で結婚したのではないし、父親も亡くなってしまったのだから、彼女は恥じることはないと思います。彼女の家族は父親の治療費として5万ペソを支払いましたが、それでも父親は亡くなってしまいました。そのため、彼女は『今まで真面目に頑張ってきたのに、何のためにもならなかったから、学校に戻っても意味がない』と思うようになったそうです。*
>
> ***（未婚女性、15～17歳、ラナオ・デル・スル州）***

質の高い教育へのアクセス不足

すべてのデータソースにおいて、質の高い教育へのアクセス不足が早すぎる結婚の主な要因として挙げられている。農村部や紛争下の地域では、校舎は存在するものの、学校に教師や資材がないことを数名のKIが伝えた。質の高い教育が受けられる場所であっても、思春期の女の子は、主に学費を支払う経済力がないことが障壁となって、教育を受けるのが困難になっていることが、データから示された。

SenseMaker®の調査結果では、経済力の不足が、ユースの就学を左右する主な要因として挙げられている。SenseMaker®参加者のうち、719名（全体の3分の1）が「経済的な不安があるため、学校に通っていない」と回答した。

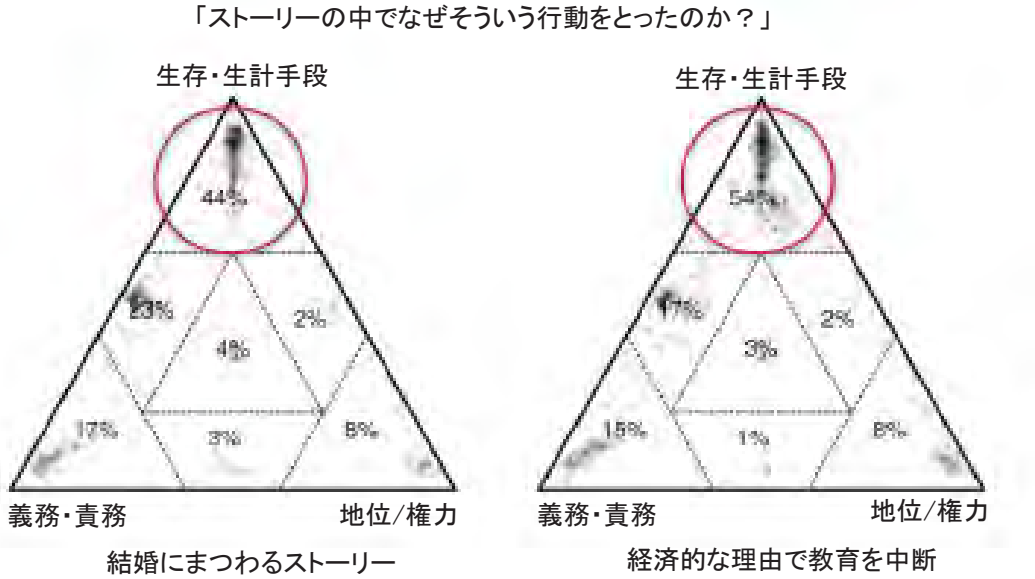


図10:上の三角形でストーリーを解釈・分析すると、生存がすべての行動の主な要因であることがわかる（左の三角形では44%、具体的に結婚に言及したストーリーを示すために抜きだしたもの）特に、経済的な理由で学業を中断したケースでは、「生存」が強く意識されている（右の3つの角のうち、一番上の54%）。これは、義務、結婚、生存、教育の中断という各要素が潜在的につながっている可能性を示している。

各ストーリーにおいて、経済的ニーズは、教育費から家計を助ける必要性まで、さまざまな要素に関連している。コミュニティ参加型分析では、学費を払えないことが早すぎる結婚の要因として最も頻繁に挙げられた。家計を助けるために中途退学する現実の根底には、他の家族を養うという義務感があり、これについては参加型グループ活動やコミュニティ参加型分析でも話し合われた。結婚であれ仕事であれ（多くの場合、農業や野菜などの販売、海藻養殖、運転手）、家計を助ける方法として、ユースは教育を中断するというのが参加者たちの意見だった。

ラナオ・デル・スル州とマギンダナオ州の大人とユースの女性たち（既婚・未婚）は、特に長女が弟妹を含む家族を養わなければならないという圧力を感じていると指摘した。ラナオ・デル・スル州の未婚の思春期の女の子は、彼女のコミュニティで「問題を抱えている」といわれている思春期の子どもは長女だと説明した。「もし売り上げからもうけが出なかったら、家族は食事を抜くことになります。」。同時に、思春期の女の子のグループや女性コミュニティリーダーらは、「問題を抱えていない」ユースは一人っ子だと説明した。

SenseMaker®とKIIの結果は、教育の欠如が結婚と密接に関係していることを明確に示している。女の子が何らかの理由で学校を中途退学すると、親は彼女たちを強制的に結婚させた。思春期の女の子たちは、結婚しか教育に代わる選択肢はないと考え、こうした強制結婚に応じる傾向があった。注目すべきは、コミュニティ参加型分析セッションに参加した8人の既婚思春期の女の子のうち6人が、学費を払えなくなったために親に強制的に嫁がされたと話していることだ。彼女たちは、教育を受けていない自分たちにはこれ以上の選択肢がないと考え、両親の結婚の決断に「同意」したと話している。

テクノロジー、ソーシャルメディア、「恋愛結婚」

KIIとSenseMaker®のストーリーから、早すぎる結婚の意思決定に至る経緯の中でソーシャルメディアとテクノロジーが複雑に関係していることがわかる。両親が強制した結婚にしろ、ユース自身がソーシャルメディアを通じて社会とつながる中で結婚を選択するにしろ、ユースによるテクノロジーやソーシャルメディアの利用が早すぎる結婚のきっかけになっていることが、データで示されている。

スールー州、ラナオ・デル・スル州、マギンダナオ州の8人のKIは、ユースがネットで出会い、その後結婚していくため、テクノロジーとソーシャルメディアの普及が早すぎる結婚を拡大させていると述べた。このように、これらのKIは、ソーシャルメディアとテクノロジーの「逸脱した」利用が結婚を促進していると非難し、もしソーシャルメディアを利用していなければ、ユースたちは出会わなかったし、その後結婚もしなかっただろうと暗に伝えている。あるKIは、過激派と子どもの花嫁に関する最近の調査結果を次のように報告した。

> *（マラウィ包囲網による）避難生活の最中、人々はマラウィを包囲する武装集団のFacebook投稿を共有し、女の子たちは応援のコメントを送った。ソーシャルメ公共の場では声を上げない女の子たちは夢中になり、応援コメントを送っている。武装集団内での役割がどんなものだったのかは不明ですが。*
>
> ***（国連機関、ラナオ・デル・スル州、KII）***

親が娘に早すぎる結婚をさせたとする大部分のKIとは対照的に、これらのKIは、思春期のソーシャルメディアの利用が早すぎる結婚の原因であると表明した。マギンダナオ州の数人のKIは、COVID-19の感染拡大下でユースによるソーシャルメディアやテクノロジーの利用が進んだことで、ユースが異性と出会い、その後結婚する頻度が上がった可能性を指摘した。早すぎる結婚の慣習に対するCOVID-19の影響について、マギンダナオ州のKIは次のように述べた。

> *家にいてやることがないので、ほとんどの時間をネットや携帯電話で、知り合いかどうかわからないような人とおしゃべりして過ごしているのです。ストレスや退屈を軽減するために、ネットで友人を探したり、あるいは会ったりする傾向があるようです。特に「テキストメイト」がいたり、誰かと付き合っていることがわかると、親は強引に結婚させようとするのです。*
>
> ***（政府CSO、KII、マギンダナオ州）***

この種のテクノロジーの利用が、交際、噂、駆け落ち、早すぎる結婚へとつながっているが、多くの場合、各個人の選択によるものと受け止められていることが、データからわかる。

> *彼女が結婚したのは18歳の時です（まだ勉強中であったため、両親は若くして結婚することに反対していた）。*
>
> *彼氏（現夫）と一緒に家出し、現在は義理の両親と同居しています。まだ10代の頃、彼女は勉強ができなくて、集中力もありませんでした。その代わりに、彼女は携帯電話やメールなどに夢中になり、そこで夫と出会いました。2カ月の交際を経て、結婚を決意しました。ラナオ・デル・スル州マグィングの出身の彼女は、夫の住むブティグに移り、現在妊娠中のため、学校は中断しています。*
>
> *夫が殴られるのが怖くて、故郷に行けません。そして、自分が選んだ人生を悔やんでいます。*
>
> ***（既婚女性、18～19歳、ラナオ・デル・スル州、SenseMaker®）***

SenseMakker®のデータや参加型グループ分析の結果では、早すぎる結婚の要因は噂やそれによる社会の圧力ではなく、テクノロジーそのものであると考えられている。なぜなら、交際が始まれば結婚することは避けられないと受け止められているからだ。コミュニティ参加型分析で成人女性の参加者が指摘したように、「恋愛 = 結婚 」なのだ。参加者が「恋愛結婚」と呼ぶユース自身が決めた結婚は、社会的に評価されておらず、結婚したユースは未熟で準備ができていないとみなされ、スティグマにつながる場合があることをデータは示している。

結婚したとき、私は学校に通っていました。7年生でした。経済的に厳しくても勉強を続けました。今、私は9年生です。携帯電話を使って、メッセージを交して、それがきっかけで結婚したんです。夫の家族から結婚を申し込まれました。だから、どうしようもなかったんです。何をやってもダメなんです、だって [間]。だから今は結婚していますが、まだ子どもはいません。[遠い距離を]歩く歩き方がわからないんです。苦境に立たされていますが、それでも勉強を続けます。私たちの生活をより良いものにしたいのです。この世からあの世まで。平和でありますように。

(既婚女性、15～17歳、マギンダナオ州、SenseMaker®)

最初はただの同級生でした。Facebookでお互いのことを知るようになって、そこで関係が深まり(そこでお互い好きになり)、それで結婚することになったんです。セブでRTW(既製服)のビジネスを始め、その後、地元ラナオ・デル・スル州に帰り、儲けたお金で農業(カンバソック)を始めました」。以上です。

(既婚男性、18～19歳、ラナオ・デル・スル州、SenseMaker®)

特に大人の共同分析ワークショップ参加者は、子どもたちがネット上で何をしているか監視できないことから、携帯電話の利用について非常に神経をとがらせ、恐怖を抱いていると述べた。どのグループも、こうした流れはすでに広がっており、変えるのは困難だと述べた。

今、子どもたちは携帯電話やノートパソコン、Facebookを利用することができますが、親はこれらの新しい機器(あるいはインターネット)の使用に慣れていません。中にはメールすら読めない人もいます。子どもたちは、学校教育のために(そして無知でないために)これらの機器を使う必要があるため、この流れを変えるのは困難です。Facebookや携帯電話で男の子と女の子が出会い、デートを重ね、交際を始めるのですから、強い影響力を持っています。

(大人のワークショップ参加者、マジンダナオ州)

上述の通り、早すぎる結婚を決定するのは主に親であることは、参加者も認識しているが、SenseMakker®とKIIのデータから、「恋愛結婚」の事例もいくつか明らかになった。" KIIは、「恋愛結婚」について、ユースが親密なパートナーに強い感情的なつながりを抱き、互いの結婚の約束を確認するために駆け落ちする場合に起こるユース同士の結婚であると説明した。ストーリーでも、コミュニティ住民らは「恋愛結婚」と「駆け落ち」を同じ意味で使うことが少なくなかった。駆け落ちする女の子に関するストーリーやKII、参加型グループディスカッションでも、女の子に結婚したいと決める力があることは裏付けられている。しかし、早すぎる結婚を親が勧める伝統や、家族の経済的負担を減らす、あるいは男性との「不適切な」行動によって家族に恥をかかせないために結婚しなくてはならない、という、家族・コミュニティ・社会レベルでの結婚への義務感を考えると、親や同世代の仲間、さらに広く社会規範が思春期の女の子たちの駆け落ちの意思決定にどのような影響を与えているかは、依然としてはっきりしない。

参加者は、思春期の男の子が親から早すぎる結婚を強要されたストーリーも紹介したが、その圧倒的多数は年上の配偶者と結婚する可能性が高い思春期の女の子のストーリーであり、女の子に比べて思春期の男の子の方が結婚に関する意思決定において力を発揮する可能性が高かった。女の子が結婚を望んでいなくても、男の子が女の子の親に結婚の許可を求めるという話もあった。このような場合、親は男の子の申し込みに同意して、娘を無理やり結婚させるのである。

ここの女性たちが抱える問題のひとつは、自分の意思に反して早く結婚してしまうことです。同級生もそうでした。当時、私はマニラから帰郷したばかりで、帰郷後、彼女がもう結婚していることを知り、びっくりしました。さらに悪いことは、誰かがあなたに興味があると言って家に来た場合、あなたはそれを拒否することができないことです。姉が結婚を嫌がって、末っ子が代わりに結婚することもあります。T彼女の場合がそうでした。お姉さんには彼氏がいましたが、同級生ではなかったので、彼女が結婚する羽目になったのです。T家に来た人はどうしてもお嫁さんを見つけたいということだったので、彼女にその気がなかったとしても、承諾せざるを得なかったのです。まだとても若いのに、もう結婚してしまったという感覚、辛いですね。彼女はこのことがあったので、彼女は私たちを避けて、会うと隠れてしまうんです.。自信をなくしている様子が見て取れました。結婚は秘密のはずだったので、私たちが知ったことに驚いていました。同級生のケースでは、本当に本人の意思に反していることがよくわかりました。

(思春期の未婚女性、15～17歳、ラナオ・デル・ス州、SenseMaker®)

これは、早すぎる結婚のストーリーです。彼は大人の男性で、交際中でした。T二人は結婚を予定していましたが、女の子の両親は彼をボーイフレンドとして認めていませんでした。それで、女の子は家出をしたのです。そのため娘の両親は、好むと好まざるとにかかわらず、娘をその男の子と結婚させるしかなくなりました。そして女の子の両親の立ち会いなしで二人は結婚しました。

(既婚男性、20～24歳、ラナオ・デル・スル州、SenseMaker®)

私たちのバランガイは、SPMS(シャリフ・アグアク, パガティン, ママサパノ, およびシャリフ・セイドナ)という紛争地域に位置して おり、小競り合いが頻繁に起こるため、住民たちが頻繁に避難しているということが、ユースにとって問題になっています。避難所では若い人も男女別にはならないため、異性と出会って一緒に過ごします。時には、互いに惹かれ合うこともあり、そこからメッセージのやりとり が始まり、やがて結婚へとつながっていくのです。

そうやって、早すぎる結婚や10代の妊娠が起こるのです避難所では、みんなが出会い・ 集まる機会があるので、私たちのところでは そのようなことが起こっています。そして、しばらくして若い女の子が妊娠していることがわかるのです。また 、早すぎる結婚の場合、男の子も女の子もまだ若く、生計に関する知識も乏しい ため、生計を立てるのに苦労します。 結婚すると、学校に行かなくなり、女の子が妊娠すると、当然ながら学校に通う機会も失います。生計を立てるという点 では、まだ未熟なのです。

そこで、親が日々の暮らしを手助けすることになります。紛争がよく起こるので、私たちはこうした問題を抱えています。

(既婚男性、18～19歳、マジンダナオ州)

早すぎる結婚をめぐるイスラム教のさまざまな解釈

早すぎる結婚は望ましいとする一方で、現実には、結婚した子どもは見下され、スティグマを受けており、早すぎる結婚に対するコミュニティの受けとめ方には矛盾があることを、様々なデータが示している。参加型分析の話し合いやSenseMakker®のストーリーの中でも、宗教が正面から登場することは少ない。

だが、SenseMaker®のストーリーでも、早すぎる結婚に肯定的な意見(伝統である、あるいは誘惑を回避するため)から否定的な意見(イスラム法の解釈による、あるいは早すぎる結婚を法律的にも宗教上も認めないという意見)まで、さまざまな視点の根拠になっているのは宗教だった。P参加型グループ活動では、各州の大人のコミュニティ住民、スールー州のユースたち、ラナオ・デル・スル州の18～19歳の未婚のユースの男の子たちに、日常生活におけるイスラム信仰の重要性が強く訴えられた 。忠実で献身的なムスリムであることは、思春期の正しい在り方とみなされる一方でイスラムの信仰や教義に従っていないユースは「問題を抱えている」、規範から逸脱しているとみなされていた。

また 、子どものいるユースやすでに結婚しているユースも、「問題を抱えている」と見られることがほとんどだった。



FGD: Mix of married and unmarried boys, 12-14 years old, Lanao del Sur

「問題を抱える」思春期の男の子の様子を描いたグループイラスト(既婚・未婚の 思春期の男の子、12～14歳、ラナオ・デル・スル州、ウェルビーイング活動)

参加者は、以下のように話した。「子どもはアッラー(神)に祈り、問題を抱えているから助けを求めているのだ」と説明した。ウスマンは、マニラで働く両親と離れ、叔母と暮らしています。両親からの仕送りは生活費にしかならないため、ウスマンは勉強することができません。お金は叔母が管理しています。ウスマンは生活必需品を買うために、今、三輪車の運転手として働いています。彼は苦難を経験したにもかかわらず、倫理観が高く、信心深いのです。」

KIIやSenseMakker®のストーリーのなかには、コミュニティの人びとがイスラム教やコーランでは早すぎる結婚が容認・奨励されていると解釈していると指摘するものもある。また、大人のコミュニティ住民のなかには、イスラム教の信仰にしたがって子どもを結婚させた という話もあった。KIからは、コミュニティ住民がイスラム教は早すぎる結婚を奨励していると信じているのは、結婚の許容年齢に関するコーランの一説を誤って解釈しているからだとする意見が出された。KIは、コミュニティの人びとがコーランを誤解していること、イスラム教は早すぎる結婚を奨励していないと、はっきりと述べた。KIは、コーランに書かれていること、特に結婚年齢については様々な解釈があり、結婚の適齢期についても宗派により、さまざまな考え方があると説明した。

私には 18歳という若さで結婚した娘がいます。26歳の方と結婚しました。若くして結婚させたのは、「シヤップ・カヌ・アガマ・タノ・アガマ・イスラム」(イスラムの教義を守る行為)として早い 結婚がスンナ(推奨)されているというイスラムの考え方があるからです。現在、二人の間には子どもが一人いますが、二人とも仕事がないため、経済的に苦しい状況です。ここで、私の話は終わります。

(既婚男性、40～49歳、ラナオ・デル・スル州、SenseMaker®)

宗教は、(早すぎる結婚プログラムを実施する上で)一番の障壁となるでしょう。ジェンダー平等の話題も、宗教上はタブーなのです。私がコミュニティのリーダーたちにジェンダー配慮 のトレーニングを行うと、彼らはいつも「西洋思想的な概念を押し付けないでくれ」と言うのです。彼らは変化を拒む、そう私は考えています。そしてそれは、宗教書で男女の役割がどのように解釈されているか、ということに起因しているのです。コミュニティが心を開かなければ、新しいアイデアを導入したり、理解してもらうことは難しいです。MILFや軍と話をしても、難色を示されることが多いです。一夫多妻制の話を持ち出して、非常に無神経な会話や言い合いが始まってしまう。でも、イスラムを人権的な視点で見たり、ジェンダー公正に焦点を当てたりして、そういう会話に対抗できるようになったのは良かったと思います。言葉の使い方の問題 である場合もあります。私はジェンダー平等というより、ジェンダー公正の方を使っています。

(政府CSO、マギンダナオ州、KII)

法的環境の整備

KIIのデータは、早すぎる結婚に関連する法律間に矛盾があることや、早すぎる結婚を扱う明確な法律がないことが、各コミュニティの早すぎる結婚を減らす上で障害となっていることを示している。何人かのKIIは、プログラムスタッフがコミュニティで早すぎる結婚を防ぐ対策を実施する際に法的根拠が持てるように、フィリピン国内での早すぎる結婚を公式に排除する法律の制定に向けたアドボカシー活動と、そうした法律の必要性を述べた。ラナオ・デル・スル州のKIIは、結婚可能年齢に関する法律間に矛盾がある現状について説明した。

フィリピンの法律では、親の同意がなくても18歳で結婚できます。ただ、イスラム教徒のフィリピン人が従うイスラム教の大統領令では、イスラム教徒のフィリピン人は、男の子は15歳、女の子は思春期になれば結婚できるとしています。その規約を変更するためのロビー活動を行い、現在、その規則 は保留になっています。

宗教指導者たちは、その法律の変更を望んでいません。コーランには、具体的な年齢の記載はありません。

バンサモロでは、それ(早すぎる結婚)は、法的にも文化的にも認められているのです。BARMMは政策立案を行っている状態ですが、変化は国レベルでも起こさなければなりません。

(NGO, ラナオ・デル・スル州, KII)

SenseMaker®のデータで明らかになった課題について、誰が変化の推進を担うべきかというファシリテーターの問いかけに対して、データ分析に参加した大人たちは、コミュニティレベルで社会規範の変化を推進するサポートをトップダウンで行えるとすれば、法律を制定する必要があると述べた。しかし、話し合いの中で出てきた法律の目的は、必ずしもユースのウェルビーイングや社会的性差の解消といった方針を促進するものではなかった。例えば未婚のユースのグループでは、「駆け落ち禁止」の法律の導入が話し合われたが、子どもの権利侵害からユースの「選択」に議論の対象が移った。

参加型分析に参加した大人、既婚・未婚の女の子は、子どもの結婚を防止・抑制、または許可するファトゥワ(イスラム法に基づく決定)を含む既存の国内法や地域のガイドラインをよく知らなかった。ウスタッズ(イスラム教の教師)やコミュニティの宗教指導者との話し合いに基づく参加者たちの知識は、早すぎる結婚の「概念」が容認され一般的な慣習であるということだった彼らは、宗教指導者たちが早すぎる結婚が子どもにどのような影響を及ぼしているかについて話し合うことと、この問題に取り組むためのアイデンティティ活動を、主な提言として挙げている。

強制 移住と生活の不安

調査の結果から、貧困・収入創出活動がないこと・質の高い教育へのアクセス不足・家族の名誉など、早すぎる結婚を生む背景となっている要素が、強制移住や人道的危機の下で増幅されたことがわかる。また、KIIにより、強制移住という状況に特有の早すぎる結婚のリスクが浮き彫りになった。

貧困、収入創出活動の不足、質の高い教育へのアクセス不足

KIたちは、危機的状況下で家族の生存のリスクが高まるにつれ、極度の貧困が早すぎる結婚の主な原因となっていると強調した。彼らは、強制移住で安定した収入の道を失った親は、家族の基本的ニーズをほとんど満たせず、経済的負担を軽くするために娘に結婚を強要する傾向があると説明した。SenseMaker®のストーリーや参加型グループ活動でも、このことが裏付けられた。ストーリーでは、紛争による強制移住で親が生計手段を失った家庭ほど、厳しい貧困に直面していることが分かった。ストーリーやKIIでも、思春期の女の子を結婚させることは、ダウリー(持参金)だけでなく、裕福な家庭や政治的に影響力のある家庭に嫁がせることでリソースや政治的な保護が得られ、親の責任や庇護の負担が軽くなることが示された。

例えば、ラナオ・デル・スル州では、強制 移住や暴力的な紛争 の際に、一族や家族からの結婚への圧力が悪化したと、KIたちは述べた 。一族がより大きくなり、より大きな影響力を持つように、マラウィ包囲網後、一族のリーダーの命令で娘や親族の若い女性は結婚させられたと言う。

マラウィ包囲網の前は 、私の家族はまだ完全な状態でした父は漁師として働き、マラウィで獲物を売っていました。マラウィが包囲された時、避難していた私たちは家々を歩いて卵を売って生活していました。地元の 村に戻ったとき、私はまだ独身で、両親が私を結婚させたがっていることを知りました。当時はアラビア語を勉強していたのですが、やめざるを得ませんでした。4年生の時でした。

最初に両親が私を結婚させたいと知ったとき、私は同意したくはなかったです。でも、両親は宗教的な人がいいと言っていたので、それで承諾したんです。私たちは結婚しました。親が決めた結婚なので、最初は彼を無視していました。まだ彼のことをよく知らなかったので、喧嘩をすることもありました。当時はまだアラビア語の勉強をしていたのですが、彼が私の勉強をサポートできなくなったので、結局やめざるを得ませんでした。

今、夫は農夫として働いており、収穫期には州 に帰っています。時々、私も一緒に行きます。収穫期には7日間ほど滞在し、植え付けの時期が過ぎたら 家に帰ってくることもあります。時には、生活費を稼ぐために運転手をすることもあります」

(思春期の既婚女性、12～14歳、ラナオ・デル・スル州、SenseMaker®)

データにからは、強制移住中あるいは紛争下で暮らす思春期の女の子は、避難先のコミュニティ住民からの嫌がらせや、教材がない、あるいは使えないという理由で質の高い教育を受けるのが一層困難になっていることがわかる。前述したように、思春期の女の子が学校をやめると、結婚する可能性が高くなる。

学校内にはピアネットワークや安全な空間もあります。なかには安定した良い学校もありますが、一般的に、特に学校が監視されていない紛争下の地域では、そうでない 学校もあります。マラウィ市の学校は農村部の学校より質が良いので、家族は子どもをマラウィ市に行かせようと頑張ります。結局、貧しい人々が取り残されてしまうのです。

(NGO, ラナオ・デル・スル州, KII)

ラナオ・デル・スル州で避難生活を送る12～14歳の未婚の女の子たちは、避難民家族の教育と収入創出活動が今すぐに必要な実態を訴えた。思春期のウェルビーイング活動で彼女たちは、仮設避難所や避難先のコミュニティで暮らす思春期の子どもたちのイラストやプロフィールを紹介した。

「問題を抱えていない」ユースは、バランガイの住人で、愛情深い家族に育てられ、良い学校で勉強することができ、安定した収入のある両親を持ち、家族が所有する土地と家に自分の寝室を持っていると説明があった 。一方、マラウィでの武力紛争のために避難生活を送っているというユースは「問題を抱えている」と説明された。

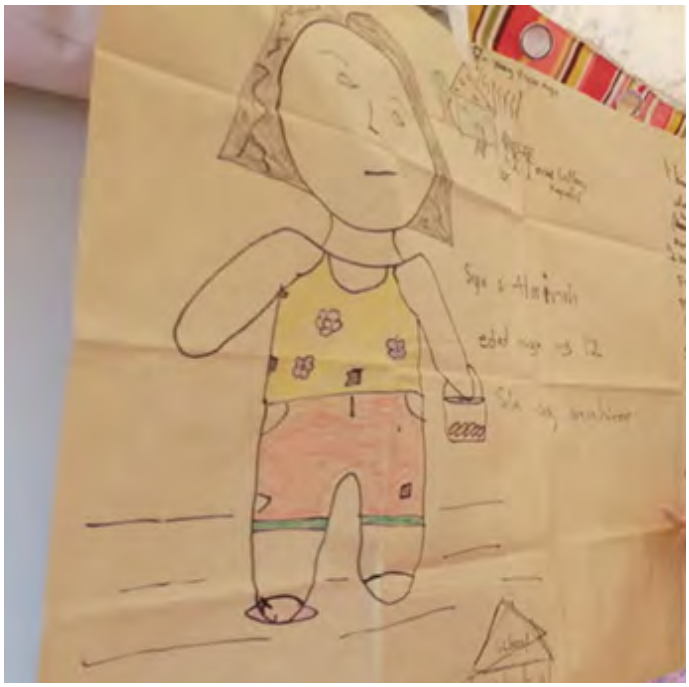


図12：思春期のウェルビーイング活動で、ラナオ・デル・スル州マラウィの12～14歳の避難民の 女の子たちが作成した「問題を抱えていない」思春期の女の子の絵。

彼女は 12歳の女の子で街角で揚げバナナを売っています。全部売れないと、母親に叱られます。揚げバナナを食べることは禁止されていて、お腹を空かせてしまいます。人道支援でもらった学用品を使い、友達に教えてもらうように頼みます。授業の声が聞こえるように教室の外に座ってバナナを売ることもあると言います。

DSWD から受け取る救援物資はすでに終わりましたが、彼女の両親はいまだに新しい仕事を見つけることができない。以前は農業を営んでいました。長女として家族に頼られ、彼女の売り上げで米や肉を買っています。

(避難民の思春期の女の子、12～14歳、思春期のウェルビーイング活動、ラナオ・デル・スル州)

家族の名誉

ラナオ・デル・スル州のコミュニティ住民の参加者とKIは、避難民が一時的に避難する避難施設 や仮設の避難場所は出会いの場であると同時に、セクシュアル・ハラスメントが発生するスクのある場所だと指摘した。KIs KIはさらに、セクシュアル・ハラスメントの噂で社会から受けたスティグマや家族の恥を打ち消すために、娘を強制的に結婚させる親もいるため、セクシュアルハラスメントによって女の子が結婚するリスクは高まっていると述べた。

強制移住に特有の早すぎる結婚のリスク

シェルターの代償

KIIのデータから、強制移住によって、女の子が親戚と結婚させられる可能性が高まることがわかる。マラウィ包囲網やその他の武力抗争で強制移住を余儀なくされた家族は、親族の家に身を寄せ、支援を求めた。ラナオ・デル・スル州のKIIでは、住まわせてくれたお礼として親が受け入れてくれた家の息子に娘を差し出していたことが報告された。

IDPに娘がいて、受け入れ先に息子がいる場合、感謝の気持ちからお礼として結婚を取り決める のです。通常、ほとんどの家が一間で、それぞれの部屋はありません。女の子のプライバシーは全くありません。これは、避難所でも同じです。布一枚で仕切られている家もあります。家族はみんな一緒に寝ています。

また、受け入れ先のなかには、布一枚で同じ家に大勢が一緒に寝泊まりしているところもあり、これは現在も続いています。それは、仮設避難施設でも同じです。もともと一家族用として設計されています。

16歳くらいの女の子がいる家族でもプライバシーはありません。受け入れ地域のIDPや受け入れ先のコミュニティでは、15歳のユース女性が結婚する話がよく聞かれます。

(NGO, ラナオ・デル・スル州, KII)

人道支援

また、KIIでは、国際支援団体や国内の援助機関が提供する人道支援が、避難民家族の間で早すぎる結婚を拡大させる一つの要因になっていると指摘された。ラナオ・デル・スル州とマギンダナオ州の数人のKIは、家族単位で配られる支援物資をもらう別の受け皿を作るために親が娘を強制的に結婚させようするため、人道支援セクターによる人道支援がその動機づけになっていると指摘した。

紛争や強制移住があった場合、大事なのはサービスが受けられること。だから、強制された早すぎる結婚が普通に行われてしまうのです。避難民家族は援助や物資を1家族1パックしか受け取れないため、親は娘を結婚させ、その娘を別世帯としてカウントさせ、彼女の分も受け取れるようにします。こうした状況下では、生き残ることが最大の目標なのです。

(NGO, マギンダナオ州, KII)

思春期の女の子のための支援・ケア・保護を担う地域システム

BARMMには構造的に早すぎる結婚を生活の中に根づかせる環境やジェンダーに関する社会規範があっても、思春期の女の子たちやその家族、コミュニティはレジリエンス（回復力）を持ち続けている。たとえレジリエンスが、思春期の女の子がシングルマザーとして生き抜く力を意味するとしてもだ。BARMMでは、思春期の女の子を支援・ケア・保護するために取り入れられたASRHの社会規範フレームワークの下で、地域のリソースとなる人材や組織が現在持っている力を各レベルで発揮する姿が見受けられる。

思春期の女の子の適応能力

調査データやコミュニティ参加型分析での話し合いから、両親やケア従事者、有害な社会規範・ジェンダー規範、環境的要素（社会経済的不平等、法的環境など）が思春期の女の子の意思決定に影響を与えることが明らかになっているが、SenseMaker®のデータは、思春期の女の子が課題を克服してコミュニティに前向きな変化をもたらす可能性を持っていることを示している。

SenseMaker®のデータでは、女の子の方が男の子よりも、紹介されたストーリーを「伝統を守る」ためにしたことと受け止める傾向が弱く、思春期の女の子の方が男の子よりも、変革の担い手になる可能性が高いことが示された。この傾向は、思春期の女の子に限られたものではなく、図13が示すように、女性一般にみられるパターンである。全体として、SenseMaker®のデータから、特に女性の間では、伝統と急激な変化（変わってほしい）が拮抗していることがわかった。女性、男性ともに3分の1（30%）の語り手は、ストーリーに登場する 人々が変化を望んでいると回答しているが、女性の語り手 （37%）は男性の語り手(27%)に比べ、少しずつでも何らかの変化 （良い点を受け入れ、悪い点をなくす）を望んでいた 。

しかし、ジェンダー別で最も大きな違いは、伝統を守ることを強調するエピソードを紹介した割合が、女性（8%）に比べて男性（17%）は2倍を超えて多かったことである。このジェンダー別による違いはすべての年齢を通じて見られ、思春期の男の子に見られるパターンは男性全体のパターンと非常によく似ていた。 さらに、SenseMaker®のデータでは、12～14歳の既婚男女の参加者は、伝統を守ることばかりを重視するようなストーリーは紹介しておらず、このことは、既婚ユース男女が早すぎる結婚を根づかすジェンダー・社会規範の変革に向けて協力する可能性を示している。ただし、該当する人数が少数であるため、これに基づく一般化には注意が必要である。

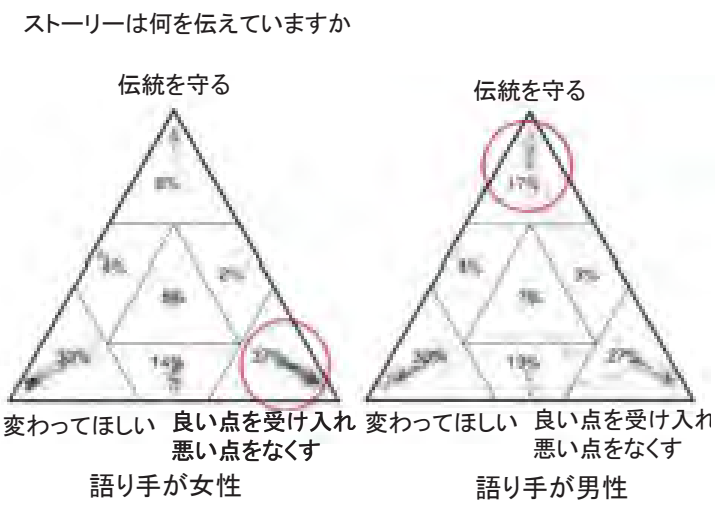


図13．変化に関する回答者の傾向に見られるバランス（女の子/女性と男の子/男性別で実施）

図14のパターンを見ると、SenseMaker® 参加者は、紹介したストーリーの中で「実現するためのサポートとモチベーションの両方がある（5%） 」とは感じていないことがわかる。このパターンは、ユース自身が自分のストーリーを三角バランスの中に置いた位置でもストーリーの内容でも同様に示されている。このことから、思春期の女の子ひとり一人が健康で安全に大人へと成長するために今持っている能力を活かす上で、ユースと支援者その他リソースの間の関係性を強めることが非常に重要なことがわかる。同様に、ストーリーでも、「実現するための知識とやる気の両方がある（8%）」と感じていないことも読み取れる。したがって、思春期の女の子の能力（例えば、計算、読み書き、金融リテラシー、問題解決などの知識とスキル）を養うプログラムが、知識とモチベーションについて彼女たちが感じているギャップを埋めるのに役立つ可能性がある。

最後に、この図はユースが「知識とサポートの両方がある（6%）」と感じていないことを示しており、これは思春期の女の子の意思決定力と表現の自由を強化することを目的としたエンパワーメント・ワークショップによって軽減される可能性がある。 追加分析によると、男性はストーリーの中で「やる気がある（32%）」、女性は「知識がある（23%） 」と感じており、年齢差ではなくジェンダー差があることがわかるが、要素を複合すると、男女とも割合は低くなる。

KIIやストーリーのデータから、思春期の女の子は子どもや家族の世話の責任 、家事の責任を一手に担っている ことが示唆される。例えば、思春期の女の子のストーリーには、女の子は弟妹の面倒を見る責任があり、母親の家事を手伝うために学校を中途退学する話が出てくる。しかし、彼女たちのストーリーは、強制移住や紛争に直面する女の子たちを含め、思春期の女の子たちがいかにレジリエンス（回復力）を持ち合わせているかを示している。 ストーリーは、紛争下で強制移住を余儀なくされ、終わりの見えない不安の中、家族のサポートもなく、基本的サービスも中断・欠如し、経済不安に直面してもなお、思春期の女の子たちが現状を打開し、生き続けるその能力を浮き彫りにしている。結婚そのものが、自ら置かれた状況下で利用可能な手段を用いて生き延びる能力の表れといえる場合もあった。またストーリーは、追い詰められて結婚から逃げる能力も示している。

思春期の女の子のストーリーには、経済的・身体的・心理的な虐待のために夫と離婚したり別居したりした話が出てきた。さらに、SenseMaker® や参加型のグループ活動から、多くのユースが、自分の子どもが自分たちと同じような経済的困難や結婚に関する問題に決して 直面しないように、将来の世代のために異なるあり方を作り出したいと考えていることがうかがえる。

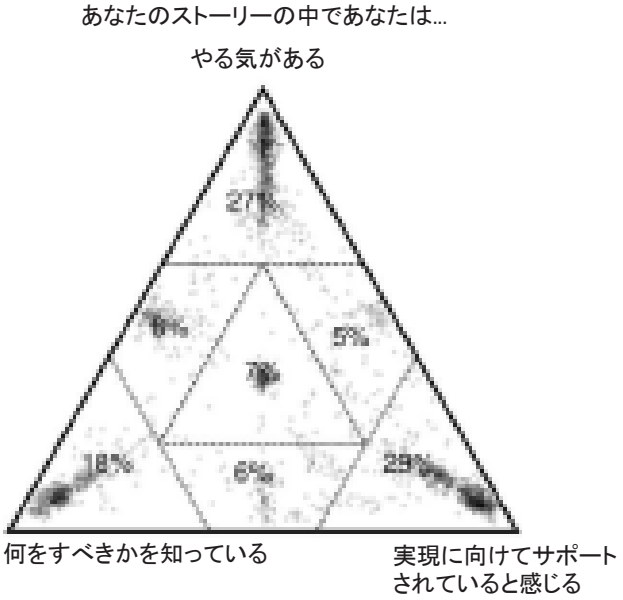


図14：この三角バランスの上にストーリーを配置すると、ストーリーの中でモチベーション があることを示しているという集団が大きく（27%）、何らかのサポートを見つけた人も同じくらい多い（29%）にもかかわらず、サポートとモチベーションの両方が存在するというストーリーははるかに少ない（5%）ことがわかる。知識（18%）とサポート（29%）、知識（18%）とモチベーション（27%）の間にも同様のパターンが見られる。

当時はまだ幼かった のですが、母が亡くなり、父が再婚したときのことは今でも覚えています。子だくさんだったため、父は 私を養うことができなくなり、私は叔母と暮らし始めました。

6年生の時にお金がなくて学校に行けなくなり、レストランで働いて 叔母の手伝い をしていました。そして 結局、祖母と一緒に暮らすことにしました。家族は私を結婚させた のですが、お見合い結婚だったし、私は結婚が嫌だったので、数ヵ月で別居しました。夫と別居後、

父の実家に戻り、ALS（代替教育システム）で勉強しましたが、経済的な理由で数カ月で再び中断せざるを得ませんでした。また叔母のところに戻って、仕事を手伝っています。もう一人の叔母が仕立て屋をやっているため、私は今、彼女のところに行く予定です。その後、マニラで食料品店をやっているので、マニラに行って、働く予定です 。

（既婚女性、12～14歳、ラナオ・デル・スル州、マラウィ）

叔母のおかげで、夫と私は出会いました。彼女のボーイフレンドは、たまたま私の夫の友人だったのです。叔母がボーイフレンドと会うときは、いつも私が同行していたからです。ある日私たちは 、叔父がついてきたのに気づかず、私は その人と結婚しなければならないこと になったんです。私は彼のことが好きではありませんでしたが、私たちのしたことが一族の恥だと言われたので、仕方なくです。

泣いて、結婚したくないと叫びましたが、どうすることもできなかったのです。彼を本当に愛していなかった上、まだ子どもを持つことは考えていなかったので、子どもを持つまでに2年かかりました。自分はまだ未熟なことがわかっていたからです。いろいろなことをやって、人生を楽しみたかったんです。しかし、最終的には、すでにここにあるものを受け入れなければならないことに気づきました。だから、2年かかったのです。

今は子どもが二人いて、子どもの一人は来年から学校に行くかもしれません。夫が定職に就いていないので、私は海外で働きたいのですが、子どもがまだ本当に小さいんです。子どもたちには、私と同じような経験はさせたくないのです。人並みに貧しさから抜け出して、まともな生活をして、豊かさを味わわせてあげたいです。

（既婚女性、18～19歳、スール一州）

和の挨拶! 私が今の夫とFacebookで出会ったのは、18歳でジョロのノートルダム寺院で学んで いた時でした。最終的に 、会ってデートをするようになりました。ある日、父は私たちが一緒にいるところを見られてしまい、怖くてどうしたらいいのかわからなかった。

そこで、いっそのこと一緒に暮らそうかと思ったんです。家に帰ると兄に罰せられるかもしれないので、怖かったんです。その後、彼氏に連れられて彼の家に行き、結婚式を挙げました。夫がいい人でよかったです。しかし、彼の母親と姉妹は違いました。私の話をでっち上げて、近所の人に嘘の噂を流しているのです。私は口答えもしないし、騒ぎたてもしません。夫が良い人で、私をないがしろにしないのが幸いです。私は学校を卒業します、シャア・アッラーに捧げます。その後、仕事を探します。その後、仕事を探します。また、私が早く結婚したことは、両親にとって苦痛であったと思いますが、両親には感謝しています。

（思春期の既婚女性、18～19歳、スール一州）

両親と家族の適応能力

両親

娘のケア、サポート、保護において、親は極めて重要な役割を担っていることがデータで示されている。During t思春期のウェルビーイング活動では、どの州のグループも、思春期の子どもたちのウェルビーイング全般に100%責任を負わないまでも中心的な役割を果たすのは両親であることを確認した。すべてのグループの参加者が、親は子どもの道徳的・宗教的指導や、経済・保健・心理社会上/教育上のサポートを中心的に行い、その責任を担っていると述べている。参加者は、教師をしている母親や両親が自営業をしているなど、「問題を抱えていない」ユースの親には、安定した収入と生計手段があると解説した。また、そのような親は安定した安全な住居を提供してくれるという。

親は子どもの性格や行動をよく理解し、家庭内でどのような行動が適切かを明確にする必要があります。実際に育て、一番大きな影響を与えるのは親なのですから、親は、子どもの行動を誰かのせいにしてはいけません。私たちは、子どもたちに適切な模範を示し 、指導する ために、子どもたちに対する私たちの行動や言葉に注意しなければなりません。

（女性ケア従事者/コミュニティリーダー、参加型グループセッション、バシラン州）

親は子どもたちに正しい情報と指導を与える存在であり、まさに問題を共有する場所なのです。

（思春期の既婚女性、15～17歳、参加型グループ活動、スール一州）

SenseMakker®のデータと参加型コミュニティ分析ディスカッション、そして参加型グループ活動に より、親は早すぎる結婚から子どもを守る存在であることが確認された。コミュニティ参加型分析セッションでデータを分析したすべてのグループが、子どもを教育し信頼する形であれ（大人グループ）、子どもを意思決定に参加させる形であれ（既婚の思春期の女の子グループ）、早すぎる結婚を避けるためには親の存在が重要であると感じていた。

また、SenseMaker®のストーリーは、早すぎる 結婚の強要について行動変容の道筋も示していた。大人の親は、子どものうちに娘を無理やり結婚させたことを後悔している。行動変容に影響を与えるという点では、図15のグラフが示すように、12歳～19歳の思春期の女の子の グループにとって、両親、特に母親（440人）が自分たちの話を聞いてくれることが特に重要であることがわかる。また、程度は低いものの、思春期の女の子は、自治体関係者（267人）やソーシャルワーカー（244人）にも話を聞いてもらいたいと考えている。19歳未満 の女の子については、ストーリーの中で父親（300人）よりも母親（440人）の方が影響力が強いというデータが出ている。コミュニティ参加型分析では、早すぎる結婚を実際に経験しているユースの生の声に対する意識を高めるための教育的支援を求める声が、ユースだけでなく大人からもあがった。

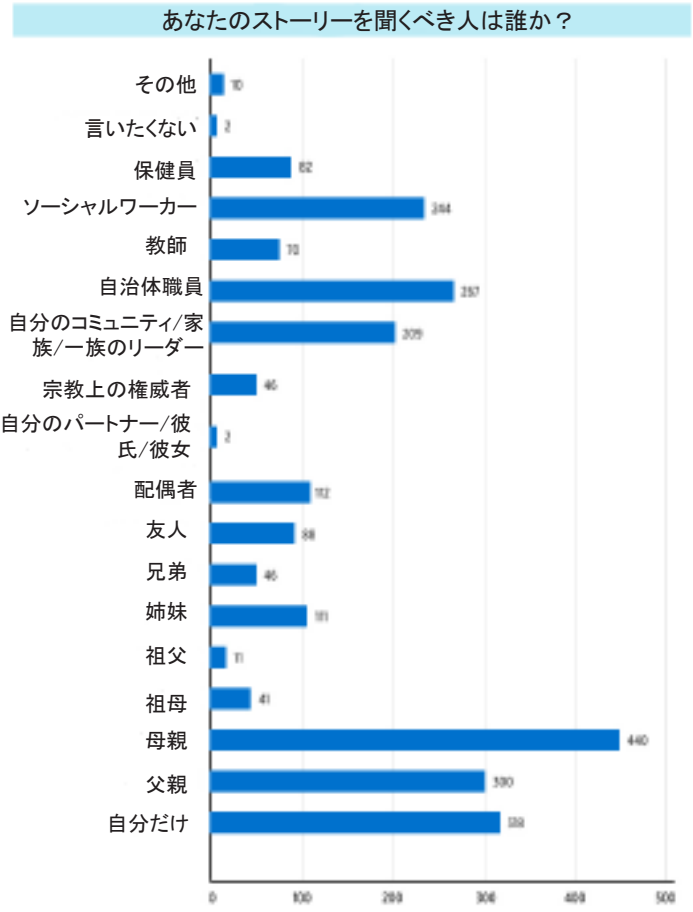


図15：回答した12～19歳の思春期の女の子846人のうち、親に話を聞いてほしいという声が強く、特に母親（440人）が多かった。その他の主要な大人は、父親（n=300）、政府関係者（267）、ソーシャルワーカー（244）であった。

> *早すぎる結婚の原因であるフェイスブックにはまる子どもたちを指導するのは 、親の大切な役割です。*
>
> ***(思春期の既婚女性、12～14歳、参加型グループ活動、スール一州)***

家族・親族

親以外の親族のサポートの役目 というのは、データ上ではやや曖昧なところがある。KIIやストーリー、参加型コミュニティ分析で彼らは、両親と子どもが衝突した際に間に入って仲介役をしたり、前向きな影響を与えたり、サポート役を務める、あるいは経済的に助けたり、強制移住してきた親戚を受け入れたり、姪や孫の女の子や妹の面倒を見たりすることも考えられると述べられている。さらに、健康に関する情報源としての役割も担っていると述べられている。参加型グループ活動に参加したラナオ・デル・スル州とバシラン州の未婚の思春期の女の子たちは、SRHの情報源として母親、叔母、姉、祖母などの女性の親族を挙げていた。

また、SenseMaker®の参加者は、大家族（例えば 叔父、叔母など）が有害な噂を流したり、圧力をかけている場合があるとも 述べている。その他、兄弟からの罰を恐れたり、姉妹の間の愛情や緊張関係など、きょうだい間などでも家族の力学が働く状況に陥る恐れがあると、データは示している。参加型コミュニティ分析において、女の子とユース女性たちは、特にユースと家族、コミュニティとの関係など、世代を超えて信頼関係を築く必要性を確認した。

> *一番印象に残っているのは、親子間の信頼関係に関するストーリーです。なぜなら、それは女の子の人生を本当に左右するものだからです。*
>
> ***(既婚女性、18歳、参加型コミュニティ分析)***
>
> *家族の信頼関係が必要です。どんな噂話が流れても、うのみにする前にまず真偽のほどを確かめるようにしましょう。*
>
> ***(大人 コミュニティ住民、参加型コミュニティ分析)***

より広い地域の支援システムに内在する可能性

コミュニティリーダー

Web of Support活動では、参加型グループの参加者全員が、議長や指導役といったバランガイの職員をユースのためのリソースとして挙げた。「コミュニティに暮らすユースのニーズがわかっているのだから、バランガイの議長には、様々な問題を把握し、解決策を打ち出す責任がある」というのが、参加者らの意見だったスールー州の15～17歳の未婚の女の子はこう説明している。「彼（バランガイ議長）はバランガイ全体の子どもたちの問題を一番よく知っている人だから、アブサヤフ・グループ（テロリスト・グループ）に加わらないように、そして生活を良い方向に変えるように、住民たちと話すべきだと思います」ラナオ・デル・スル州の18～19歳の未婚の女の子は、彼女のコミュニティのバランガイ議長は「学校に通っていない者も含めて、例えば鍛冶屋など、ユースに仕事を紹介しています」と述べている。 同様に、バシラン州とスールー州の参加型グループもユース支援の中心は市長だとし、スールー州の18～19歳の既婚女性は、「市長はリーダーであり、住民たちの生活状況を知っているはず」なのだからと言う。

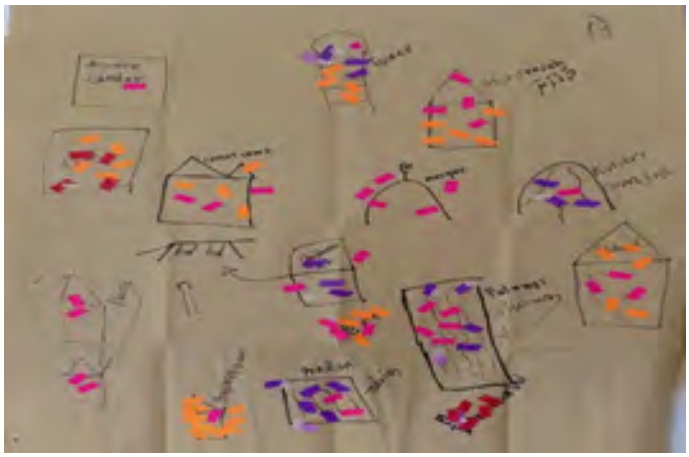
法執行機関、軍隊、コミュニティに根ざした平和維持活動

KIIや参加型グループセッションでは、思春期の女の子とその家族を武力紛争やテロから守るために各コミュニティには何層もの保護策があることが分かった。 バシラン 州とスールー州の参加型グループ参加者（ほとんどが思春期の男の子・男性）は、コミュニティではまず、フィリピン国家警察（PNP）、AFP、バランガイの平和維持活動チーム（BPAT）が保護にあたると述べた。スールー州の15～17歳の未婚の女の子は、PNPは「地域内の違法薬物を阻止し、銃を持つ者を逮捕する役割を担っている」と説明した。スールー州の女性ケア従事者/コミュニティリーダーによると、AFPの民兵組織である市民武装部隊（CIFGU）は、「子どもを兵士として採用 するテロリストと戦う」ために州内のボランティアから隊員を募っているという。参加者は、コミュニティにおけるリソースと サポート に関する話し合いで、BPATについても言及した。BPATはバランガイ職員と村の自警団で構成され、地元警察と連携してバランガイでの自主警備による平和維持、法・秩序の維持に努めている。

イスラム教関連施設

SenseMaker®や参加型グループの参加者の多くは、宗教が早すぎる結婚を促進するものではないにせよ、支持するものであると認識していたが、マスジドやマドラサなどの宗教施設やMRLを、ユースが利用できるコミュニティの資産ととらえていることもわかった 参加型グループセッションでは、どの州のユースもマスジドやマドラサを、ユースが頻繁に訪れ、主に教育、カウンセリング、イスラム教の指導などのサポート やサービスを受けられるコミュニティ内の安全な場所として認識していた（コミュニティマッピング活動の様子は図16と17を参照）。ラナオ・デル・スル州の年齢の低い未婚の男の子やマギンダナオ州のユースも、マスジドをユースがSRHに関するイスラムの原則を教わる場所として認識していた。 前述したように、コミュニティでは「良いムスリム」であることが高く評価されている。

参加者は、「ヒジャブをつけている」「1日に5回祈りを捧げる」「礼儀正しく公正な」者など、信心深いユースは、「行儀が良い」「正しい行いをする」「尊敬できる」「役に立つ」と見ていた。KIによると、MRLやイスラム教の宗教学者、特に中東で訓練を受けた者や/または アラビア語の読み書きができる者は、コミュニティでリーダーとして大きな影響力を持つという。そして、結婚可能年齢などの宗教書の文章や家庭での意思決定に影響を与える他の社会規範をコミュニティがどう解釈するかは、宗教指導者に左右されると、KIは解説した。



未婚の女の子12～14歳。マギンダナオ州 コミュニティマッピング活動



既婚の思春期の女の子15～17歳。ラナオ・デル・スル州 コミュニティ・マッピング活動

図　16、17:　どの州の思春期の女の子も、マスジドやマドラサはコミュニティの思春期の子どもにとって安全な場所だと認識していた。

教育制度と教師

結婚と教育には、さまざまなつながりがある。参加者のストーリーの中で言及されているように、結婚は教育を中断させることも多いが、特に参加者が結婚を肯定的に受け止めているストーリーの中では、リソースの提供という形で結婚が教育継続の支えとなることもある。簡単に言えば、結婚しても教育に戻れれば、幸せになれるということだ支えてくれる配偶者は、これを実現する上で非常に重要な役割を担っており、親に経済的な余裕がなくなった場合、多くのユース女性らが将来の教育を確保する必要に迫られ結婚に追い込まれることも少なくない。

私のいとこは、両親が苦労していたので、早く結婚しなければなりませんでした。彼女の 夫は経済的に余裕があり、義理の 両親は彼らが 住む場所を確保してくれていました。いとこは今、学校に通っていて、義理の両親が彼女の勉強をサポートしています。いとこが早く結婚したのは、叔父叔母 が勉強にお金をかけられず、学校に行くなと言うこともあったからで、最終的に叔母が嫁がせることにしたのです。そうやって、彼女は学校に戻れたのです。

(既婚女性、15～17歳、ラナオ・デル・スル州)

若いのにもう結婚して子どもがいる知り合いがいます。彼らは(男性か女性かには触れていない)配偶者と子どものため、また、ミルクを買うお金を稼ぐために 働いています。もう子どもがいるから学校には戻れないし、かわいそうです。私は今6年生で、一生懸命勉強しているので、彼らのようにはなりません。母は洗濯の仕事をして、父は大工として働いている ので、両親の手伝いをしたいです。勉強を終えて、兄妹を助けることもできるようになりたいです。

(未婚女性、12～14歳、スールー州)

教育を継続することで長期的により確かな支えができるかもしれない。だから、多くの家庭は子どもを学校に通わせるために犠牲を払う。参加型グループ分析でも、このことは、結婚と自分の夢の実現の間でどう折り合いをつけるかをめぐる話し合いにはっきりと表れていた。

学校まで歩いて往復するだけ。ときどき遅刻したときは、授業に参加しないこともあります。学校の行事があっても用意するお金がないと、お金を借ります。学校をサボって海藻を採ってきて売ることもあります。

私は他に9人きょうだいがいますが、4人は亡くなりました…私は学校で必要なものを買うために海藻 集めを手伝っています。私の両親は、私たちの生活に必要なものを買うために、海藻集め をしています。私もたまにそういうのを手伝ったりしています。学校の勉強が大変なときも、授業をサボって海藻集めに行くこともあります。また、母やきょうだいの体調が悪いときは、授業をサボります 。学校に戻ると先生に怒られるのですが、事情を説明しようとします。海藻が未熟だと苗にならないから、待つ訳にはいかない場合もあります。食べるものがなければ、我慢します。潮の流れが強くないときは、ただ海藻を拾うこともあります。

ココナッツの殻を探して炭にし、(それを売って)コーヒーや砂糖を買います。奨学金をもらって勉強を終えて、両親の苦労に報いることができればと思います。

(未婚女性、18～19歳、スールー州)

Web of Supportのグループ活動で、どの州の既婚・未婚ユースもユースを支える存在として、教師を最も頻繁に挙げた。スールー州の12 ～14歳の未婚の女の子は「彼ら(教師)は正しいマナーを教えてくれます。なぜなら、ユースは最近、親に反抗したり、頑固で、授業をさぼる者も多いですが、教師がいると怖がって言うことを聞きます」前述の通り、思春期の女の子は、思春期のウェルビーイング活動で、「教師」を「良い」「安定した」職業として挙げている。教師は、早すぎる結婚プログラムの中でロールモデルとして中心的役割を担う、また親子間に信頼を築く後押しとなる可能性を持っている

政府の保健・社会サービス機関

どの州のKIも、BARMMでは、ユースとその家族が利用できる主な保健・社会サービスの提供や調整を政府の各機関が主導しているという。ユースを含むコミュニティに対する主要な社会サービスの提供者として、いくつかの特徴的なプログラムが、KIや参加型グループ参加者から挙げられた。各州のKIが紹介したのが、DWWDのPantawid Pamilyang Pilipino Program(4Ps)だ。4Psは、新生児から18歳までの子どもたちの保健・栄養・教育の向上を目的とした、国の「最貧困層」世帯を対象とした条件付き現金給付プログラムである。

あるKIは、このプログラムでは、子どもが学校に通い、バランガイの保健所で定期的に健康診断を受けることを条件に、家族に毎月現金が給付されると説明した。DSWDは、4Pや持続可能な生計プログラム(SLP) など、幅広い社会サービスプログラムを実施しているという。Web of Support活動でも、ユースたちはDSWDをコミュニティのユース支援を行う存在として認識していた。マギンダナオ州のすべてのサブグループの参加者とラナオ・デル・スル州の18～19歳の既婚女性は、4Psプログラムついて明確に語った。4Psプログラムでは、15～24歳のユースを対象にしたユース育成プログラムで「情報と意識喚起のセッション」が行われていると数人のKIが述べたが、こうしたプログラムの規模に関する追加情報は提供されなかった。

KIと参加型グループ参加者は、ユースとその家族に保健・社会サービスを提供している組織として、自治体、バランガイの所・保健所、保健省(DOH)などを挙げた。

どの州やサブグループの参加型グループ活動でも、ユースとその家族に対する支援は州総合保健局（IPHO）、市町村保健ユニット（RHU）、および/または主にバランガイの保健所（BHS）を中心に行われているとした。IPHO、RHU、BHSは、行政上は地方行政単位（LGU）の組織の一部であるが、DOHの一部として運営され、家族計画、性と生殖に関する健康、HIV/AIDsや女の子と女性を対象としたその他の保健関連サービスを提供している。ラナオ・デル・スル州のKIIは、マラウィ市の市社会福祉開発局（CSWDO）の自治体が運営するソーシャルワークと子どもの保護プログラムについて語った。ラナオ・デル・スル州のあるKIは、1ヵ所ですむ「ワンストップショップ」に言及。その中にはマラウィ市の保健施設にある子どもの保護サービスがあり、近隣の避難所に住むユースや受け入れ先にも提供されていると述べた。また、スーール一州の参加者は技術教育サービス開発局（TESDA）をユースのための重要なリソースとして挙げ、ラナオ・デル・スル州の参加者はそれよりもはるかに少ない程度ではあるが同様に挙げた。バシラン州のKIによると、TESDAは標準的な職業技術教育だけでなく、特にユースを対象にした価値観の形成も行っている。

INGOとNGO

KIと参加型グループの参加者は、INGOやNGOが 思春期の女の子をどのように支援・ケア・保護しているかについても議論した。マギンダナオ州とラナオ・デル・スル州の大人を中心とした参加型グループ参加者は、住民たちは「赤十字」（赤十字国際委員会）、ユニセフ、世界食糧計画(WFP)、オックスファム・インターナショナル、アクション・アゲインスト・ハンガー、プラン・インターナショナル、セーブ・ザ・チルドレン、コミュニティ・ファミリー・サービス・インターナショナル（CFSI）といったINGOや人道支援機関から支援を受けていると報告した。

マギンダナオ州の16～19歳の既婚男性とケア従事者/コミュニティリーダーはともに、避難先で子どもたちに安全な場所を提供している組織としてセーブ・ザ・チルドレンを挙げた。ヤギンダナオ州とラナオ・デル・スル州の各グループの参加者は、以下のNGOを挙げている。

- フランスの人道支援団体である技術協力開発機構（通称「ACTED」）（男性マア従事者/コミュニティリーダー、マギンダナオ州）
- 紛争下のコミュニティのための社会経済・インフラプログラム「平和で豊富なコミュニティ・プログラム（PAMANA）」（女性ケア従事者／コミュニティリーダー、マギンダナオ州）
- 武力紛争や軍事的虐待の被害者に法的支援を行う代行 法律 NGO「アイディアルス・インク」（女性ケア従事者/コミュニティリーダー、マギンダナオ州）
- 環境悪化と気候変動、貧困、紛争と緊迫した社会関係、弱いガバナンス に焦点を当てたNGO「エコウェブ」、ミンダナオ島を拠点に「校舎の改修や子どもたちに学用品を提供するなど、学校に必要な改善」を行っているNGO「バレー ・ミンダナオ」（女性ケア従事者/コミュニティリーダー、ラナオ・デル・スル州）

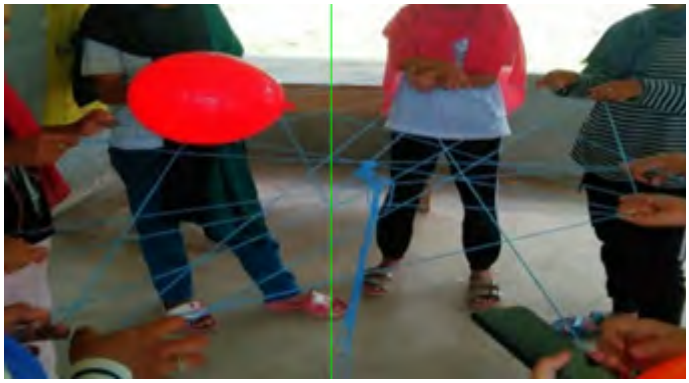


図18：12～14歳の未婚の思春期の男の子、Web of Support活動、バシラン州。

ソーシャルメディアとテクノロジー

分析方法を問わず、参加者からソーシャルメディア

（Facebookなど）や携帯電話が早すぎる結婚の拡大要因として挙げられたが、携帯電話などの新しい機器は思春期のウェルビーイング活動で「問題を抱えていない」ユースの在り方につながるリソースとして、どの州やサブグループでも高く評価されていた。

ソーシャルメディアとテクノロジー

分析方法を問わず、参加者からソーシャルメディア

（Facebookなど）や携帯電話が早すぎる結婚の拡大要因として挙げられたが、携帯電話などの新しい機器は思春期のウェルビーイング活動で「問題を抱えていない」ユースの在り方につながるリソースとして、どの州やサブグループでも高く評価されていた。携帯電話は物質的な豊かさを指すだけでなく、思春期の学習に役立つ存在として受け止められていた。思春期の参加者は「学校のための機器」とは、思春期の子どもたちが学校の勉強をこなすために携帯電話で情報にアクセスするためのリソースのことだと説明した。マギンダナオ州のKIや参加型コミュニティ分析セッションに加わった参加者、COVID-19の影響下で、教育を継続し家庭外の仲間とつながる手段として、ソーシャルメディア、携帯電話、その他のテクノロジー（コンピューターなど）の価値が高まったと述べた。

KIIのデータによると、ソーシャルメディアが女の子の早すぎる結婚のリスクを軽減した可能性も示している。マギンダナオ州の数人のKIは、早すぎる結婚の事例がソーシャルメディア上でますます　可視化され、自治体の各機関に注意を促す手段になっていると指摘した。KIIは、Facebookで早すぎる結婚について投稿することは、この問題に対する意識を高め、問題の深刻さを改めて認識することにつながると指摘した。

既存の子ども保護制度に欠けるもの

思春期の女の子をサポート・ケア・保護するために働く人材や組織の力はあるとする一方で、データからBARMMの子ども保護システムに欠けているものが浮き彫りになった。それは、思春期の子どもを中心としたプログラム、人道主義的なプログラム・サービス、早すぎる結婚の対策プログラム、さらに情報・プログラム・サービスを通じて思春期の女の子を効果的に支援するための戦略が含まれる。

M: COVID-19以降、CEFMの発生率に変化は認められましたか？増加ですか、減少ですか？

P: Facebookでは、早すぎる結婚に関する投稿が目に見えて増えています。私のFacebookのアカウントや友人からの投稿を見ると、個人的にそれを実感します。心配ではありますが、逆に言えば、早すぎる結婚の発生を議論する際のエビデンスとして役立ちます。こうしたソーシャルメディアへの投稿を通して、CEFMが現実の問題であり、単に 議論をするためや、女性の権利を擁護する市民社会・団体によって作り上げられたものではないことが可視化されてきています。実際におきているのです。Facebokを見てください。

(NGO, マギンダナオ州, KII)

<u>ユースを中心とした総合的プログラムに欠けるもの</u>

調査結果から、BARMMには思春期のユースを中心としたプログラムが不足していることが明らかになった。さまざまな情報源から得られたデータによると、既存のユース向けプログラムは、ユースの多様性に配慮しつつ、彼らの特定のニーズと優先事項を満たすためにユースと共同設計された多部門から成る総合的取り組み（すなわちユース中心のプログラム）を開発するのではなく、むしろ住民レベルでの意識向上と情報の普及に焦点が置かれていることがわかった。ほとんどのKIは思春期向けのプログラムが自分たちの州にはあるとしながら、そのプログラムは年齢、ジェンダー、民族、能力、配偶者の有無、子の有無、学校の状況などを考慮して思春期の多様なニーズに合うように開発されたものではなかった。. 特に、SenseMakker®と参加型グループで、コミュニティのユースが利用できるリソースやサポートに関する話し合いで「ユース」または「ユース中心」のプログラムに言及されることはなかった。さらに、研究参加者が、ユースが主導するプログラムを取り上げたり、これらのプログラムの複数の段階でユースの意見を聞いていると述べる場面もなかった。例えば、ユースグループへの参加、プロジェクトの設計や分析協議への参加、ユースアドバイザリーフォーラムへの参加について語られることもなかった。

マギンダナオ州では、KIは数少ないながらも、年齢が高めのユースや学校に通っていないユースなど特定のサブグループを対象としたユースプログラムを紹介した。しかし、プログラムの効果、規模、頻度、期間、プログラムがユースと一緒に設計されたかどうかに関する情報は紹介されなかった。一方、バンサモロ人権委員会（BHRC）が、思春期のユースや15歳以上のユースを対象としたアドボカシープログラムを実施していることは紹介された。活動内容は、いじめ防止のための 啓発、労働法の基礎、女性や子どもに対する暴力 など、子どもの権利に関連するものである。TBHRCは、イスラム教における子どもの権利について取り上げたラジオ番組を定期的に放送している。ある KI は、DSWD が アンラッド・カバターン（直訳すると「ユース育成または成長」）を実施していることを指摘し、「人格形成と前向きなライフスタイルの促進、意識喚起と家庭生活志向、経済発展を基盤とした、学校教育を受けていないユースのための包括的プログラム」であると述べた(マギンダナオ州政府社会サービス提供者)。

また、別のKIは、マギンダナオ州政府が、マギンダナオ州の15歳～30歳までのユースのための具体的な活動や取り組みを実施するための戦略を概説した3年間の州ユース開発計画や、ユースに関する州の条例を起草していることを紹介した。KIによると、この条例が成立すれば、より長期的な政策の枠組みとして機能することになるという。

一方、バシラン州、スール一州、ラナオ・デル・スル州では、ユースを中心としたユースプログラムへの取り組みが極めて少ないことがデータで示されている。バシラン州のあるKIは、ユースのプログラムのほとんどは政府、特にRHUが主導していると言及した。しかし、他のKIは、RHUのユースプログラムが資金不足のために活動を停止していると指摘した。バシラン州の参加型グループ参加者は、イサベラ市などのLGUが、早すぎる結婚、10代の妊娠、子どもの権利に関する啓発活動を定期的に行っていると述べた。

スール一州のKIたちは、政府以外でユースプログラムに取り組んでいる団体を挙げた。CSOのスグ教育者フォーラム・インク、地元NGOのバンサグ・ババエ（「誇り高き女性たち」）、スール一州女性評議会（SPWC）は、SRHR、子どもの権利、早すぎる結婚、 GBV、生計に関する啓発・教育プログラムを行っている。しかし、参加型グループ活動から、これらのユースプログラムは住民に周知されていないことがわかった。

スール一州の参加者が挙げたNGOのプログラムは、ユースのための職業技術訓練プログラムであるTESDAのみだった。そうした中でマギンダナオ州のあるKIが、法に抵触する子どもたちに焦点を当てたマラウィ市CSWDOの子どもとユースのプログラムの設計と実施にユースが参加していると述べたのは、特筆に値する。

子ども・ユース福祉プログラムでは、法律に抵触した子どもたちが対象となります。コミュニティのユースを動員してセッションを作り上げ、プログラムを準備します。ユースの能力を高め、異なる状況と彼らを保護するさまざまな法律を理解させるための情報・教育キャンペーンが行われています。

(社会サービス提供者、ラナオ・デル・スル州、KII)

プログラムはどれも同じです。若いユースの具体的なニーズに基づいたサービスはないです。プログラムの内容 は、妊産婦の健康、子どもの保健ケア、家族計画です。ARH（思春期の生殖に関する健康 ）はありません。未婚の女の子が病院に来て 、腹痛がするというふりをして、超音波検査をする頃には出産間近だとわかるんです。 たいてい、母親か姉と一緒にやって来ます。

(NGO, ラナオ・デル・スル州, KII)

人道的プログラムとユースが利用できるサービスに欠けるもの

データからもう一つ欠けているものとして浮かび上がったのが、人道的なプログラムとユースが利用できるサービスだ。ラナオ・デル・スル州とマギンダナオ州のKIはこうした欠点について話し合ったが、スールー州とバシラン州のKIからは、自然災害や暴力発生時のサービスやプログラムがないことや、避難民を対象とした具体的なプログラムのニーズについて報告されることはなかった。ラナオ・デル・スル州とマギンダナオ州のKIは、紛争下で強制避難したユースが利用できるメンタルヘルスや心理社会的サポート、質の高い教育、生計手段、レクリエーション・プログラムがないことを認めた。

上述の通り、紛争下の地域や避難民のコミュニティでは質の高い教育を受けることができず、それは長期的にユースやその家族、コミュニティの健康と成長に悪影響を及ぼしている。ラナオ・ロデル・スル州とマギンダナオ州の数人のKIは、マラウィ包囲が最も激しく行われていた頃には、強制避難したユースのためのレクリエーション活動などのプログラムが可能だったが、危機的状況が長期化する中、ユースのためのプログラムが広く必要とされているにもかかわらず、マラウィでは少数の人道支援団体だけが活動を継続しているのが実状だと述べた。

ラナオ・デル・スル州のあるKIは、「仕事もなくブラブラしている」ユースを狙った過激派グループの勧誘を防ぐ仕組みとして、ユースプログラムの重要性を強調した。思春期の男の子と女の子は、ともに過激派に兵士として採用されるリスクがあり、ラナオ・デル・スル州の数人のKIは、採用された女の子は早すぎる結婚のリスクにさらされていると語る。また、採用されるリスクのある女の子や逃れて戻ってきた女の子を対象としたプログラムはないと説明した。特に、バシラン州とスールー州では、コミュニティのユース支援に中心となって活動するINGOや国内外の人道支援機関をどのグループも挙げなかったのは注目すべきである。

早すぎる結婚対策プログラムに欠けるもの

BARMMでは、早すぎる結婚の防止やリスクの軽減、既婚の女の子のニーズへの対応を主な目的としたプログラムがデータから明らかになることはなかった。調査参加者は、早すぎる結婚の限られた側面に取り組むプログラムはどの州にもあることを確認したが、具体的にBARMMにおける早すぎる結婚の予防と対応を目的としたプログラムとしてKIが挙げたのは、オックスファム・インターナショナルの「女の子と女性に対する暴力に対処するための空間づくり」（以下、空間づくり）だけだった。しかし、このプロジェクトは、データ収集時点ですでに終了していた。空間づくりは、オックスファム・インターナショナルとフィリピンのパートナー団体であるユニフィルウィメンとアル・ムジャディラ開発財団によってラナオ・デル・スル州アウとマギンダナオ州で実施された。KIによると、このプロジェクトでは、アドボカシーとロビー活動、コミュニティの組織化、意識向上、収入創出支援などが行われていた。

アエバシラン州とスールー州では、参加者は早すぎる結婚に関するプログラムの実施を確認できなかった。KKIは、バシラン州とスールー州では、思春期の保健・保護といったより幅広いプログラムの一部として、早すぎる結婚を含めたGBVに関するアドボカシーと意識啓発が行われていると指摘した。ただ、短期的な取り組みが多く、資金の流れも信頼性の低いものだと、KIは述べた。

ユース向けのプログラムやCEFMのプログラムの不足は、他の州よりもスールー州で顕著であった。スールー州で実施されている早すぎる結婚プログラムとして、ARMMにおける生殖に関する保健サービスのアクセス向上プロジェクト（ARCHES)を挙げたKIも数人いたが、オックスファム・インターナショナルとフィリピンのパートナー団体ピナイキロ（PINK)が実施するこのプログラムの主目的は早すぎる結婚に対応し防止することではなく、あくまでもSRHRサービスへのアクセスを向上させることだった。スールー州の他のKIたちは、同州でCEFMプログラムが実施されていないことを確認した。特に、各コミュニティにおけるユースのためのリソースやサポートについて話し合う際に、どの州の参加型グループ参加者も早すぎる結婚プログラムに言及しなかったのは特筆すべきだ。

> *まず、彼ら（人道支援側）は、WASH（水と衛生）、シェルター、食料といった必要不可欠なニーズに対する支援を行います。その後、教育や保護など、欠けている要素に気づきます。ワーキンググループのメンバーが現場でこうした活動を進める中でCEFMという新たな課題に直面するのです。そのため、CEFMを中心にした取り組みではなく、CEFMの活動は後回しになるのが常です。今は、その対応すらされていません。CEFMをサポートしている組織や機関はほとんどありません。*
>
> *OCEFMに対する取り組みを行っているのは、GBVなどの保護問題に政策提言する者だけです。保健、レクリエーション、教育　(グループ)...すべてのグループが、この問題に取り組む必要があるのです。CEFMを含む女の子の問題に現在取り組んでいるのは、ひとつのサブグループのみというのが実状です。*
>
> ***(人道支援NGO、ラナオ・デル・スル州、KII)***

思春期の女の子に情報、プログラム、サービスを提供する 際に障壁となるもの

調査データは、分析に用いられたARSHのための社会規範フレームワークの各領域（個人・社会・組織・リソース）を超えて、情報、プログラム、サービスを通じて思春期の女の子を支援することには様々な障壁があることを示している。思春期の女の子が、既存のプログラムにアクセスして利用しない背景として、思春期の子どもにやさしいサービス・組織間の連携・持続可能な資金、これらがないことと治安の悪さなどが考えられる。

思春期の子ども にやさしいサービスの不足

KIIのデータは、思春期の子どもに適したサービスがないために、思春期の女の子がサービスを利用したり、情報にアクセスしたりすることができないことを示している。どの州のKIも、サービスを安心して自信をもって使えなかったり、あるいは、自分のコミュニティにそうしたサービスやプログラムがあることを知らないために、女の子たちが「気後れしている」と指摘した。いくつかのKIIでは、プログラムスタッフが思春期の子どもたちに戸別訪問による働きかけを行っても、子どもたちは彼らから隠れてしまうため、サービスやプログラムが利用できることを周知できないと指摘されている。バシラン州のKIIは、保健プログラムを通したユース支援が特に困難な理由を次のように語った。

例えば、15～17歳を対象に行う性的搾取と虐待の防止活動(PSEA)では保健が話題の中心ですが、それでも彼らは参加を拒んだり、隠れたりするので、私たちは困難を感じています

(政府保健官、バシラン州、KII)

KIは、サービス提供者や親の態度についても言及した。サービス提供者の態度や、GBVの報告書に 対する地元の役人やサービス提供者の対応が否定的なために、ユースは早すぎる結婚を含むGBVの報告を躊躇してしまうのだ。こうした対応には、正当な手続きなしにGBVの事例を取り下げたり、事件を正式に記録しなかったり、内々に解決してしまったりなどが含まれる。AKIによると、こうした形でコミュニティ住民らがGBV事例の報告やサービスの利用を否定的にとらえるようになり、それが、ユースがプログラム参加に消極的な現状につながった可能性がある。KIはさらに、親が子どもを思春期プログラムに参加させたがらないことも、主な障壁になっているとしたが、その根拠は示されなかった。

組織間の連携不足

どの州のKIも述べたように、部局・組織間の連携不足が、プログラムやサービスを通じて思春期の女の子を支援する上で大きな障害となっている。KIIのデータからも、各組織には連携のためのラインやプロセスが設けられているかもしれないが、連携は情報交換や役割の確認が中心で、より広い社会変革に向けた戦略と開発目標に基づいて早すぎる結婚その他ユースの抱える問題への取り組みに向けて連携を強化するものではないことがわかる。マギンダナオ州の政府系CSOは、早すぎる結婚に関するデータが全体的に不足していることに加え、早すぎる結婚の事例の集計を担当するPNPと自治体の社会サービス部門間の連携不足も、データ不足と誤りにつながっていると説明した。

「データの収集と報告が主な課題でしょう。こちらから積極的に事例の発掘に取り組まなければ、報告書はゼロになってしまいます。マギンダナオ州警察では、GBV事例を記載したピンク色の記録簿(女性や子どもが関係する事件の警察の記録簿 で、女性デスク担当の警官が管理し、その警官は 事件のプライバシーと機密を守ることを任務としている)があります。

しかし、それにもかかわらず、報告書があるのは2つの自治体だけです。他の地域で事例がゼロでないことは分かっています。私たちは、当事者同士で解決することにしたり、まったく報告しないことを選択したりすることを恐れています。しかし、ゼロといってもデータであることに変わりはありません。それが何を意味するのか、それを踏まえて私たちはどのような行動をとるべきなのでしょうか。

(政府CSO、マギンダナオ州、KII)

持続可能な資金の不足

また、ユースを対象としたプログラムやサービスのための持続可能な資金の不足も、障壁として、ほぼすべてのKIが共通して挙げた。前述のように、バシラン州で思春期プログラムの実施を主に担うRHUは、資金不足のために実施することができなかった。汚職もその理由のひとつかもしれない。思春期プログラムの実施責任者が資金を吸い上げたり、「架空のプログラム参加者」がいるなど、汚職に言及するKIも数人いた。マギンダナオ州のKIIでは、以前のプログラムでの経験が語られた:

写真撮影だけで、実際のセッションは行われないことがほとんどです。架空の住民をただプログラム参加者リストに載せているだけなのです。

(政府、マギンオ州、KII)

治安の悪さと暴力の脅威

また主な障壁としてどの州のKIも治安の悪さと暴力の脅威を取り上げた。ラナオ・デル・スル州とマギンダナオ州のKIは、紛争の長期化と強制移住がサービス提供の妨げになっていると指摘した。KIは、「武装勢力や武装集団による武力衝突」など、治安の悪さと暴力のリスクでスタッフが安全を感じられず、サービス提供者やプログラムスタッフを採用できないことやスタッフの離職率が高いことに言及した(政府、自治体保健、バシラン州、KII)。

また、治安の悪さは支援を受ける側にとっても障壁となる。ユースは暴力を恐れてサービスやプログラムを受けようとしない。ある バシラン州の自治体関係者は「治安の悪い環境のため、自由に教育にアクセスできず、平和と秩序に関する情報やサービスを受けること自体が難しい」と説明する。マギンダナオ州の現地で活動するNGOスタッフは、家族が一族や家族の暴力に巻き込まれているユースは家を出ないため、サービスやプログラムを利用することができないと話した。

「リド(一族の争い)もあるからです。家族がリドに関わると、安全のために家族が外出を控えるようになるんです。」



04

ディスカッション



本調査を通して、ユースの抱える主な課題、早すぎる結婚の主な要因、ユースの女の子自身が持つ逆境への適応力、そしてBARMMにおける早すぎる結婚のリスク軽減の可能性を持つ地域の支援システムが明らかになった。調査結果は、差別やスティグマ、質の高い教育の不足、早すぎる妊娠など、ユースが抱える主な課題のほとんどが、早すぎる結婚を拡大させる要因にも結果にもなりうることを示している。BARMMのユースの生の声は、経済的不平等、ジェンダー不平等、強制移住、そして紛争下で思春期の女の子がリソースを求めて声を上げることもたどり着くこともままならないという圧倒的状況によって不公平にも生み出されている。こうした複雑で混乱した状況にもかかわらず、調査データの分析に参加したKIや思春期の女の子を含むコミュニティ住民らは、この調査で用いたASRHの社会規範の枠組みの全領域にわたって、早すぎる結婚に対処しコミュニティ内の既婚の女の子のニーズを満たすための具体的な解決策を見出した。

女の子を結婚に向かわせる強制移住特有の新たなリスクの存在が考えられるが、本調査は、紛争下の強制移住により早すぎる結婚のリスクが一層深刻化しているという新たなエビデンスのひとつとなる（早すぎる結婚をなくすための世界プログラム, 2021; Leigh他, 2020, Hunersen 他, 2021）。

また、調査結果は、早すぎる結婚に関する既存の規範を守る（あるいは守らない）と決断する人々の決断力が、BARMMの社会規範と結婚の慣習を支えていることを示している。同時にデータは、BARMMのジェンダー規範が意思決定における思春期の女の子の声をどれほど大きく制限しているかも示している。早すぎる結婚の拡大要因は、女の子と女性の機会を奪い彼女たちを社会的経済的に追い詰める家父長制とジェンダー関係に支えられていることを裏づけている（Greene、 Stiegvater 2019）。調査結果は、南アジアで最近実施された複数国における早すぎる結婚調査の結果と同様に、早すぎる結婚が思春期の男の子に比べて思春期の女の子が不当に影響を受けるジェンダー差別の一形態であることを明らかにした(Leigh他,2020）。思春期の女の子が、交際や婚前交渉をすることによって人付き合いで守るべき決まりや彼女たちに与えられた役割から逸脱すると、親から早すぎる結婚を強要される可能性があることがデータで示されている。

調査結果によれば、思春期の男の子も結婚を強制されるものの、女の子より結婚の決定に関して主体性を持っていることが多いようだ。SenseMaker®とKIIのデータ、コミュニティ参加型分析によると、家族や社会の中に力関係を生むジェンダー規範のために、女の子は両親や家族、より広くコミュニティに対して義務感を感じており、自分の願望を犠牲にして結婚に応じていることが浮き彫りになった。

一方、ユースが既存の規範から逸脱した新しい交流方法（ソーシャルメディアやテキストなど）を利用するようになるにつれて社会規範が揺らぎ始め、より広くコミュニティの中に不安が生まれている実態も調査結果は示している。一部の思春期の女の子（および男の子）が自分たちの力で18歳未満での結婚を選択していることを裏付ける調査結果もある（Leigh他, 2020）。

しかし、GreeneとStiefvaterによれば、決定権は思春期の女の子のウェルビーイング（幸せ）と大人への健全な成長を阻む社会規範と不平等な力関係によって形成されているという（2019）調査結果は、結婚が唯一の選択肢あるいは結婚せずに思春期の女の子として直面する課題から逃れる最善の道だと考えて、女の子たちが結婚を決意する姿を浮き彫りにしている。直面している様々な課題（貧困、虐待、質の高い教育へのアクセス不足など）が、結婚すればよい方向に向かうという誤解にたきつけられ、女の子たちは結婚を選択する。しかし、女の子 が持つ意思決定力はもろく、まもなく尽きてしまうことが調査結果から明らかだ。

結婚生活はしばしば差別を生み、中途退学、貧困、児童労働、孤立、虐待、ネグレクト をもたらす。個人・社会・制度・リソースさらに人道主義的領域に内在する機会を様々なレベルかつ複数のセクターで流動的に活用することで、根深い社会・ジェンダー規範を変革し、思春期の女の子たちが、暴力やそのリスクもない幸せで健康的かつ充実した生活を送り、経済・市民生活・教育など様々な領域に社会の一員として力を発揮する可能性に道を開くことができるかもしれない。

この研究では、状況次第で早すぎる結婚の要因は顕著に様々な形で現れており、これは最近発表された早すぎる結婚の研究概要（Psaki他, 2021）を裏付けるものである。例えば、貧困（特に、学費を支払うための世帯収入の不足により中途退学すること）は、どの州でも根本的な要因として浮かび上がった。しかし、ラナオ・デル・スル州とマギンダナオ州では、早すぎる結婚は政治力やリソースを強化する手段と受け止められていて、バシラン州とスールー州のデータではこうした要因は現れなかった。

調査結果から、避難民の女の子や紛争下で生活する女の子にとって、早すぎる結婚の根本的なリスクは高まっていることがわかる。しかし、社会に深く根付いた規範や不平等な力関係に基づく根本的な要因に比べれば、強制移住中に新たに生まれた要因（人道支援など）は、外部の取り組みで比較的容易に対処できるとも考えられる。ただ、人道支援が娘を結婚させるきっかけにならないよう改善するなどのシステム面での活動では、早すぎる結婚の根本的な要因に取り組むことにならない。しかし、こうしたわかりやすい活動が早すぎる結婚のリスク軽減につながる可能性はある。

本調査では、BARMMの強制移住・紛争下のコミュニティにおける早すぎる結婚の主な要因を以下のように特定した:

01 思春期の女の子たちの意思決定力の弱さ

02 自己犠牲と使命感

03 家の名誉を守るために行う思春期の性のコントロール

04 貧困と安定した収入創出活動へのアクセスの不足

05 質の高い教育へのアクセス不足

06 早すぎる結婚をめぐるイスラム教の様々な解釈

07 法的環境の整備

さらにデータから、ユースを中心とした人道的な早すぎる結婚のプログラムは欠陥が多く、思春期の女の子と彼女たちに影響を与える人々を効果的に支援する上で妨げになっている実態が明らかになった。早すぎる結婚の中心的要因に取り組むためには、思春期の女の子とその家族、さらに彼女たちをケアし保護するコミュニティそれぞれが持つ適応を含め、すでにある地域のユース支援システムを強化しなくてはならない。

社会・制度・リソースの各領域にある様々な障壁が、思春期の女の子が自らの意思決定に基づいて行動する自律性の実現の妨げとなっていることを考えると、個人レベルの取り組みだけで早すぎる結婚をなくすことはできない。

したがって、早すぎる結婚・ジェンダー差別と経済的不平等の根底にある要因を取り除くためには、社会（社会およびピアネットワーク、家族構成、社会資本とサポート、ポジティブな逸脱者 * 説明はP23）、制度（政策と法律、教育制度、政府の仕組み、経済政策、宗教上の組織）、リソース（生計、所得水準）の各領域での取り組みが必要である。これは、社会・制度・リソースの各領域で取り組むことにより、支配的なグループと社会的・経済的に困難な状況にあるグループの力関係を変える取り組みといえる（Blankenship, 2006年）。

BARMMの思春期の女の子、大人のコミュニティ住民、各組織の関係者らとともに特定した早すぎる結婚の中心的要因に取り組む必要性と優先事項（解決策を含む）を以下に示した。女の子と女性が教育・保健・市民生活・経済の機会に平等にアクセスできることを含めて、自立した意思決定を実現するには、これらの解決策とともに社会・経済・法的環境の向上に向けた経済的・政治的取り組みも行う必要がある。

ジェンダー規範と結婚の意思決定

調査結果から、ジェンダー規範によって力関係が生まれ、思春期の女の子がいつ、誰と結婚するかを決める意思決定力が弱まっていることがわかる。その代わりに、女の子の人生の重要な意思決定をするのは両親である。両親は既存の規範に則って決断し、娘を結婚させる際もその規範に従う。

女の子たちには妻、母親、ケアを担う者としてジェンダーに基づく役割を果たしてほしいという考えから、年長者、一族の長、MRL、伝統的指導者、その他のコミュニティ指導者などの大人は、こうした規範に影響を与え、規範はさらに強固になる。データによると、思春期の男の子も早すぎる結婚を強いれるが、その程度は女の子より低く、結婚に 対する意思決定の自律性は女の子より高いという調査結果が出ている。例えば、SenseMakker Èのストーリーでは、思春期の女の子に結婚の申し込みを断られた男の子が女の子の両親に許可してもらい無理やり結婚させるよう助けてもらう話がある。しかし、思春期の女の子にも、両親や仲間、自身 の人生に影響を与える大人たちからのサポートがあれば、意思決定力を高める可能性はある。前述のように、両親、特に母親は、既婚の女の子を含む思春期の女の子のサポート役として中心的存在である。コミュニティ住民からは、家族内 のコミュニケーション、理解、信頼を向上させる手段として、世代間/親子間のワークショップが挙げられた。

事実にしろ、そう思われているだけにしろ、ユース同士の婚前関係の噂がたてば一気に早すぎる結婚に進んでしまう強い影響力があるが、コミュニティには、既婚の女の子を含むユースの女の子のサポート役として機能する可能性があることも様々な方法で得た研究データは示している。参加型分析に参加した大人とユースのコミュニティ住民、ともに、結婚生活の現実に対する理解と共感を深めたいという希望を示した。参加者からは、宗教指導者やコミュニティ指導者らとのワークショップを地元で開くことで早すぎる結婚がもたらす悪影響について共通の理解を得ることができるのではないかと提案された。

このような地元でのワークショップは、早すぎる結婚を禁じるイスラム教の解釈に意識を喚起するなど、あいまいな点を明確にする副次的効果も期待できる。いかなるプログラムも、ジェンダー間の力の不公平に対処し、女の子と女性をコミュニティ社会の中で社会的・政治的影響力のある地位に押し上げるために、ジェンダー・トランスフォーマティブでなければならない。ジェンダー・トランスフォーマティブな取り組みとプログラム は、コミュニティ住民が、早すぎる結婚など女の子と女性に対する暴力の根源であるジェンダー規範に挑戦する機会となる。

家族の評判を保つための思春期の性のコントロールと義務感

調査結果から、思春期の女の子のセクシュアリティを守るという理由で家族の名誉を守ることが様々な形でBARMMにおける早すぎる結婚の中心的要因となっていたことがわかる。いう結果につながっていくのかがデータで明らかになった思春期の女の子が同世代の男の子 と手をつないでいるという噂がたてば、早すぎる結婚の可能性は生まれる。義務感から両親の意向に従う思春期の女の子たち。彼女たちは結婚を家族のための自己犠牲と受け止め、ほとんど、あるいはまったく抵抗せず結婚に同意することが少なくない。

親は、早すぎる結婚にどんな弊害があろうと家族の名誉を守ろうとするが、親、特に母親には女の子の結婚リスクを軽減する力が眠っていること示すデータもある。思春期の女の子が健やかに成長するためには、親のサポートと指導が不可欠である。必要な教育やサポート教材があれば、親は子どもたちに、社会の権力力学や健全な人間関係など、年齢に応じた包括的SRHについて教育することができる。包括的な性教育とジェンダー・トランスフォーマティブなプログラム を通じて、思春期の性の厳格なコントロールにつながる有害な規範を崩せば、女の子の早すぎる結婚のリスクを軽減することができるかもしれない。

コミュニティ参加型分析に参加した思春期の女の子たちは、SenseMakerÈのデータに示されるような変化への願望を個人としても集団としてもはっきりと口にすることはなかった48ページ参照。しかし、世代間の関係、特にユースと家族、コミュニティ社会との関係を中心に信頼関係を築く必要性が指摘された。結婚のリスクを軽減するために思春期の女の子が持つ適応力を強化する個人・社会レベルの解決策として、世代間の対話、親のカウンセリング、女の子の能力向上への取り組みなどの行動変容プログラムが挙げられた。

文化と宗教

調査結果から、イスラム教と地元の文化的伝統がコミュニティの基盤であり、安全な空間、信仰、人としてのあり方などの形で、ユースとその家族にとって非常に大きな支え・リソースになっていることが明らかになった。しかし、一部の学者の解釈では、コーランには女性と女の子を差別する権力・ジェンダー力学が働いているとされ、そのため、女の子は初潮を迎えれば（12歳でも）、男の子は15歳で結婚する慣習が認められている。この解釈には非常に大きな議論の余地が残されているが、特定の伝統的・宗教的指導者たちに強く支持されている。こうした解釈が社会的規範となり、権力者（MRL、伝統的指導者、コミュニティ指導者など）から固く支持されている実態が、様々な方法で得たデータからも明らかになっている。

同時に、これらの指導者は、親やコミュニティの規範に対して絶大な影響力を持っていることも示唆されている。イスラム教が結婚の決定を含め、コミュニティ住民の生活に絶大な存在感と影響力を持っていることを考えると、MRLは思春期の女の子の結婚に対するリスクを軽減し、既婚のユースの経済的 、心理社会的、健康上、教育上のニーズに応える推進役として活動する大きな可能性を秘めている。 彼らは変革の担い手として、18歳以上の結婚を支持するファトゥワ（イスラム教の解釈）について教育・啓発を行うこともできる。参加型グループデータ分析に参加したMRLが、まず自分たちのコミュニティで早すぎる結婚に対する意識啓発を行うという形で行動を起こしたいと述べたことは注目に値する。

ピア・サポート

調査結果によると、ユース、特に避難民や既婚者には社会力とピア（同世代の仲間）のサポートが非常に不足しているが、ユースの女の子の社会力を高める機会は存在している。コミュニティ参加型分析、ストーリー、参加型グループ活動のなかでは、勉強を続けるための安全と何らかのリソースを確保するために、結婚に代わるもの の必要性が一様に言及された。コミュニティ参加型分析では、他の女の子たちが結婚や中途 退学、「不適切な」性的行為 を行うなどの「あやまち」を犯さないように手助けすることが議論の中心となった。このこと は、ユースが自分たちの状況をコントロールできると認識していることや、早すぎる結婚や婚前交渉に対するスティグマにも関係がある。しかし、仲間とのつながりを増やし、健全な関係を築くことは、やはり支えになり得る。

早すぎる結婚やその他のSRHの問題について対話と話し合いを促進できるコミュニティ内の安全な空間を拡充することで、思春期の女の子の仲間同士の社会力を強化できる可能性がある。コミュニティ参加型分析のファシリテーターは、思春期の女の子は普段から自分の意見を述べたり他の意見を聞く機会が少ないため、積極的に参加するだろうと実感していた。ただ、 学校を基盤とするグループや組織は、成績上位者「だけ」が参加でき、それ以外のユースはあまり歓迎されていないと感じているようであった 。さらに、SenseMakerÈのデータ収集に参加した既婚のユース男女は、ともに思い切った変化を望む傾向があり、思春期の女の子の同世代は、早すぎる結婚への道を断つようなジェンダー・トランスフォーマティブな変化に適応していける可能性が示唆された。

思春期の交流: 恋愛結婚とソーシャルメディア

携帯電話（テキスト など）やソーシャルメディア（Facebookなど）は、特に大人 コミュニティのメンバーやKIから、 早すぎる結婚の要因 と見なされていたこれらのコミュニティ住民にとって、携帯電話やソーシャルメディアは、思春期の子どもたちが異性とつながるためのツールであり、思春期の男の子と女の子がデートや親密な関係を通じてことにつながるという。大人がユースのソーシャルメディアや携帯電話の利用に対して不満を示した のは、技術の進歩や社会規範の変化のなかで、ソーシャルメディア上のユースの行動に自分たちの力が及ばなくなっていることも一因である。結婚は強制されることもあれば、カップルが自ら望んですることもある（「恋愛結婚」）。対面であれテクノロジー上であれ、異性と付き合うことは社会的な逸脱行為とされるが、思春期の子どもが結婚を望む場合、親からの抵抗はほとんどない。ソーシャルメディアやテクノロジーにまともに取り合わないコミュニティ住民やKIもいたが、携帯電話やテクノロジーについては、特に学業に必要な情報やCOVID-19のロックダウン時に教材にアクセスしたり、ユースにSRHR情報を提供するための手段となる強みとしても言及された。







ユースの大半が携帯電話を持っていることを考えれば、ASRHプログラムやサービス提供をモバイルで実施して既婚の女の子を含む学校に通っていないユースに代替の学習機会を提供するなど、コミュニティ支援の形も探ることができる。ービス提供をモバイルで実施して既婚の女の子を含む学校に通っていないユースに代替の学習機会を提供するなど、コミュニティ支援の形も探ることができる。

さらに、コミュニティ指導者らがオンラインでの嫌がらせやいじめ、その他の子どもの保護をめぐる懸念を軽減するために思春期のオンライン安全ガイドラインに関するコミュニティ主導型ワークショップを開催する、あるいは携帯電話やソーシャルメディアの使用について大人とユースの間の不信感を軽減するために自由な話し合いの場を設ける際は、NGOやINGOがサポートにあたる必要がある。.

生計と経済的機会

KII、参加型グループ、SenseMakerÈのデータは、生計訓練と、収入創出機会や女の子を学校に通わせるための条件付き現金給付を組み合わせることで、子どもを結婚させる強い経済的要因 を軽減 する可能性を示している。しかし、収入の問題が女の子たちの経済的機会と富を生む可能性を狭める有害なジェンダー規範を永続させることがないよう、こうした外部の取り組みやリソースは、ジェンダー・トランスフォーマティブなプログラムと組み合わせて実施しなくてはならない。さらに、こうした取り組みがコミュニティにおける持続可能な社会変革の原動力となるためには、ダウリー（持参金）の慣習や女の子を家族にとって「経済的負担」だと考える人々の意識を払しょくすることが必要だ。参加型コミュニティ分析では生計訓練、収入創出機会、現金給付が主に話し合われたが、どのグループの参加者からも、早すぎる結婚の軽減プログラムに政府機関を関与させることが提案された。

正式・非正式教育

調査結果は、教育が各コミュニティで高く評価されていることを浮き彫りにした。人々は世代を超えて、ユースが教育を受けることを望み、多くの人が上級の学位を取得することを望んでいる。教育もまた、早すぎる結婚を生む背景のひとつである。様々な方法で得たデータから、学校に通っている女の子の方が、学校に通っていない女の子よりも結婚する確率が低いことがわかる。たいていは両親が学費を払えないことが原因で女の子が中途退学すると、教育に代わる唯一の道として結婚を余儀なくされる。18歳未満のすべての子どもたちが質の高い教育にアクセスできるよう、4Pなどの政府プログラムを拡大する必要がある。さらに、避難民、少数民族、妊娠中、既婚のユースなど、社会的経済的に困難な状況にあるグループが学校で疎外されることがないよう、政策や社会・行動変革のためのプログラム を実施していかなくてはならない。



05

提言



この研究から、ユース支援を担う既存の地域システムの支援の下で思春期の女の子たちが課題を克服し、コミュニティ変革の先頭に立つ可能性が浮き彫りになった。しかし、この支援システムには欠陥や弱点があるため、以下のことを実現するためにはフェミニスト団体、CSO、NGO、政府機関、INGOその他関係者らによる外的サポートが必要である。

(1)ユース支援を担う既存の地域システムの欠陥を埋め、強化する。
(2) 現在の力関係の基盤となっている家父長制を崩壊させ、早すぎる結婚など女性と女の子たちを苦しめる有害なジェンダー規範の継続を阻止する社会・経済・法的環境をつくる。

したがって、BARMMにおける早すぎる結婚の要因と影響を緩和するためには、コミュニティ主導のプログラムを中心に既存の支援システムの欠陥を埋めて強化するための取り組み、さらにジェンダーと社会経済的公平性を推進する政策を組み合わせて実施する必要がある。

コミュニティ主導のプログラムは既存のコミュニティの強みを生かし、男女問わず子どもたちが意思決定に参加してコミュニティ自身による解決を目指す機会を提供する。コミュニティ主導のアプローチであれば、思春期の女の子特有のニーズと実状に合わせた防止対策・サービスの開発、さらにそれぞれのコミュニティで異なる形で現れる早すぎる結婚の要因への対処が、より確実になるだろう。調査の結果、早すぎる結婚に取り組むためには、あらゆる領域（個人、社会、制度、リソース）で早すぎる結婚の基盤となり拡大の要因となっている規範と行動（ジェンダーや社会経済的不平等など）に対する背景知識と専門知識が必要であることが明確になった。したがって、フェミニスト団体やジェンダー平等に取り組む各団体は指導役という重要な役割を担って早すぎる結婚に対処・防止するための取り組みに参加するべきである。

早すぎる結婚を防止・対策する上で、早すぎる結婚の啓発プログラムや女の子のエンパワメントプログラムだけでは十分ではない。早すぎる結婚のプログラムはコミュニティ主導で行われ、かつ、ユースとその家族、コミュニティのためのプログラムとサービスにある欠陥を状況に応じて埋める取り組みと合わせて実施されなくてはならない。経済的不平等とジェンダー不平等が早すぎる結婚の根源であることを考えると、個人と社会のみを対象とした取り組みではなく、BARMMにおける社会経済的平等とジェンダー平等を促進する取り組みでなくてはならない。

プログラムへの提言

この調査では、BARMMで早すぎる結婚を拡大させている各領域（個人、社会、制度、リソース）における要因と、女の子とその家族、コミュニティが持つリスク軽減に必要な適応力について報告した。したがって、セクターの枠を越えて人道主義的開発に従事する者は、各コミュニティへの働きかけと調整をすすめ、社会（社会的及びピアネットワーク、家族構成、社会資本と支援、前向きな逸脱者）・制度（政策と法律、教育システム、政府の仕組み、経済政策、宗教上の組織）・リソース（生計、所得）の中でどういったアプローチを優先するか、住民たちが決められるよう後押しする必要がある。フェミニスト組織、CSO、NGO、政府機関、INGO、その他の関係者らは、コミュニティと協調して以下のことを行うべきだ。

1) 強制移住や災害の影響下にあるコミュニティが、コミュニティ主導のプログラム目標を達成するために必要な能力、人的・財政的リソース、ツール、調整能力を確実に 持つようにする。
2) プログラムがジェンダー・トランスフォーマティブな変革を実現するよう設計されていることを確認する。
3) ユースの支援を担う既存の地域システム（包括的な性教育、MHPSSサービス、公式・非公式教育など）にある欠陥を埋めて強化する。

本調査では以下のとおり、セクターの枠を越えた協調の下、速やかに人道主義的開発プログラムに取り組むことを提言する。

01 以下の活動を通じて、強制移住や人道危機的状況に置かれたコミュニティが主導するプログラムについてその設計・実施・評価を支援する。

1.1 地方政府、国やコミュニティベースのフェミニスト組織、およびINGOは、各コミュニティの強みを生かした参加型のアプローチにより、コミュニティ主導型プログラムをコミュニティ自身が設計・監視・評価する能力を強化する必要がある。

1.2 NGOやフェミニスト団体など、人道主義的開発に従事する者はコミュニティ主導型プログラムが必ずジェンダー・トランスフォーマティブ、かつジェンダーと社会経済的平等と促進するものとなるよう、コミュニティと協調して取り組まなくてはならない。コミュニティ参加型分析グループによると、プログラム は有害な社会的慣習をこわし、特にゴシップや噂の力を根絶し、いじめや差別に対処する必要があるという。

1.3 資金提供者やBARMM政府は、教育を受け市民生活や経済的機会を追求したいという願望を含めた女の子の力を高めるだけでなく、彼女たちが置かれている社会・経済的状況にも取り組むコミュニティ主導型プログラムに対して、投資を行うべきである。

1.4 この研究の結果、ユースのニーズと優先事項の多様性が明らかになった。したがって、BARMMにおいて早すぎる結婚の防止と対応に取り組むすべての関係者（フェミニスト、国家、政府、非政府、コミュニティベース）は、プログラム設計に情報を提供するために、この情報を得るための安全で倫理的なメカニズムを確立することを含め、思春期主体の最新かつ正確なニーズと能力評価に基づいたプログラム設計 を確実に行う必要がある。

ユース主導のニーズと能力評価は、早すぎる結婚プログラム を推進するニーズとともに、彼ら自身の能力を高める機会になる。詳細はプラン・インターナショナル（2020）の「Adolescents in Crisis Programming Toolkit」を参照。

1.5 実際にコミュニティ主導型プログラムの設計に携わった経験のある関係者らは、男女問わずすべての若者が暴力とそのリスクのない生活が送れるよう、男の子と男性も女の子と共に活動の中心になるよう必ず参加を呼びかけるべきである。例えば、KIと参加型コミュニティ分析グループでは、イスラム教指導者やバランガイ職員、伝統的指導者といったコミュニティ指導者などコミュニティの実力者が男の子や男性との話し合いの場でファシリテーターを務め、ジェンダー平等と経済的平等を生み出す前向きな男らしさを広めていくことが提案された。バンサモロ・ダルル・イフタ、ダワフ・マサジッド委員会、フィリピンのハヤトゥル・ウラマなどの主要宗教評議会は、政府機関やフェミニスト団体と協力し、宗教指導者や伝統指導者の間で早すぎる結婚に関する議論を進め、イスラム家庭における子どもの権利を反映した早すぎる結婚に関する中心メッセージをつくる必要がある。

02 以下の行動を通じて、思春期の女の子の能力の不足を補い強化し、早すぎる結婚のリスクと悪影響を軽減する。

注：コミュニティと共同で思春期の女の子の能力育成プログラム を設計する人道主義的開発の政府関係者は、取り組みの効果を裏付ける最新データをプログラム設計に反映させるべきである。

2.1 BARMMの初等 ・高等・技術教育省（MBHTE）、保健省、社会福祉・開発省などの政府関係者は、既婚・妊娠中の思春期の女の子に対するプログラムやサービスの欠陥を補わなくてはならない。例えば、これらの関係者は、結婚し妊娠した女の子が教育、生計、SRHRとMHPSSサービスを含む保健ケアへのアクセスを継続できるように、直接的支援とサポートサービスを提供する必要がある。

2.2 政府による人道的な開発プログラムでは、思春期の女の子たちが安全に交流し、遊び、同世代の仲間のネットワークを築き、学び、彼女たちのニーズに合った情報やサービスを利用できるよう、それぞれのコミュニティで利用できる安全な空間を増やすことを検討すべきである。人道的な環境において、早すぎる結婚を含むジェンダーに基づく暴力を軽減するための思春期の若者の安全なスペースの有効性に関する証拠が限られているため、規模拡大の前に更なる調査が必要である。ただし、人道上の危機的状況下でユースの安全な空間が早すぎる結婚を含むジェンダーに基づく暴力を軽減させる効果について証拠が少ないため、規模拡大の前にさらなる調査が必要である。

2.3 バンサモロユース委員会と州、市、自治体、バランガイのSanggunian Kabataan（ユース協議会）は、バンサモロのユース開発アジェンダに早すぎる結婚を緊急課題として含めるべきだ。LGU、INGO、NGO、CSOと協力して、各コミュニティは、思春期の若者の間に信頼を築き、深刻な差別やいじめを軽減するために、メンターシップやピアネットワークなどのユース主導の同世代また、子どもとユースの意識を高め、早すぎる結婚を防止し、そのリスクに対処する能力をサポート するための情報キャンペーンやユース同士のピア・エデュケーション（学びあい）に予算を割くべきである。*女性に対する暴力防止と、人道上の危機的状況下で行う際のヒントについては、 Raising Voices SASA! コミュニティ動員アプローチを参照。*

2.4 政府による人道的な開発プログラムでは、結婚や親密なパートナーに思い描く理想や早すぎる結婚にもつながる家庭内暴力に対処し、さらにユースの女の子が結婚後パートナーから暴力（IPV)を受ける高いリスクにさらされている現状と闘うために、既婚未婚問わずユースを対象にしたライフ・スキル/生活技能講習会を共同企画することを検討すべきだ。内容的には、ジェンダーによる役割と責任、育児のための経済的準備、健全な人間関係の構築と共同意思決定のためのコミュニケーション、SRHの知識とアクセスの向上、サ ポートとヘルプの求め方など、ジェンダートランスフォーマティブなものとする。ライフ・スキル/生活技能講習会は、若い夫婦が健全な関係を築き、妻となった女の子への虐待やネグレクトのリスクを下げる ために彼らを 強化・支援することを目的とした専門サービスと連動させることができる。ただし、ライフ・スキル/生活技能プログラムが早すぎる結婚を防止する効果を裏付けるデータには矛盾もあるため、人道上の危機的状況下でライフ・スキルプログラムが早すぎる結婚を防止する有効性については、規模拡大の前にさらなる調査が必要である。

2.5 MBHTEには、セクシュアリティ、人間関係における力関係、安全なセックスと妊娠、妊産婦ケア、避妊と家族計画などのテーマを含む包括的なセクシュアリティ教育（CSE）をすべてのユースが受けられるようにするという任務が政府から与えられており、その責任を果たすべきである。さらに、セルフケア、メンタルヘルスに関する啓発、あらゆる形の暴力の軽減・把握・支援を求める方法を強化する必要がある。

CSEプログラムの対象を親やケア従事者に拡大する場合は、思春期の若者やその親、ケア従事者、影響力のあるコミュニティ住民、社会サービス・開発省（MSSD)、MBHTE、保健省とその住民開発委員会、バンサモロのイスラム諮問委員会と共同で設計にあたり、確実に理解できる内容にしなくてはならない。*カリキュラム開発のサポートは、プラン・インターナショナルの「Comprehensive Sexuality Education Programme Standards」、「Conversations That Matter」、「Adolescent and Parenting Life Skills Package」にも記載されている。*

03 以下の行動を通して、思春期の女の子の家族と地域社会に既存のユースをサポート・ケアする能力を強化する。

3.1 政府が運営する条件付現金給付と社会保護プログラムである「社会福祉・開発改革プロジェクト」（4Ps）は、その支援対象を子どもを持つユースや若い養育者にまで拡大し、最も弱い立場にある家庭を対象に女性の貯蓄グループや小規模融資など収入創出機会を提供するべきである。

3.2 親業への取り組みは各コミュニティのニーズに合わせて、エビデンスに基づくカリキュラムにするべきである。したがって、カリキュラムには、子どもの保護、ポジティブな親業、子どもの権利、女の子と女性の権利、イスラム家庭での親業が含まれ、早すぎる結婚の意思決定における親の前向きな役割に関するグループディスカッション、親が家庭でSRHRに関する前向きなメッセージや情報を発信するためのスキル構築支援 、早すぎる結婚につながる噂が広まった状況下での 大人の役割、信頼を深めるための親子関係の強化、などが考えられる。プラン・インターナショナルのガイダンス「Adolescent and Parenting Life skills in Crises」、および「Champions of Change Programme Modules on Inter-Generational Dialogues」 を参照。

3.3 LGUを通じた内務・地方自治省の技術支援は、子どもの権利と最善の利益が確実に守られるよう、何度となく緊急事態下に置かれるコミュニティにおいて、早すぎる結婚、親密なパートナーからの暴力、いじめなど、開発と人道セクターにまたがる保護の懸念に対処する公式・非公式のコミュニティ組織の連携を強化する必要がある。

3.4 不安と暴力の脅威に対処するために、女性主導のCSOと人道的開発を目指す各NGOは、コミュニティを基盤とした平和維持構造を強化する平和構築プログラムを実施し、保健・社会サービスの提供者とプログラムスタッフ、そしてユースとその家族がそれぞれ安心して働き、サービスやプログラムに参加できるようにする必要がある。

04 以下の行動を通じて、ユースを支援する制度と組織を強化する。

4.1 地域児童福祉小委員会（RSCWC）は、コミュニティ、フェミニスト団体、CSO、NGO、政府機関、INGO、その他主要関係者の調整役として、思春期のウェルビーイング（幸せ）を促進するプログラムや政策を監視し、地域全体で避難生活を送るユースのための政策とプログラムの計画・実施・監視・評価の調整にあたるべきである。

4.2 また、地域児童福祉小委員会は、早すぎる結婚プログラムへの投資、統合、学習を増やすために、ユースプログラムに関して、国およびINGOのサービス提供者（開発・人道領域 の両方）と政府機関の間の調整を強化するべきである。

4.3 子どもの保護とジェンダーに基づく暴力（CPGBV）ワーキンググループ (WG)は、CPとGBVの人道支援機関の間、さらにBARMMの政策・プログラム関係者との間の調整を支援し、強化または統合されたプログラム が、危機と強制 移住の期間とその後の女の子、家族、コミュニティのニーズを満たすようにする必要がある。

4.4 初等・高等・技術教育省は、生徒と教師の定着率を高め、BARMMのユースの教育成果を向上するために、既存のツールやINGOのパートナーシップを活用すべきである。

さらに、初等・高等・技術教育省は、ユース、特に既婚の女の子など社会的経済的に最も困難な状況に置かれたユースが確実に学びとライフ・スキルを身に着ける機会を持てるインクルーシブな環境をつくるために、ユースの教育・経済参加に向けた投資を共に増やすべきである。

4.5 社会サービス開発省は、CPGBV WG の CEFM タスクチームと LGU を通じて、将来の大規模な人道的災害や紛争に関連した再度の強制移住に備え、子どもの保護と問い合わせシステムが迅速に強化され、早すぎる結婚対策が幅広い人道的対応の中で優先されるように、準備計画が実施されていることを確認すべきである。

4.6 社会サービス・開発省は、フェミニスト団、NGO、INGOと協力し、早すぎる結婚など特定のCPGBVのリスクに対処するサービス提供者の能力を強化すべきである。これには、ユースにやさしい保健・社会サービスを実現するため、直接サービスの提供にあたる者を対象にした明確な意義と態度を身に着けるトレーニングの実施などの活動が含まれる場合がある。

4.7 人道支援に従事する者は、避難民家族が受け入れ先の家族に頼らざるを得ない状況に陥らないよう、避難施設へのアクセス向上や定住への移行などの支援サービスと並行して経済的機会を増やすよう努めるべきだ。

4.8 人道支援に従事する者は、娘を結婚させて別の家族単位を形成させ、別個の支援パッケージを受け取らせる、という動機を親に与える現在の仕組みについて議論するべきである。配偶者の一方が18歳未満の世帯の登録方法を見直し、そのような事態を抑止する必要がある。

4.9 人道支援に従事する者は、避難施設や一時避難場所でのGBVリスク軽減・防止プログラムを強化し、避難民の女の子や女性に対するセクシャルハラスメントを防止し、こうした場所の全体的な安全性を向上させなくてはならない。

05 女の子や女性に対する有害なジェンダー規範の根源である家父長制の崩壊を促すことができる以下のアプローチを通じて 、変化 を可能にする社会経済環境を強化する。

5.1 資金提供者、BARMMの政策立案者、サービス提供者、NGO、INGO、CSO、その他の組織は、家父長制のシステム・構造の解体、経済的平等の促進、ジェンダー差別に対処するプログラムの実施に向け、長期の資金調達と人材への投資を行う必要がある。このプログラム は、MSSD とバンサモロ女性委員会 が調整にあたるべきである。資金提供者やBARMM政府は、しっかりとしたプログラム評価を含めた長期的な早すぎる結婚の防止・対策プログラム のための資金と投資を増額し予算に計上するべきだ。

このプログラムには、コミュニティ主導のプログラムや、結婚年齢を上げて早すぎる結婚に対応・防止するための戦略をより機能的に実施するための部門横断的な取り組みが含まれ、教育、保健、生計、MHPSSサービスその他のサービスと組み合わせて条件付現金給付を利用することが考えられる。

5.2 BARMM災害発生に関する緊急行動、内務省、地方政府の見直しでは、災害リスク軽減と緊急時計画を拡充して、事前に配置された支援と分配計画の共有を行い、避難民と受け入れコミュニティの間でリソースへの公平なアクセスを確保しなくてはならない。

5.3 社会福祉開発省および地域児童福祉小委員会は、セクターを越えて連携し、BARMMにおける早すぎる結婚の発生状況についてデータベースを構築し、監視する必要がある。また、子どもの保護のための地方協議会 、例えば人身取引や子ども・女性への暴力に対する地方委員会、特にBARMMにおけるCPGBV WGと連携した活動が求められる。

政策と提言に向けた提案

調査結果から、BARMMでは、思春期の女の子が結婚後スティグマやいじめを受けることが非常に 多いにもかかわらず、早すぎる結婚が一般的に受け入れられていることがわかった。また、データ収集の時点でのBARMMの既存の法的枠組みは、ジェンダー不平等の永続化を許す環境をつくり出しており、女の子、女性、コミュニティおよび各組織には有害なジェンダー規範を拒否する法的後ろ盾がないため、早すぎる結婚のリスクと発生率が悪化している実態が明らかになった。

1987年7月6日、大統領府はフィリピン家族法に署名し、結婚の法定年齢を18歳としたが、例外的に、イスラム教徒のフィリピン人と先住民族は早すぎる結婚を認める慣習的な婚姻法を実践できるとした。

2021年12月10日、大統領府は共和国法第115961号（共和国法第115961)を可決し、18歳未満の者の結婚を禁止し、法律違反に対する罰則を定めた。また、この法律には早すぎる結婚防止のためのプログラムの実施を促進するための具体的な措置も盛り込まれているこの法律は、データの収集・分析が完了後、上院と下院で制定された。しかし、実態としてはむしろ、ユースの女の子が早すぎる結婚のリスクに脅かされないジェンダー平等がすすんだ女の子と家族を支えるコミュニティづくりを確実にすすめ、既婚の女の子がさらなる被害を受けないよう、法律をどのように実施するべきなのか、この調査で得たエビデンスを通して知る結果となった。

以下の政策提言は、新しい法案と全体的な政策環境が、エビデンスに基づくアプローチによって確実にBARMMにおける早すぎる結婚の軽減と対応を支援することを目的としている。すべての政策が効果的に実施され広く周知されるためには、長期的かつ十分な経済的、人的、構造的リソースによる支援が必要である。

06 共和国法第115961号の説明責任 は、以下の行動を通じて果たされるべきである。

6.1 BARMM議会、地域政府機関、LGU、資金提供者らは、適用される法律と政策についてBARMM内の地域関係者間およびコミュニティ間で周知がすすみ知識が深まるよう、共和国法第115961号の説明責任と社会への浸透に向けて資金その他必要なリソースを配分する必要がある。

6.2 州、市、町、バランガイレベルの地方政府は、共和国法第 115961号を採択し、地域での適用を認める条例を制定する。条例は、共和国法第11596号に関する意識啓発キャンペーンも含むものとし、早すぎる結婚に関する法的枠組みが新しくなったことへの周知を図るべきである。また、条例には、早すぎる結婚のプログラムに加え、早すぎる結婚のリスクにさらされている女の子やすでに結婚している女の子、強制移住した女の子に対応するためのプログラム を含めるべきである。さらに、条例では、女の子の支援向上に向けて、事例管理を含むコミュニティに既存の子ども保護システムを強化する戦略の骨子を明らかにする必要がある。

6.3 国会、社会福祉開発省、初等 ・高等・技術教育省、内務省・地方政府などのBARMM地方政府機関は、既婚あるいは結婚経験のある女の子が共和国法第115961号によって、決してこれ以上被害に遭わないよう、連携する必要がある。法の改正案は、既婚の女の子のニーズと優先事項に確実に対処し、さらなるスティグマや孤立、権利の制限を受けることがないよう、既婚の女の子の実体験から得た情報に基づいたものでなくてはならない。フェミニスト団体、NGO、各コミュニティ、そして女の子たちと直接協力しながら、共和国法の適用によって起こりうる予期せぬ結果を把握し、既婚の 女の子を保護するための戦略を固める必要がある。

6.4 女性主導のフェミニストCSO、ユース組織、国連機関、人道支援関係者は、法的プロセスを通じて思春期の女の子を保護する修復的司法 の実践を提唱すべきである。

修復的司法には、非合法な行為 への対応に家族やコミュニティの関与を増やすための様々な非公式の方策が含まれる。上記の関係者らは、思春期の女の子が結婚後や出産後にさらなるスティグマを受け孤立に陥ることがないよう、そのためのシステムが確実に整備されるよう、思春期の女の子に参加を求めるべきである。

6.5 既婚の女の子とその家族、コミュニティ、伝統的なイスラム教の宗教的指導者は、そのようなシステムの設計、実施、そして監視を主導し、それ が確実に状況に対応した既婚の女の子のニーズと優先事項に沿ったものになるよう目指さなくてはならない。

07 以下の活動を通じて、公平な子どものケアなどのジェンダー平等と社会経済的平等を促進する経済・社会構造改革政策を提唱し、実施する。

7.1 BARMM政府、フィリピンのプラン・インターナショナル、国連機関、資金提供者らは、思春期の女の子や女性が男の子や男性と力を合わせて市民活動や啓発活動のスキルを高め、彼女たちにかかわる政策の立案と実施に意味のある貢献を果たすことができるよう、研修、プログラム、柔軟な資金提供に投資すべきである。女性主導のフェミニストCSO、ユース組織、その他の国の人道支援機関は、それぞれの強みを生かした参加型訓練方法を用いて、ユースとコミュニティが早すぎる結婚の啓発活動 を推進できる能力を養うべきである。

これは、経済・社会変革のための政策立案と実施に向け、州や地域レベルのさまざまな訓練機関と密に 連携して行われるべきである。また、BARMM政府は、ユース自身が保護の促進を後押しできるよう、コミュニティを基盤とする地域の監視・執行システムにおけるユースの役割と関与を強化すべきである。

7.2 BARMMにおける早すぎる結婚の政策では、根強いジェンダーと社会経済的不平等の基盤となっている経済システムと構造に取り組むべきである。こうした政策には、女の子や女性の正規・非正規の教育・学習機会へのアクセスや、公平な労働参加 と報酬へのアクセスを増やすような、ジェンダー平等を促進する構造的な経済政策への取り組みが含まれるかもしれない。

08 フェミニスト主導の政策提言を強化するとともに、他のすべての地域の政策や規制を見直し、以下の活動を通して早すぎる結婚の禁止と不公平なジェンダー規範への取り組みを進める。

8.1 BARMMの主要省庁、政府指導者、ユース主体の組織、CSOは、フェミニスト組織と連携の下、早すぎる結婚の政策と啓発活動 が公平な経済・社会の変化を促すようにすべきである。啓発活動には、既婚の 学校に通っていないユース、イスラム教徒や先住民、避難民のコミュニティが含まれるべきである。

8.2 BARMMの省庁は、コミュニティ主導の啓発活動を支援し、その支援の下で早すぎる結婚の根絶を求める活動家と女性主導のフェミニストCSOが、MRL、伝統的なコミュニティ指導者さらにユース自身と協力して、子どもの権利と早すぎる結婚の法的枠組みに対するフェミニストのアプローチを強化するプログラムを主導していく必要がある。

8.3 BARMM議会は、ジェンダーと開発に関する条例と、早すぎる結婚の禁止、性と生殖に関する健康と権利の促進、思春期の妊娠の防止と共和国法11313（安全地帯法）の実施、ジェンダーに基づくセクシャルハラスメント排除に関連する政策の見直しを行い、それらが共和国法115961の実施と整合していることを確認しなくてはならない。その見直しに基づき、議会は大統領令1083の改正案を提出し、それによってセーフガードが導入され、共和国法115961の実施において子どもとユースの最善の利益と福祉が確実に維持されることが可能になる。

研究提言

この研究は、BARMMにおける様々な状況下で、複数領域にまたがって早すぎる結婚を拡大させている複雑な要因について、エビデンスの不足を埋める一方で、思春期の女の子と家族、コミュニティ、さらに早すぎる結婚のリスクから彼女たちを守る、より広い地域システムが持つ適応力と可能性を明らかにした。また、社会経済的不平等やジェンダー不平等を解消することの重要性も浮き彫りにした。しかし、研究で明らかにできていない欠陥もまだ残っている。

本研究で裏付けられた欠陥に基づき、今後の研究について以下の提言を行う。



01 調査にあたる研究者は、調査結果をもとに、思春期の若者を含むコミュニティと協力してコミュニティ主導の早すぎる結婚プログラムの厳密な評価を実施し、危機的状況下にある女の子のニーズに応えるとともに早すぎる結婚を終わらせるために何が有効で何が有効でないかについてエビデンスの土台を固めるべきである。評価については、活動のどの要素が効果的であるか、また、女の子とその家族の健康、ウェルビーイング（幸せ）、経済、市民生活に対する取り組みの長期的影響の評価を目的として行う。

02 ユースのソーシャルメディアの利用と早すぎる結婚の因果関係を明らかにするためには、さらなる調査が必要だ。さらに、ユースとその家族にとって何が早すぎる結婚のきっかけとなり、その後模索を経て、拒否あるいは受け入れるまでの意思決定の過程をさらに理解する必要がある。

03 現場で活動にあたる者が思春期の女の子たちのニーズに合ったプログラムやサービスを提供し、早すぎる結婚を防止し、それに代わる機会を提供できるよう、さらなる研究によって結婚後の実体験を一層深く知る必要がある。

04 早すぎる結婚が招く重大な結果が中途退学であり、これは女の子とその家族の収入や健康に世代を超えた悪影響を及ぼす。しかしながら 、人道的な危機的状況下で既婚の女の子の教育へのアクセスを改善する効果的な戦略を裏付けるエビデンスは乏しい。避難民や結婚した女の子が学校に通い続けるた めの持続可能な解決策を見つけるためには、研究者と問題の当事者が調査で得た知見を社会生活に還元して現状を改善することを目的とした実践と研究を統合したアクションリサーチが必要である。

05 BARMMにおける早すぎる結婚の広がりに関する実態調査は、州レベルの自動福祉協議会と連携してPSAが実施し、最もリスクの高いコミュニティ（例：避難民、低所得者、学校に通っていないユース）を対象としたジェンダートランスフォーマティブなプログラムの設計に役立てるべきだ。その調査結果は、政策やプログラム改革のためのエビデンスに基づいた提言を通じて、ニーズとリスクが最も深刻なコミュニティへのリソースを増やすために活用されるべきだ。

06 この調査により、思春期の女の子（および男の子）が安全に遊び、交流し、社会性を身に着け、学び、ニーズに応じたプログラム やサービスを受けられるコミュニティ空間が明らかに不足していることが判明した。
しかし、思春期の女の子の安全な空間が、人道的危機的状況下での早すぎる結婚の防止と対策に効果的 なアプローチとなるのかについては、さらに調査が必要である。思春期の女の子の安全な空間を評価する際には、安全な空間がどの程度ユースの多様な集団の間に信頼を築いて仲間同士の関係を育み、コミュニティ内の深刻な いじめ、差別、スティグマに対抗しうる場として機能するかについても調査する必要がある。



06

結論



本研究は、早すぎる結婚の既存のリスクが、強制移住や紛争下でさらに悪化していることを裏付ける現在進行中のエビデンスの集積の一端を担うものである。女の子を特に結婚に向かわせるような強制移住 特有の新たなリスクの存在も浮かび上がる中で、本研究は、思春期の女の子やコミュニティの人々と協働 することによってエビデンスの不足を埋め、紛争やそれに伴う強制移住を余儀なくされた思春期の女の子のニーズと優先事項の理解に役立てることができた。その結果、一部の地域だけに特有な要因も含み、BARMMにおける早すぎる結婚の8つの要因が明らかになった。

1. 紛争や災害に関連した強制移住
2. 思春期の女の子の意思決定力の弱さ
3. 自己犠牲と義務感
4. 家族の名誉を守るためのユースの性のコントロール
5. 貧困と安定した収入創出活動へのアクセス不足
6. 質の高い教育へのアクセス不足
7. 早すぎる結婚をめぐるイスラム教の解釈の違い
8. 法的環境の整備

また、紛争による強制移住やその他の人道的危機により、上記の要因が早すぎる結婚につながるリスクを悪化させていることも実証された。

調査の結果、早すぎる結婚の根底にはジェンダー・社会経済的不平等があり、そのため思春期の女の子は自分の人生の決断をする際に声を上げられない実態が確認された。

親や仲間、周囲の圧力で早すぎる結婚に同意せざるを得なくなり、親や家族への義務感から自分の願望を犠牲にするユースの女の子たち。そのほとんどは、早すぎる結婚をめぐる自身 の決断に対して当事者意識を持っており、中には自ら早すぎる結婚のきっかけをつくる者や、貧困や児童労働、スティグマを免れる道と考える者、また、イスラム教では一般的で許容される行為だと信じている者もいる。

注目すべきは、思春期の女の子には逆境に対処するレジリエンス（回復力）があり、困難を乗り越え、コミュニティ変革の先頭に立つ可能性を持っていることも明らかになったことだ。SenseMaker®のデータからは、女の子よりも"伝統を守る"傾向の強い思春期の男の子に比べ、思春期の女の子たちは有害な社会文化規範に立ち向かう可能性が高いことが示されている。これは、家父長制社会の中では、男の子と男性が権力を持っていることを映し出しているとも言える。

コミュニティ主導のジェンダートランスフォーマティブなアプローチでBARMMにおける早すぎる結婚の防止と対策を行うことが、女の子の潜在能力を発揮する後押しになりうる。そのためには、政府、フェミニスト団体、CSO、NGO、INGO、その他主要関係者らとの連携とともに、BARMMにおけるユース支援システムの強化とジェンダー平等・社会経済的平等を推進する取り組みと政策が求められている。

REFERENCES

Abuza and Lischin (2020). The Challenges Facing the Philippines' Bangsamoro Autonomous Region at One Year. https://www.usip.org/publications/2020/06/challenges-facing-philippines-bangsamoro-autonomous-region-one-year.

ACAPS: https://www.acaps.org/country/philippines/crisis/mindanao-conflict.

Ali, F.A. (2018). "Understanding the role of gender relations in radicalising and recruiting young Muslim women in higher learning institutions in Kenya." The African Review. 45 (1). Pp. 70-95. https://rusieurope.eu/sites/default/files/understanding_the_role_of_gender_relations_in_radicalising_and_recruiting_young_muslim_women_in_higher_learning_institutions_in_kenya.pdf .

Alipala, J. (2011, October 20). "19 soldiers slain in Basilan." Inquirer Online. https://newsinfo.inquirer.net/78739/19-soldiers-slain-in-basilan.

Alipala, J. (2015, December 20). "Malaysian jihadist among 26 Abu Sayyaf men killed in Basilan ops – military." Inquirer Online. https://globalnation.inquirer.net/133997/malaysian-jihadist-among-26-abu-sayyaf-men-killed-in-basilan-ops-military.

Amnesty International (2017, November 17). Philippines: 'Battle of Marawi' leaves trail of death and destruction. Press release. https://www.amnesty.org/en/latest/press-release/2017/11/philippines-battle-of-marawi-leaves-trail-of-death-and-destruction/.

Amzat, J. (2020). "Faith Effect and Voice on Early Marriage in a Nigerian State." SAGE Journals. https://journals.sagepub.com/doi/full/10.1177/2158244020919513.

Anecdote Circles. (2021, October 29). In Cynefin.io. https://cynefin.io/wiki/Anecdote_circles.

Asia Foundation and Rappler (2018). Understanding violent extremism: Messaging and recruitment strategies on social media in the Philippines. https://asiafoundation.org/wp-content/uploads/2019/02/Understanding-Violent-Extremism-Messaging-and-Recruitment-on-Social-Media-in-the-Philippines.pdf

Austrian, K. et al. (2020). "The impact of the Adolescent Girls Empowerment Program (AGEP) on short and long term social, economic, education and fertility outcomes: a cluster randomized controlled trial in Zambia," BMC Public Health 20, 349. https://doi.org/10.1186/s12889-020-08468-0.

Azuine, R.E. and G.K. Singh, G.K. (2019). "Mentoring, Bullying, and Educational Outcomes Among US School-Aged Children 6-17 Years," J Sch Health (2019 Apr) 89(4):267-278. doi: 10.1111/josh.12735. Epub (7 Feb) PMID: 30734289

Balana, C. & K. Manlupig (2015, February 26). "AFP launches all-out offensive against BIFF." Inquirer Online. https://newsinfo.inquirer.net/675424/afp-launches-all-out-offensive-against-biff .

Bartels, S.A et al. (2017). "Making sense of child, early and forced marriage among Syrian refugee girls: a mixed methods study in Lebanon." BMJ Global Health. https://gh.bmj.com/content/bmjgh/3/1/e000509.full.pdf.

Bergonia, T. (2019). "US-based data group ranks PH fourth most dangerous place in the world for civilians." Inquirer Online. https://globalnation.inquirer.net/177866/us-based-data-group-ranks-ph-fourth-most-dangerous-place-in-the-world-for-civilians.

Birchall, J. (2018). Early marriage, pregnancy and girl child school dropout. K4D Helpdesk Report. Brighton, UK: Institute of Development Studies.

Blanc, E. and E. Strobl (2016). "Assessing the Impact of Typhoons on Rice Production in the Philippines." Journal of Applied Meteorology and Climatology. 55. Pp. 993–1007. https://journals.ametsoc.org/doi/10.1175/JAMC-D-15-0214.1.

Blankenship, K.M. et al. (2006). "Structural interventions: concepts, challenges and opportunities for research." Journal of urban health: bulletin of the New York Academy of Medicine. Vol. 83,1: 59-72. doi:10.1007/s11524-005-9007-4.

Bronfenbrenner, Urie (1994). "Ecological models of human development." Readings on the development of children 2.1: 37-43.

Bronfenbrenner Urie. (2009). The Ecology of Human Development. Harvard University Press.

Buchanan, E. (2019). "Born to be married – Addressing early and forced marriage in Nyal, South Sudan," Oxfam.

Chae, Sophia and Thoai D. Ngo (2017). "The Global State of Evidence on Interventions to Prevent Child Marriage," GIRL Center Research Brief No. 1. New York: Population Council.Cervantes, F.M. (2018, October 11). "Solons file anti-child marriage bill." Philippine News Agency. https://www.pna.gov.ph/articles/1050733.

Chae, S. and T.D. Ngo (2017). "The Global State of Evidence on Interventions to Prevent Child Marriage." GIRL Center Research Brief No. 1. Population Council. New York. https://knowledgecommons.popcouncil.org/departments_sbsr-pgy/533.

Chandra-Mouli V. and M. Plesons (2021, May). "A Groundbreaking Systematic Review, but That Alone Is Not Enough to Change the Course of Programming on Child Marriage Prevention." J Adolesc Health. 68(5):833-835. doi: 10.1016/j.jadohealth.2021.02.016. PMID: 33896548.

Cislaghi, Beniamino and Lori Heise (2019, June). "Using social norms theory for health promotion in low-income countries," Health Promotion International, Volume 34, Issue 3, pages 616–623, https://doi.org/10.1093/heapro/day017.

Clark, S. (2004). “Early marriage and HIV risk in sub-Saharan Africa.” Studies in Family Planning, 35(3). Pp. 149–160.

Coletta, N.J. (2010). The Search for Durable Solutions: Armed Conflict and Forced Displacement in Mindanao, Philippines. Worldbank. Washington D.C. https://documents1.worldbank.org/curated/en/255471468297544908/pdf/638850WP0Phili00Box0361531B0PUBLIC0.pdf

Compact for young people in humanitarian action, (nNo date year). “Data Collection & Age Disaggregation for young people in humanitarian action.”. https://static1.squarespace.com/static/5b2d24e39d5abbe187e75234/t/5dfa5c8dcda8467a3e88e89c/1576688782434/TF5.pdf

Conde, C.H. (2009, August 13). “23 Filipino Soldiers Killed in Clashes.” The New York Times. https://www.nytimes.com/2009/08/14/world/asia/14phils.html

Department of Social Welfare and Development (DSWD) (2009). 2009 Annual Report. Quezon City. https://transparency.dswd.gov.ph/files/ar/2009DSWD_annual_report.pdf
DHS Programme (2018, October) National Demographic and Health Survey 2017. USAID & Philippine Statistic Authority (PSA). https://psa.gov.ph/sites/default/files/PHILIPPINE%20NATIONAL%20DEMOGRAPHIC%20AND%20HEALTH%20SURVEY%202017_new.pdf.

Dwyer, L. and R. Cagoco-Guiam (2013). “Gender and conflict in Mindanao.” The Asia Foundation. https://www.ndi.org/sites/default/files/Gender%20and%20Conflict%20in%20Mindanao.pdf.

Ettekal, A. and J. Mahoney (2017). “Ecological Systems Theory.” The SAGE Encyclopedia of Out-of-School Learning. DOI:10.4135/9781483385198.n94.

Falcatan, R. (2018, August 9). “30,000 flee huge fire in Sulu.” Rappler. https://r3.rappler.com/nation/208176-30,000-flee-huge-fire-in-sulu

Fall, C.H. et al. (2015). “Association between maternal age at childbirth and child and adult outcomes in the offspring: a prospective studies in five low-income and middle-income countries (COHORTS collaboration).” The Lancet Global Health. 3(7):e366–e77. https://doi.org/10.1016/S2214-109X(15)00038-8. PMID: 25999096.

Gardner, F. (2017). “Parenting Interventions: How well do they transport from one country to another?” Innocenti Research Briefs no. 2017_10.

Gavilan, J. (2017, May 28). “FAST FACTS: Poverty in Mindanao.” Rappler. https://www.rappler.com/newsbreak/iq/171135-fast-facts-poverty-mindanao.

Glinski, A.M., M. Sexton, M., and L. Meyers (2015). The USAID Child, Early, and Forced Marriage Resource Guide Task Order. Banyan Global. Washington, DC. https://www.usaid.gov/sites/default/files/documents/1865/USAID_child marriage_Resource-Guide.pdf.

Global Gender Gap Report (2018). Insight Report. World Economic Forum. Geneva, Switzerland. https://www.weforum.org/reports/the-global-gender-gap-report-2018.

GMA (2007, December 27). “Personalities linked to Batasan blast not delaying probe – lawyer.” GMA News Online. https://www.gmanetwork.com/news/news/nation/74375/personalities-linked-to-batasan-blast-not-delaying-probe-lawyer/story.

GMA (2009, January 29). “Mayor, 3 others killed in Basilan ambush – police.” GMA News Online. https://www.gmanetwork.com/news/news/regions/146539/mayor-3-others-killed-in-basilan-ambush-police/story.

Goldfarb, E.S., and L.D. Lieberman (2021). “Three Decades of Research: The Case for Comprehensive Sex Education,” J Adolesc Health (2021 Jan) 68(1):13-27 (2021 Jan) . doi: 10.1016/j.jadohealth.2020.07.036. Epub 2020 Oct 12. PMID: 33059958.

Gordo, C. (2018, August 22). Breaking the Cycle Together. Oxfam Philippines. https://philippines.oxfam.org/latest/blogs/breaking-cycle-together.

Gov.ph (n.d.) Official Website of Maguindanao Province. General Information. http://www.maguindanao.gov.ph/images/profile/general_info.pdf.

Greene, M.E. and E. Stiefvater (2019). Social and gender norms and child marriage: A reflection on issues, evidence and areas of inquiry in the field. ALIGN: London.

Gunaratna, R. (2016, January 17). “Islamic State Branches in Southeast Asia – Analysis.” Eurasia Review News and Analysis. https://www.eurasiareview.com/17012016-islamic-state-branches-in-southeast-asia-analysis.

Heintze, H-J. et al. (2018). World Risk Report. Focus: Child protection and children’s rights. Bündnis Entwicklung Hilft and Ruhr University Bochum – Institute for International Law of Peace and Armed Conflict (IFHV). https://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/WorldRiskReport-2018.pdf.

Hunersen, K., W.C. Robinson, N. Krishnapalan, and J. Metzler. (2020). Child Marriage in Humanitarian Settings in the Arab States Region: Study results from Djibouti, Egypt, Kurdistan Region of Iraq and Yemen. New York: Women’s Refugee Commission. https://www.womensrefugeecommission.org/wp-content/uploads/2020/12/Child-marriage-Arab-states-synthesis-report-FINAL.pdf.

ICMEC (2013). Child Marriage in the Middle East and North Africa. White Paper. Alexandria, VA. http://www.icmec.org/en_X1/icmec_publications/Child_Marriage_in_the_MENA_Region.pdf.

Internal Displacement Monitoring Centre (2013, May 13). Comprehensive response to wave of displacement crises needed. Norwegian Refugee Council. https://reliefweb.int/sites/reliefweb.int/files/resources/201312-ap-philippines-overview-en.pdf.

Karlan, D. et al. (2017) “Impact of savings groups on the lives of the poor.” Proc Natl Acad Sci U S A (21 Mar 2017) 114(12):3079-3084. doi: 10.1073/pnas.1611520114. Epub (7 Mar 2017). PMID: 28270615; PMCID: PMC5373400.

Kamlian, J. (2009, December 5). Clan Feuds in Bangsamoroland. Europe Solidaire Sans Frontieres. http://www.europe-solidaire.org/spip.php?article15778.

Kidman R. (2017, April). “Child marriage and intimate partner violence: a comparative study of 34 countries.” Int J Epidemiol. 1;46(2):662-675. doi: 10.1093/ije/dyw225. PMID: 27733435.

Knerr, W., F. Gardner, and L. Cluver. (2013) “Improving positive parenting skills and reducing harsh and abusive parenting in low- and middle-income countries: a systematic review,” Prev Sci. (14 Aug 2013)(4):352-63. doi: 10.1007/s11121-012-0314-1. PMID: 23315023.

Koždoňová, Alžběta. 2020. “Supporting Adolescents: A Systematic Review of Life Skills Programs Targeting Gender-Based Violence, Sexual and Reproductive Health and Rights, and Mental Health and Psychosocial Support in the Countries of the Global South.”

Jennings, L. et al. (2019) “A forgotten group during humanitarian crises: a systematic review of sexual and reproductive health interventions for young people including adolescents in humanitarian settings,” Confl Health 13, 57. https://doi.org/10.1186/s13031-019-0240-y.

Lancion, C. (1995, December). Fast Facts about Philippine Provinces. Tahanan Books. Philippines. https://books.google.com.ph/books/about/Fast_Facts_about_Philippine_Provinces.html?id=r0EOAQAAMAAJ&redir_esc=y

Lara Jr. F.J., and Champain, P. (2009) Inclusive Peace in Mindanao: Revisiting the dynamics of conflict and exclusion. International Alert. https://www.international-alert.org/publications/inclusive-peace-muslim-mindanao

Lee-Rife, S., A. Malhotra, A. Warner, and A.M. Glinski (2012). “What works to prevent child marriage: a review of the evidence.” Studies in Family Planning, 43(4), 287-303.

Lingao, E. (2010, February 3). Ampatuans used public office to amass mostly illegal guns. Philippine Center for Investigative Journalism (PCIJ). https://pcij.org/article/3713/ampatuans-used-public-office-brto-amass-mostly-illegal-guns.

Leigh J. et al. (2020). Child Marriage in Humanitarian Settings in South Asia. https://www.womensrefugeecommission.org/research-resources/child-marriage-in-humanitarian-settings-in-south-asia.

Lothian, S., ed. (2018). Adolescent girls in Crisis: Voices from the Lake Chad Basin. Plan International. United Kingdom. https://plan-international.org/publications/adolescent-girls-crisis-lake-chad-basin.

Malhotra, A. (2010). The causes, consequences and solutions to forced child marriage in the developing world. International Center for Research on Women. https://www.icrw.org/files/images/Causes-Consequences-and%20Solutions-to-Forced-Child-Marriage-Anju-Malhotra-7-15-2010.pdf.

Malhotra, A. et al. (2011). Solutions to End Child Marriage. International Center for Research on Women. https://www.healthynewbornnetwork.org/hnn-content/uploads/Solutions-to-End-Child-Marriage1.pdf.

Malhotra, A. and S. Elnakib (2021). “20 Years of the Evidence Base on What Works to Prevent Child Marriage: A Systematic Review.” J Adolesc Health (2021 May) 68(5):847-862. doi: 10.1016/j.jadohealth.2020.11.017. Epub (2021 Jan 12) PMID: 33446401.

Magna Carta of Women Act of 2009. Republic Act 9710. Philippines (2009). https://pcw.gov.ph/law/republic-act-9710.

Mangosing, F. (2017, October 16). “Lorenzana confirms Isnilon Hapilon, Omar Maute killed.” Inquirer Online. https://newsinfo.inquirer.net/938221/breaking-maute-isnilon-hapilon-omar-maute-killed-confirmed-delfin-lorenzana-defense.

Manila Times (2014, January 14). “Storm surge destroys 200 houses in Sulu.” The Manila Times Online. https://www.manilatimes.net/2014/01/14/latest-stories/breakingnews/storm-surge-destroys-200-houses-in-sulu/67660.

Manulon, M. (2017, May 25). The Registration of Marriage Contracted Under Islamic Law. 10th National Convention of Solemnizing Officers. Philippine Statistics Authority (PSA). http://rsso12.psa.gov.ph/sites/default/files/PDF%20files/Lectures%20and%20Presentations/10th%20NCSO.pdf.

McFarlane, J., A. Nava, H. Gilroy, and J. Maddoux. (2016). Child Brides, Forced Marriage, and Partner Violence in America. Tahirih Justice Center. https://preventforcedmarriage.org/wp-content/uploads/2016/05/Child-Brides-Forced-Marriage-and-Partner-Violence-in-America-Tip-of-an-Iceberg-Revealed.pdf.

McGeown, K. (2010, September 8). “The rise of the Ampatuan clan in the Philippines.” BBC News Online. Manila. https://www.bbc.com/news/world-asia-pacific-11139653.

Mindanao Development Authority (MinDA) (n.d.). Mindanao River Basin. Mindanao's Life Source. https://now.minda.gov.ph/mindanao-river-basin.

National Disaster Risk Reduction and Management Council (NDRRMC) (2009, September 27)Final Report on Typhoon Ondoy and Typhoon Pepeng. https://ndrrmc.gov.ph/2-uncategorised/1543-final-report-on-tropical-storm-ondoy-and-typhoon-pepeng.

National Statistics Office – Gender and Development Committee (GCOM) (2011, May). Gender Factsheet. No. 11-04.

National Water Resources Board (NWRB) (1976, October). Principal River Basins of the Philippines. National Water Resources Board. p. 12.

Nguyen, M.C. and Wodon Q. (2012). Child Marriage, Pregnancies, and the Gender Gap in Education Attainment: An Analysis Based on the Reasons for Dropping out of School. Washington, DC: The World Bank.

OCHA (No date). The Philippines, with its unique history of embracing refugees, turns inward to address IDPs. Web Stories. http://ochaimphil.github.io/Humanitarian-Bulletin/IDPsPhilippinesSept2016.html.

OHCHR. Child and forced marriage, including in humanitarian settings. https://www.ohchr.org/en/issues/women/wrgs/pages/childmarriage.aspx.

Orton, L. et al. (2016). "Group-based microfinance for collective empowerment: a systematic review of health impacts." Bull World Health Organ (1 Sep 2016) 94(9):694-704A. doi: 10.2471/BLT.15.168252. Epub (21 Jun 2016) PMID: 27708475; PMCID: PMC5034638.

Özler, B. et al. (2020). "Girl Empower – A gender transformative mentoring and cash transfer intervention to promote adolescent wellbeing: Impact findings from a cluster-randomized controlled trial in Liberia." SSM - Population Health, Volume 10, 100527,ISSN 2352-8273, https://doi.org/10.1016/j.ssmph.2019.100527.

Pangcoga, A.H. (2016, February). Child Rights Situational Analysis in the ARMM – Phase II. Save the Children Philippines. Pages 68, 78-80 (circulated only).

Pareño, R. (2014, June 21). "BIFF leader killed in clash in Basilan." Philstar Global. https://www.philstar.com/nation/2014/06/21/1337443/biff-leader-killed-clash-basilan.

Perdon, R. (2013, December 3) "Courtship and marriage among Muslim Filipinos." Bayanihan: The community newspaper of Australia. http://bayanihannews.com.au/2013/12/03/courtship-and-marriage-among-muslim-filipinos.

Philippine Commission on Women (2018). PCW presents 9 gains as nation celebrates 9th anniversary of Magna Carta of Women. https://pcw.gov.ph/pcw-presents-9-gains-as-nation/

Philippine Daily Inquirer (2015, January 27). "Most violent encounters between gov't forces and rebels." Inquirer Online. https://newsinfo.inquirer.net/668190/most-violent-encounters-between-govt-forces-and-rebels.

Philippine Statistics Authority (PSA) (2010). Q & A: Magna Carta of Women (Republic Act No. 9710). https://psa.gov.ph/content/q-magna-carta-women-republic-act-no-9710

Philippine Statistics Authority (PSA) (2017-A). Basilan Demographic and Socioeconomic Characteristics. 2015 Census of Population. Report No. 2. https://psa.gov.ph/sites/default/files/15_Basilan.pdf.

Philippine Statistics Authority (PSA) (2017-B). Lanao del Sur Demographic and Socioeconomic Characteristics. 2015 Census of Population. Report No. 2. https://psa.gov.ph/sites/default/files/15_Lanao%20del%20Sur.pdf.

Philippine Statistics Authority (PSA) (2017-C). Maguindanao Demographic and Socioeconomic Characteristics. 2015 Census of Population. Report No. 2. https://psa.gov.ph/sites/default/files/15_Maguindanao.pdf.

Philippine Statistics Authority (PSA) (2017-D). Sulu Demographic and Socioeconomic Characteristics. 2015 Census of Population. Report No. 2. https://psa.gov.ph/sites/default/files/15_Sulu.pdf.

Philippine Statistics Authority (PSA) (2018). 2018 Family and Income Expenditure Survey. https://psa.gov.ph/content/family-income-and-expenditure-survey-fies-0

Philippine Statistics Authority (PSA) and ICF (2018). Key Findings from the Philippine National Demographic and Health Survey 2017. Quezon City, Philippines, and Rockville, Maryland, USA. https://www.dhsprogramme.com/pubs/pdf/SR253/SR253.pdf

Philippine Statistics Authority (PSA) and ICF (2018). Philippines National Demographic and Health Survey 2017. Quezon City, Philippines, and Rockville, Maryland, USA: PSA and ICF.

Plan International (2017). Global Policy on Safeguarding Children and Young People. https://plan-international.org/publications/global-policy-safeguarding-children-and-young-people.

Plan International (2020). Adolescent Programming Toolkit: Guidance and Tools for Adolescent Programming and Girls' Empowerment in Crisis Settings. United Kingdom: Plan International. https://plan-international.org/publications/adolescent-programming-toolkit.

Plan International (2021). Child, Early and Forced Marriage and Unions Policy Brief. United Kingdom: Plan International. https://plan-international.org/publications/policy-brief-child-early-and-forced-marriages-and-unions.

Ptacek, J., ed. (2009). Restorative Justice and Violence against Women (Oxford University Press). https://oxford.universitypressscholarship.com/view/10.1093/acprof:oso/9780195335484.001.0001/acprof-9780195335484.

Plourde, K.F. et al. (2017). "Mentoring Interventions and the Impact of Protective Assets on the Reproductive Health of Adolescent Girls and Young Women." J Adolesc Health (2017 Aug) 61(2):131-139. doi: 10.1016/j.jadohealth.2017.03.002. Epub (17 May) PMID: 28528208.

PNA (2015, February 27). "Army, BIFF in fierce firefight in Maguindanao, thousands flee." The Manila Times Online. https://www.manilatimes.net/2015/02/27/latest-stories/breakingnews/army-biff-in-fierce-fire-fight-in-maguindanao-thousands-flee/166034.

Presler-Marshall, E. and N. Jones (2012). Charting the Future: Empowering Girls to Prevent Early Pregnancy. Overseas Development Institute (ODI). http://www.odi.org/sites/odi.org.uk/files/odi-assets/publications-opinion-files/7724.pdf.

Psaki, S., B. Mensch, E. Chaung, and A.J. Melnikas (2019). "Does education improve health in low- and middle income countries? Results from a systematic review," GIRL Center Research Brief No. 5. New York: Population Council.

Psaki, S., M. Makino, C. Misunas, E. Soler-Hampejsek, F. Zahra, et al. (2021). "Harnessing data to end child marriage: Summarizing learnings to-date," GIRL Center Research Brief No. 8. New York: Population Council.

Pulerwitz, J., R. Blum, B. Cislaghi, E. Costenbader, C. Harper, L. Heise, A. Kohli, and R. Lundgren. (2019). "Proposing a Conceptual Framework to Address Social Norms That Influence Adolescent Sexual and Reproductive Health." The Journal of adolescent health: official publication of the Society for Adolescent Medicine, 64(4S), S7–S9. https://doi.org/10.1016/j.jadohealth.2019.01.014.

QSR International Pty Ltd. (2018). NVivo (Version 12). https://www.qsrinternational.com/nvivo-qualitative-data-analysis-software/home.

RECS International, Inc., et al. (2018). Comprehensive capacity development project for the Bangsamoro. Existing Conditions of Flood and Disaster Management in Bangsamoro. Final Report. Japan International Cooperation Agency (JICA), Bangsamoro Transition Commission (BTC), Bangsamoro Development Agency (BDA). https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/12253639_01.pdf.

Rialet-Cislaghi, J. (2019). Child marriage: a major obstacle to building adolescent girls' resilience.

Richardson and Wilson. (2019) A Review of Oxfam's Project – Creating Spaces to Take Action on Violence against Women and Girls. Oxfam Canada. https://42kgab3z3i7s3rm1xf48rq44-wpengine.netdna-ssl.com/wp-content/uploads/2019/09/Creating-Spaces-Midterm-Reporting-Mid-term-Review.pdf.

Robinson W.C., K. Hunersen, J. Leigh, S. Elnakib, and J. Metzler. (2021). A Practitioner's Guide to the Ethical Conduct of Research on Child Marriage in Humanitarian Settings. New York, NY: Women's Refugee Commission. https://www.womensrefugeecommission.org/wp-content/uploads/2021/02/Practitioners-Guide-Ethical-Conduct-Research-Child-Marriage-Humanitarian-Settings-Final.pdf.

Romero, A., and J. Laude (2014, April 16). "MILF involved in clash – AFP chief." Philstar Global. https://www.philstar.com/headlines/2014/04/16/1313183/milf-involved-clash-afp-chief.

Rosalado, R.J. (2018, March 28). "Abu Sayyaf leader Jamiri surrenders in Basilan." ABS-CBN News Online. https://news.abs-cbn.com/news/03/28/18/abu-sayyaf-leader-jamiri-surrenders-in-basilan.

Stanford University (2018, August). Abu Sayyaf Group. Mapping Militant Organizations. Center for International Security and Cooperation. https://cisac.fsi.stanford.edu/mappingmilitants/profiles/abu-sayyaf-group#text_block_17334.

Stanford University (2019, May). Moro National Liberation Front. Mapping Militant Organizations. Center for International Security and Cooperation. https://stanford.app.box.com/s/wj7kp9spbtwo6rf1mah6f34dipg4l9tp.

Stark, L. et al. (2021) "The Effectiveness of Women and Girls Safe Spaces: A Systematic Review of Evidence to Address Violence Against Women and Girls in Humanitarian Contexts." Trauma, Violence, & Abuse. https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/1524838021991306.

Smerecnic, C. et al. (2010). An exploratory study of Muslim adolescents' views on sexuality: Implications for sex education and prevention. National Center for Biotechnology Information (NCBI). https://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC2940920.

Svanemyr, J., V.C. Mouli, C.S. Christiansen, and M. Mbizvo (2012). "Preventing child marriages: first international day of the girl child 'my life, my right, end child marriage.'" Reproductive Health 9. P. 31. https://reproductive-health-journal.biomedcentral.com/articles/10.1186/1742-4755-9-31.

Tanner, S. and M. O'Conner (2017). A Safe Place to Shine: Creating Opportunities and Raising Voices of Adolescent Girls in Humanitarian Settings. (New York: IRC).

Tenkorang EY (2019). "Explaining the links between child marriage and intimate partner violence: Evidence from Ghana." Child Abuse Negl. 89:48–57. https://doi.org/10.1016/j.chiabu.2019.01.004 PMID: 30622050.

Torres, W. (2007). Rido: Clan Feuding and Conflict Management in Mindanao. USAID and The Asia Foundation. https://asiafoundation.org/publication/rido-clan-feuding-and-conflict-management-in-mindanao.

Tzani-Pepelasi, C. et al. (2019) “Peer Support at Schools: the Buddy Approach as a Prevention and Intervention Strategy for School Bullying.” Int Journal of Bullying Prevention 1, 111–123. https://doi.org/10.1007/s42380-019-00011-z.

UN Convention on the Rights of the Child (1989). Definition of Children Defined in UN Convention on the Rights of the Child. United Nations. New York. http://www2.ohchr.org/english/law/crc.htm.

UNCHR and IOM Philippines (No date). Consultation with Displaced and Host Communities in Support of the UNSG High Level Panel on Internal Displacement. https://www.un.org/internal-displacement-panel/sites/www.un.org.internal-displacement-panel/files/philippines_final_interagency_report.pdf.

UNDP (2021).The Socioeconomic Impact Assessment of COVID-19 in the Bangsamoro Autonomous Region in Muslim Mindanao. https://reliefweb.int/report/philippines/socioeconomic-impact-assessment-covid-19-bangsamoro-autonomous-region-muslim.

UNFPA (2020). UNFPA projections predict calamitous impact on women’s health as COVID-19 pandemic continues. https://www.unfpa.org/press/new-unfpa-projections-predict-calamitous-impact-womens-health-covid-19-pandemic-continues.

UNFPA (2021). “Child marriage remains an urgent problem in East and Southern Africa,” ReliefWeb. https://reliefweb.int/report/world/child-marriage-remains-urgent-problem-east-and-southern-africa.

UNFPA and UNICEF (2021, Feb.). Addressing Child Marriage in Humanitarian Settings: Technical guide for staff and partners of the UNFPA–UNICEF Global Programme to End Child Marriage. https://www.unicef.org/media/92821/file/Child-marriage-humanitarian-settings-technical-guide-2021.pdf.

UNFPA, UNICEF, Bloomberg School of Public health, John Hopkins University, and Women’s Refugee Commission (2020). Child Marriage in Humanitarian Settings in South Asia. UNFPA Asia and the Pacific. https://asiapacific.unfpa.org/en/publications/child-marriage-humanitarian-settings-south-asia.

UNHCR (2012-2019). Mindanao Displacement Dashboards. Protection Cluster Philippines. http://www.protectionclusterphilippines.org.

UNHCR (2018). Profiling Internally Displaced Persons of the Marawi Conflict. http://www.protectionclusterphilippines.org/?p=1695.

UNHCR (2018, April 16). Internally Displaced Persons Protection Assessment Report (IDPPAR). Issue No. 7. Protection Cluster Philippines. http://www.protectionclusterphilippines.org/wp-content/uploads/2018/05/IDPPAR-Marawi-Displacement_Issue-07-FINAL-pdf.pdf.

UNHCR (2019, December). Mindanao Displacement Dashboard. http://www.protectionclusterphilippines.org/?p=2300.
UNHRC (2020). They have erased the dreams of my children: Children’s rights in the Syrian Arab Republic; and UN Security Council, Report of the Secretary-General on children and armed conflict. https://www.ohchr.org/EN/NewsEvents/Pages/DisplayNews.aspx?NewsID=25465.

UNHCR, et al. (2015). Inter-Agency Guidance Note: Prevention of and Response to Child Marriage, Kurdistan Region of Iraq (KRI). https://www.girlsnotbrides.org/documents/638/CM-interagency-guidance-Kurdistan-Iraq-2015.pdf.

United Nations Children’s Fund (UNICEF) (2014). Ending Child Marriage: Progress and prospects. New York. https://data.unicef.org/resources/ending-child-marriage-progress-and-prospects.

UNICEF (2014). United Nations Children’s Fund, Ending Child Marriage: Progress and prospects. https://data.unicef.org/resources/ending-child-marriage-progress-and-prospects.

UNICEF. (2015). Child Marriage: Child Marriage is a violence of human rights, but is all too common. http://data.unicef.org/child-protection/child-marriage.

UNICEF (2017). Falling through the cracks: The children of Yemen. https://www.unicef.org/yemen/reports/falling-through-cracks-children-yemen.

UNICEF (2020). Child marriage around the world (infographic). https://www.unicef.org/stories/child-marriage-around-world.

UNICEF (2021). COVID-19: A threat to progress against child marriage. https://data.unicef.org/resources/covid-19-a-threat-to-progress-against-child-marriage.

United Nations General Assembly (2014). Convention on the Elimination of All Forms of Discrimination Against Women. Joint general recommendation/general comment No. 31 of the Committee on the Elimination of Discrimination against Women and No.18 of the Committee on the Rights of the Child on harmful practices. United Nations. New York, NY.

United Nations Human Rights Office of the High Commissioner (OHCHR) (No date). Child and forced marriage, including in humanitarian settings. https://www.ohchr.org/en/issues/women/wrgs/pages/childmarriage.aspx.

Unson, J. (2006, June 24). “5 killed in Maguindanao bombing; governor survives.” Philstar Global. https://www.philstar.com/headlines/2006/06/24/343573/5-killed-maguindanao-bombing-governor-survives.

Unson, J. (2020, February 4). “Jolo fire leaves at least 2,000 families homeless.” Philstar Global. https://www.philstar.com/nation/2020/02/04/1990294/jolo-fire-leaves-least-2000-families-homeless.

Valerio, K. and A.P. Butt (2020). Sexual and reproductive health rights in Mindanao, Philippines. Oxfam Philippines. https://cng-cdn.oxfam.org/philippines.oxfam.org/s3fs-public/file_attachments/Social%20Norms%20and%20Child%20Marriage%20in%20the%0Philippines.pdf .

Van der Merwe S.E. et al. 2019. “Making Sense of Complexity: Using SenseMaker as a Research Tool.” Systems 7(2):25. https://doi.org/10.3390/systems7020025.

Virlanie Admin. (2018, November 26). Virlanie girls represent NCR, advocate ending child marriage in the Philippines. General News. Virlanie Foundation. https://www.virlanie.org/general-news/virlanie-girls-represent-ncr-advocate-ending-child-marriage-in-the-philippines/.

Wessells, M.G. (2015). “Bottom-up approaches to strengthening child protection systems: Placing children, families, and communities at the center.” Child Abuse and Neglect, 43, 8-21.

Wessells, M.G. (2018). A guide for supporting community-led child protection processes (Child Resilience Alliance: New York).

Workineh, S., G.D. Kibretb, and G. Degu. (2015, September 30) “Determinants of Early Marriage among Female Children in Sinan District, Northwest Ethiopia.” Health Science Journal, 9 (6). Ethiopia. https://www.hsj.gr/medicine/determinants-of-early-marriage-among-female-children-in-sinan-district-northwest-ethiopia.php?aid=7374.

Wikipedia. https://cynefin.io/wiki/Anecdote_circles. Last updated 15 December 2021.

Woden, Q. et al. (2017). Economic impacts of child marriage: Global synthesis brief. Washington DC: The World Bank and International Center for Research on Women. https://documents.worldbank.org/curated/en/530891498511398503/pdf/116829-WP-P151842-PUBLIC-EICM-Global-Conference-Edition-June-27.pdf.

Wodon, Q., A. Savadogo, and A. Kes. (2017). Economic Impacts of Child Marriage: Work. Earnings, and Household Welfare. Washington, DC: The World Bank and International Center for Research on Women. https://www.semanticscholar.org/paper/Economic-impacts-of-child-marriage-%3A-work%2C-earnings-Savadogo-Kes/942f4533e5e8f2aa66b897b8e55c591f67803b7d.
Women’s Refugee Commission. (No date) Child and Vulnerable Adult Safeguarding Policy (WRC). https://www.womensrefugeecommission.org/child-and-vulnerable-adult-safeguarding-policy.
Women’s Refugee Commission. (2016) Ethical Guidance for Working with Displaced Populations.

Women’s Refugee Commission. (2021) Child Marriage in Humanitarian Settings Study Overview Infographic. https://www.womensrefugeecommission.org/research-resources/child-marriage-humanitarian-settings-study-overview-infographic.

World Bank. (No date) “Resilience.” Philippines Systematic Country Diagnostic Realizing the Filipino Dream for 2040, Chapter 5. https://thedocs.worldbank.org/en/doc/855731613960789722-0070022021/original/Chapter5PhilippinesSystematicCountryDiagnosticRealizingtheFilipinoDreamfor2040.pdf. World Bank. (2005) Natural Disaster Risk Management in the Philippines: Reducing Vulnerability. Washington, DC. © World Bank. https://openknowledge.worldbank.org/handle/10986/8754. License: CC BY 3.0 IGO.

World Bank (2017, August 24). Educating Girls, Ending Child Marriage. The World Bank. https://www.worldbank.org/en/news/immersive-story/2017/08/22/educating-girls-ending-child-marriage.

World Bank (2010) Philippines—Social Welfare and Development Reform Project. Independent Evaluation Group, Project Performance Assessment Report 137065 (Washington, DC: World Bank,).

World Food Programme and The World Bank Group (2010). Violent Conflict and Displacement in Central Mindanao. Challenges for Recovery and Development. Key Findings. http://www.peacebuildingdata.org/sites/m/pdf/CentralMindanaoSurveyFull%282%29.pdf.

World Vision International (No date-A). “How do we support our children? Balloon Game. Facilitation Guide, Exploring our context-part 1.” World Vision Guidance for Integrated Programming. https://www.wvi.org/sites/default/files/ExploringOurContextPart1_1.pdf.

World Vision International (No date-B). “What assets help our children to thrive? Thread Game.” Facilitation Guide, Exploring our context-part 1. World Vision Guidance for Integrated Programming. https://www.worldvision.org/ignite/wp-content/uploads/sites/5/2019/11/6.5.a-Teacher-Resource-Exploring-Our-Context-1.pdf.

World Vision International (No date-C). “What Makes a Child Thrive? Ecological Model. Facilitation Guide, Exploring our context-part 1.” World Vision Guidance for Integrated Programming. https://www.worldvision.org/ignite/wp-content/uploads/sites/5/2019/11/6.5.a-Teacher-Resource-Exploring-Our-Context-1.pdf.

World Vision International (2015). Evaluation of Child Friendly Spaces: Findings from an inter-agency series of impact evaluations in humanitarian settings (New York and Geneva: Columbia University Mailman School of Public Health and World Vision International).

Yaya, S, E.K. Odusina, and G. Bishwajit (2019, Dec.). “Prevalence of child marriage and its impact on fertility outcomes in 34 sub-Saharan African countries.” BMC Int Health Hum Rights. 19;19(1):33. doi: 10.1186/s12914-019-0219-1. PMID: 31856810; PMCID: PMC6924035.

Yount, K.M., A. Crandall, Y.F. Cheong, T.L. Osypuk, L.M. Bates, R.T. Naved, and S.R. Schuler (2016, Dec.). “Child Marriage and Intimate Partner Violence in Rural Bangladesh: A Longitudinal Multilevel Analysis.” Demography. 53(6):1821-1852. doi: 10.1007/s13524-016-0520-8. PMID: 27812927; PMCID: PMC5568420.

PLAN INTERNATIONAL | WOMEN'S REFUGEE COMMISSION | Transforming Fragilities

OUR VOICES, OUR FUTURE:

Understanding Risks and Adaptive Capacities to Prevent and Respond to Child Marriage in the Bangsamoro Autonomous Region in Muslim Mindanao (BARMM)